

# 総社市埋蔵文化財調査年報 5

(平成6年度)

1995年8月

総社市教育委員会

# 序

総社市内には作山古墳を始め、秦原廃寺跡、備中国分寺、国分尼寺跡、鬼城山など多くの重要な遺跡があります。これらの文化財を理解し認識するためには、まだまだ調査し研究しなければならないことが多く、その責務を日ごろ痛感しております。

埋蔵文化財調査年報は、各年度に行った埋蔵文化財の調査、普及啓発活動をより早く多くの方々に活用し、理解していただくために毎年発刊しているものであります。

平成6年度は、埋蔵文化財行政にとって大きな転機となった年でした。機構改革により、新たに文化財室が設けられ、また総社市埋蔵文化財学習の館が開館し、さらに国指定「鬼城山」の発掘調査が開始されました。謎の古代山城といわれていた鬼城山の内容が明らかになっていくものと期待されております。

このほかにも調査で得られた多くの成果が、学術研究の資料として、また埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、貢献できれば幸いと考えております。

また御指導、御協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも一層の御力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成7年8月

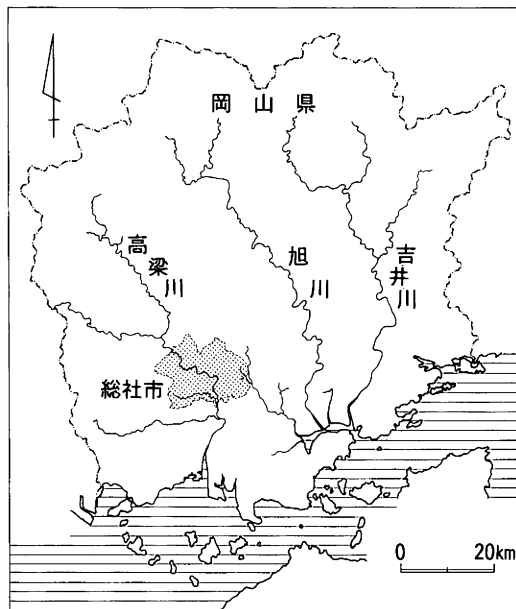
総社市教育委員会

教育長 中山英夫



## 例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が1994年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会・確認調査について、その概要をまとめたものである。
2. 本書は、各調査の担当者である村上幸雄、谷山雅彦、高田明人、平井典子、武田恭彰、前角和夫、高橋進一、松尾洋平が執筆し、それを編集したものである。それぞれ文末に執筆者名を記し、文責とする。編集は谷山が行った。
3. 遺物整理、年報作成にあたっては、西平登代子、三好理加、近藤雅子（社会教育課服部収蔵庫、1994年8月1日から総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は特記したもの以外はすべて海拔高であり、遺構実測図の方位は国土座標の入っているものを除き、すべて磁北である。
5. 本書に関係する実測図、写真、遺物等は、総社市埋蔵文化財学習の館で保管している。



第1図 位置図

# 目 次

## 序

## 例 言

### 1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

1994年度 文化財行政の概要 .....	1
-----------------------	---

### 2. 立会および確認調査概要

備中国分寺境内池の改修 .....	7
市道高松田中西阿曾線改良工事に伴う確認調査 .....	9
三須丘陵における土砂採取事業 .....	10
賃貸マンション建設に伴う立会調査 .....	12
砂川流域における遺跡分布調査—その2— .....	13
種井地区ほ場整備に伴う調査 .....	17
宮原古墳群第1号墳について .....	18
医院増築に伴う立会調査 .....	19
塔坂古墳群周辺における土砂採取事業 .....	20
生命保険会社ビル建設に伴う確認調査 .....	22
共同住宅建設に伴う調査 .....	23

### 3. 発掘調査概要

藤原北古墳群の発掘調査 .....	29
新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査	
その2（坊ヶ内遺跡） .....	31
その3（有安遺跡・有安1号墳） .....	34
その4（殿砂遺跡） .....	36
その5（高砂遺跡） .....	41
福井地内における分譲宅地造成事業に伴う発掘調査 .....	44
駅南区画整理事業に伴う発掘調査 .....	47
鬼城山第1城門跡の発掘調査 .....	50

### 4. 発掘調査報告

松井古墳 .....	55
------------	----

## 目 次

第1図 位置図	24
第2図 確認・立会調査位置 (s=1/40,000) .....	5
第3図 新本ほ場整備に伴う発掘調査位置図 (s=1/40,000) .....	6
備中国分寺境内池の改修	
第4図 調査位置図 (s=1/3,000) .....	7
第5図 出土瓦 (s=1/4) .....	8
市道高松田中西阿曾線	
第6図 確認調査位置図 (s=1/5,000) .....	9
三須丘陵における土砂採取事業	
第7図 緑山周辺地形及び古墳分布図 (『緑山古墳群』より) (s=1/5,000) ..	11
賃貸マンション建設に伴う立会調査	
第8図 立会調査位置図 (s=1/5,000) .....	12
砂川流域における遺跡分布調査—その2—	
第9図 調査地周辺図 (s=1/5,000) .....	15
種井地区ほ場整備に伴う調査	
第10図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	17
宮原古墳群第1号墳について	
第11図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	18
医院増築に伴う立会調査	
第12図 立会調査位置図 (s=1/5,000) .....	19
塔坂古墳群周辺における土砂採取事業	
第13図 確認調査地位置図 (s=1/10,000) ..	21
生命保険会社ビル建設に伴う確認調査	
第14図 確認調査位置図 (s=1/5,000) .....	22
共同住宅建設に伴う調査	
第15図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	23
第16図 遺構配置図 (s=1/300) .....	24
第17図 土壌-1出土遺物 (s=1/4) .....	24
第18図 遺構に伴わない遺物 (s=1/4) .....	25
第19図 立会調査区と真壁遺跡 (s=1/5,000) ..	26
新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査	
坊ヶ内遺跡	
第20図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	31
第21図 坊ヶ内遺跡遺構配置図 (s=1/600) ..	32
有安遺跡・有安1号墳	
第22図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	34
第23図 有安遺跡遺構配置図 (s=1/300) ..	35
殿砂遺跡	
第24図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	36
第25図 殿砂遺跡遺構配置図 (s=1/600) ..	37
第26図 出土遺物1 (s=1/4) .....	38
第27図 出土遺物2 (s=1/4) .....	39
高砂遺跡	
第28図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	41
第29図 高砂遺跡遺構配置図 (s=1/600) ..	42
福井地内における分譲宅地造成事業に伴う	
発掘調査	
第30図 調査位置図 (s=1/5,000) .....	44
第31図 出土遺物 (s=1/4) .....	46
駅南区画整理事業に伴う発掘調査	
第32図 調査区位置図 (s=1/6,000) .....	47
鬼城山第1城門跡の発掘調査	
第33図 鬼城山城壘 (s=1/8,000) .....	51
松井古墳	
第34図～第50図 松井古墳挿図 .....	58

## 目 次

表1 立会・確認調査一覧表 .....	3・4
---------------------	-----

## 目 次

備中国分寺境内池の改修	
第1図版 工事状況 .....	8
砂川流域における遺跡分布調査—その2—	
第2図版 調査地遠景 .....	14

<b>塔坂古墳群周辺における土砂採取事業</b>		<b>高砂遺跡</b>	
第3図版	炭 窯	第20図版	調査区遠景（北から）
第4図版	新規古墳	第21図版	調査区全景（真上から）
<b>共同住宅建設に伴う調査</b>		<b>福井地内における分譲宅地造成事業に伴う発掘調査</b>	
第5図版	調査区全景	第22図版	調査地遠景
第6図版	遺構検出状況	第23図版	7号墳遺物出土状況
<b>立会・確認調査</b>		第24図版	10号墳遺物出土状況
第7図版	賃貸マンション建設（北東部）	<b>駅南区画整理事業に伴う発掘調査</b>	
第8図版	賃貸マンション建設（南西部）	第25図版	西三軒屋遺跡Ⅰ区上層全景（東から）
第9図版	医院増築（土層断面）	第26図版	屋毛手遺跡上層空撮（真上から）
第10図版	ガンソリスタンド建設（土層断面）	第27図版	屋毛手遺跡下層全景（西から）
第11図版	工場増築（土層断面）	<b>鬼城山第1城門跡の発掘調査</b>	
第12図版	ビル建設（トレンチ南から）	第28図版	第1城門跡（空中撮影）
<b>藤原北古墳群の発掘調査概要</b>		第29図版	第1城門跡近景（南東から）
第13図版	調査区全景（東から、空中撮影）	第30図版	第1城門跡近景（北東から）
<b>新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査</b>		第31図版	唐居敷近景（北西から）
<b>坊ヶ内遺跡</b>		第32図版	版築の状況（東から）
第14図版	調査区遠景（南から）	第33図版	門柱土層断面（東から）
第15図版	調査区近景（東から）	<b>松井古墳</b>	
<b>有安遺跡・有安1号墳</b>		第34～43図版	松井古墳図版
第16図版	調査地遠景		
第17図版	調査地近景		
<b>殿砂遺跡</b>			
第18図版	調査区遠景（東から）		
第19図版	調査区近景（南から）		

## 1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

## 1994年度 文化財行政の概要

総社市においては、昭和55年6月から社会教育課に文化係を設け、埋蔵文化財を含め文化行政全般を担当していた。当初3名の発掘調査員と事務職2名で出発し、現在は8名の発掘調査員に増員された。

平成6年7月の機構改革により、社会教育課から文化係は文化財室と文化振興課とに分かれた。文化係として行っていた文化・芸術の振興は、文化振興課が担当することになった。また、8月1日には市内南溝手に総社市埋蔵文化財学習の館が開館した。翌2日には、小学生を対象に体験学習を実施した。

### <組 織>

教育長	浅沼 力		
教育次長	秋田 皓二	主事	平井 典子
参事	村上 幸雄	〃	武田 恭彰
	(平成6年7月1日から文化財室長兼務)	〃	前角 和夫
社会教育課長	平田 定士	〃	高橋 進一
文化係長	山西 賢一	主事補	松尾 洋平
	(平成6年7月1日から文化財室主幹)		
主任	荒木 泰行(～平成6年6月31日)	臨時職員	西平登代子
〃	谷山 雅彦	〃	三好 理加
〃	高田 明人		(～平成6年8月11日)
		〃	近藤 雅子

### 〔埋蔵文化財〕

埋蔵文化財の発掘調査は、各事業との調整を参事があたり、主任1名が確認・立会を主にを行い、発掘調査は5名の調査員が担当した。

本年度は、昨年度からの継続事業が2件ある。このうち福井大塚古墳群は、平成5年度から断続的に調査を行った遺跡で平成6年度が最終となった。この古墳群から出土した銀象眼を施した大刀の保存処理も本年度の事業で行った。

発掘調査事業で開発に伴うものでは、ほ場整備4件、区画整理1件、住宅団地造成1件、土取り1件、個人住宅造成1件である。

発掘調査事業は、平成3年度から概ね10件近くを実施しており、主要な要因はほ場整備事業である。

この外に、確認調査4件、立会調査16件、分布調査1件を行った。

発掘調査報告書では、公園事業に伴い調査を実施した石原後遺跡を刊行した。刊行した報告書は14冊目である。しかし6年度は、収蔵施設の建設に伴い遺物の整理がほとんどできなかった。

#### 〔文化財保護〕

文化財保護事業としては、国指定備中国分寺五重塔の防災工事と県指定石造美術山崎磨崖仏の保存工事を実施した。毎年実施している指定文化財の下刈り清掃等の管理事業も継続して行った。

また、本年度から国指定史跡鬼城山の整備に伴う発掘を、整備委員会の指導を受け第1城門跡で11月から開始した。別項に概要を記している。

新たに市指定重要文化財に2件を指定した。1件は史跡「総社跡」で、本市の市名の由来となった「総社宮」の一部を指定した。総社は、平安時代に国司の力が衰え、赴任した国の神社を巡拝することが困難になり国府の近くに神社を集めた所といわれている。そのため、各国の政治の中心であった国府の所在を知る手がかりになるといわれている。もう1件は宝福寺が所蔵している絹本着色仏涅槃図である。この涅槃図は14世紀頃の制作と考えられる。この涅槃図は釈迦の入滅とその前後の事件を描いた八相涅槃図であり、大陸から伝来された図を基に描かれたといわれ、広島県耕三寺と同じ原本と考えられる。貴重な仏画である。

#### 〔埋蔵文化財学習の館〕

総社市埋蔵文化財学習の館（以下埋文学習の館）は、市内南溝手265-3に所在する。鉄骨ALC造2階建、延床面積1,354㎡で平成6年3月に完成、同年8月に開館した。

埋文学習の館は、旧服部小学校の廃校舎を利用した服部収蔵庫では、遺物収蔵量に限界がきたことから出土した埋蔵文化財の整理・保管・活用を主の目的に建設した。

1階は、主に整理室と展示室である。玄関を入った最初の部屋が記録整理室で発掘調査の報告書の作成を行っている。記録保管室を挟んで、次の部屋が遺物整理室で出土した遺物の洗浄・復元などを行っている。廊下を挟んで北側には、特別収蔵室があり、保存処理の終了した鉄器などを収納している。1階の奥が一般展示室で、整理を終えた遺物を中心に「稲作の受けいれたことによる列島社会の変化とそのなかで培われた吉備の特出」をテーマとして常設展示を行っている。

2階は遺物を取りめる開架展示室となっている。

埋文学習の館の運営は、平日の9:00～16:00まで無料で開館している。埋文学習の館では2名の臨時職員が勤務している。主な仕事は、遺物整理で1名が土器の洗浄・復元を行いもう1名が土器の実測などを行っている。また、体験学習教室で使用する道具などの制作も行っている。

開館以来3月末までで775人が来館した。

（谷山 雅彦）

表1 立会・確認調査一覧表

番号	所在地	調査原因等	種別	調査期間	調査所見
1	上林1046	国分寺池改修	立会	1994.4.11	別項参照
2	秦	石垣の改修	不時	6.16	工事は既に終了した後
3	長良	㊦市道改修	確認	6.27～28	別項参照
4	上林	個人住宅	確認	7.8	別項参照
5	駅前二丁目	共同住宅	立会	7.15	遺物・遺構無し D
6	真壁築地ノ内17-20	共同住宅	立会	7.15	進入道路の擁壁
7	井手字清水角600-4	個人住宅（三階）	立会	7.27	基礎部分を面で下げないため不明
8	井手字権現978	共同住宅	立会	8.3	浄化槽部分を立会、礫層が北から南に下がる D
9	井手	商店	不時	8.4	浄化槽部分、砂礫 E
10	上林500	個人土取り	不時	8.5	別項参照
11	美袋字永田	個人住宅	立会	9.12	荒砂 E
12	真壁築地	共同住宅	立会	10.10	No.6 別項参照
13	黒尾	㊦市道改良	分布	10.31～11.2	別項参照
14	種井	㊦ほ場整備事業	立会	11.7	別項参照
15	黒尾	㊦市道大文字菰口線	立会	12.3	遺物・遺構無し
16	井尻野1721	共同住宅	立会	12.5	須恵器、礫層 C
17	門田404	スポーツクラブ建設	確認	12.6	遺構・遺物無し D
18	宮原	畑に開墾		1995.1.7	別項参照
19	総社261-1	医院増築	立会	1.9	別項参照
20	秦	倉庫建設	確認	1.11	主要伽藍から外れている



番号	所在地	調査原因等	種別	調査期間	調査所見
21	中央2-5-1	ガソリンスタンド建設	立会	1995.1.25	遺物無し D
22	小寺字兎道 1672		不時	2.4	別項参照
23	真壁1597	工場増築	立会	2.23	粗砂 E
24	中央1-2	ビル建築	確認	3.1	柱穴と溝を確認 A
25	溝口字川崎	共同住宅	立会	3.14	別項参照 A

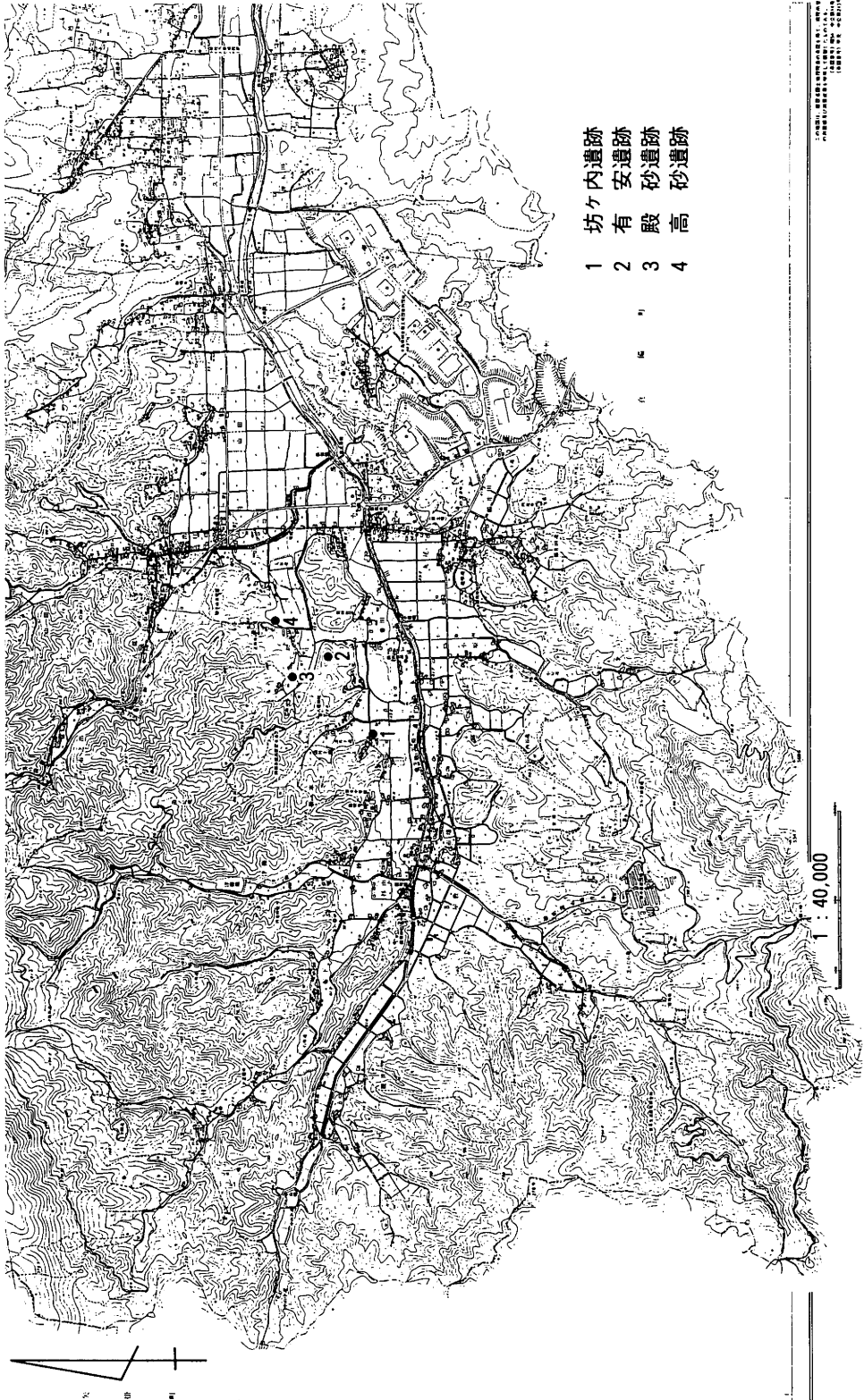
㊦-公共事業

確認・立会の判定標記例

- A 遺構有り-遺跡内
- B 遺物有り-出土量が多く遺跡内の可能性が高い
- C 遺物有り-出土量が少なく遺跡内かどうか不明
- D 安定した土層-遺跡内かどうか不明
- E 遺跡とは考えられない場所



第2図 確認・立会調査位置図 (S=1/40,000)



- 坊ヶ内遺跡
- 有安遺跡
- 殿砂遺跡
- 高砂遺跡

1 : 40,000

第3図 新本ほ場整備に伴う発掘調査位置図 (S=1/40,000)

## 2. 立会および確認調査概要

## 備中国分寺境内池の改修

遺跡名 備中国分寺跡  
所在地 総社市上林1046  
調査期間 1994年4月11日  
調査概要

備中国分寺は、天平13年(741)に発せられた聖武天皇の勅願を機に諸国に造立された国分寺の一つである。律令制の衰退とともに衰微し、建武3年(1336)の福山合戦の兵火によって焼失したとも、落雷により焼失したともいわれている。その後、江戸時代の享保年間ごろから再建され、今日にいたっている。

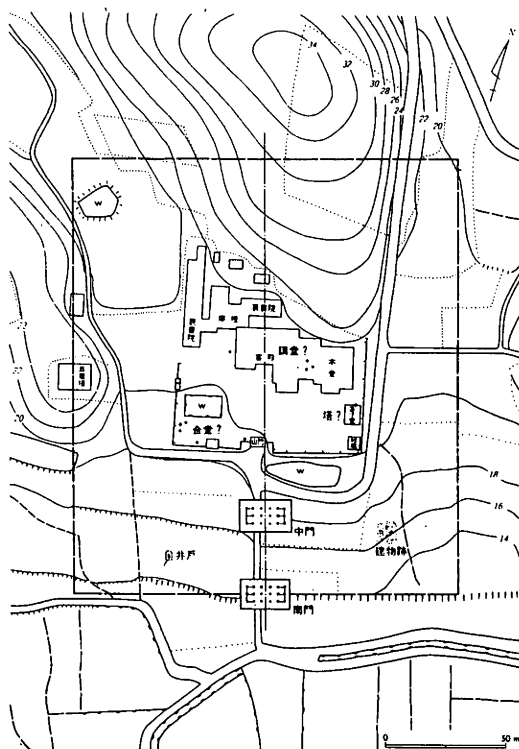
創建時の備中国分寺については、昭和46年に実施した岡山県教育委員会による発掘調査によって、その一端が明らかにされている(葛原克人ほか「備中国分僧寺跡」『総社市史 考古資料編』)。それによると、寺域は東西約160m、南北約178mを測り、中軸線の南端に南門、その奥に中門が確認されている。しかし、主要伽藍については、江戸時代に再建された建物と重複するため不明だが、中門の正面奥に講堂、右に塔、左に金堂が想定され、法起寺式の伽藍配置かと推定されている。

さて、境内池の改修の起因となったのは、五重塔の「平成の大修理」に関わるものであり、塔のみの防災対策にとどまらず、境内建物群の一体的な防災対策上からである。

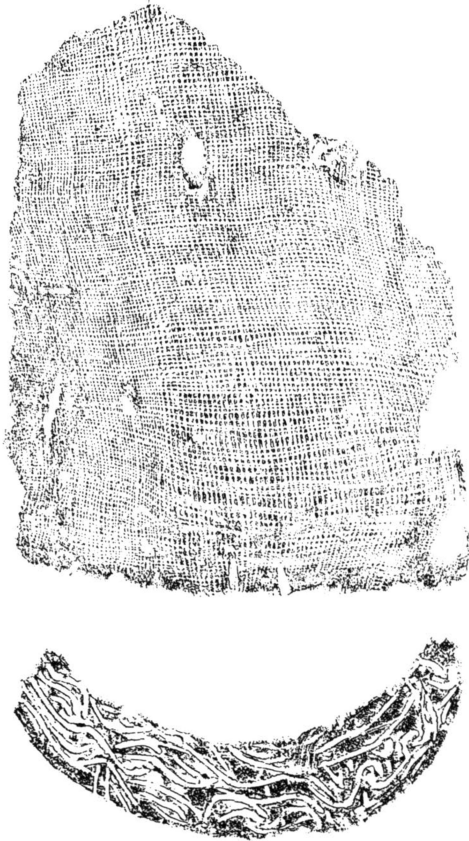
境内にある池は、金堂推定地と重複する位置にあり、境内地が国指定史跡 備中国分寺跡であるため、工事にあたって立会調査を実施した。

池は、四周を石垣を巡らした16m×9mの規模のもので、これを今回13m×7mに縮小し、底・側面をコンクリート打設して貯水しようとするものである。このため、掘削は殆ど行われず、石垣の石材を抜き取った跡の観察にとどまった。

東面は工事の都合上、埋土となっているため不明だが、他の三面には古代瓦と近世瓦が



『総社市史 考古資料編』より引用  
第4図 調査位置図



混在した状態でみられた。量的には古代瓦が圧倒的に多く、石垣の裏込めに用いられた状態である。このため今回の立会調査においては、金堂基壇等は全く検出されなかった。

図示した平瓦は、石垣の裏込めに用いられていたものである。文様はすでに省略され、ヘラ描きの沈線が文様状に配されているのみである。創建瓦とは考えられないが、国分寺存続期の古代瓦としておきたい。

(村上 幸雄)

第5図 出土瓦 (S=1/4)



第1図版 工事状況



## 市道高松田中西阿曾線改良工事に伴う確認調査

所在地 総社市長良

調査期間 1994年6月27・28日

### 調査概要

調査は、市域の西端部分で現在工事が行われている中国横断自動車道に近接した地域で実施した。

高松田中西阿曾線がJR吉備線をアンダーで抜けるため、遺跡確認の必要がでてきた。この周辺では、遺跡が確認されていないが吉備線の北では中国横断道の建設に伴い発掘調査が実施されている。この調査においても、アンダー近くでは遺構は認められない。しかし、岡山市側には近距離に集落があり、これから延びる微高地が想定できるので遺跡の確認をすることにした。

調査の結果、どの試掘溝においても暗渠排水が認められ、水はけが良くない土質であることが判明した。土層においても、床土下に中世の遺物を含む灰色砂質土が認められるものの、その下層は粘質が強く遺構・遺物の出土は無かった。このため、今回調査を行った範囲においては遺跡が存在する可能性は低いと判断された。 (谷山)



第6図 確認調査位置図 (S=1/5,000)

## 三須丘陵における土砂採取事業

遺跡名 江崎古墳群  
所在地 総社市上林500ほか  
調査期間 1994年8月5日

### 調査概要

#### (調査経緯)

総社平野の南東部には、三須丘陵とよばれる独立小山塊があり、そこには前方後円墳を含む数多くの古墳群の所在が知られているほか、これまでに、家形埴輪に初期須恵器、横矧板鋌留短甲などを出土した木棺直葬あるいは箱式石棺をもつ法蓮古墳群、市内でも大形の横穴式石室を多くもち、銀象嵌装飾付大刀などを出土した緑山古墳群、一辺40mを越す、岡山県下最大級の方墳となる折敷山古墳などの調査例がある。このように前期古墳から後期横穴式石室墳にいたるまで約300基を越す古墳が築造されており、この丘陵が古代吉備の中核地域における重要な墓域として考えられていた結果であろう。さらに、三須丘陵内には備中国分僧・尼寺跡なども所在していることから、「吉備路風土記の丘」をメインに、丘陵全体を県立自然公園として指定し、数々の文化財や景観等の保持を図っている。しかし、丘陵全体が花崗岩の風化土地帯であり、小規模の土砂採取や住宅団地、工業団地等の開発により景観が変化したところもある。今回の調査も、小規模な土砂採取事業であった。

#### (調査結果)

調査地は、以前より土砂採取が行われていたところであったが、その範囲が尾根線上にまで及んでいそうであったので、その確認のために緊急の踏査を行った。

その結果、採取範囲は尾根線上を越えており、しかもすでに丘陵上層部の土砂採取は終了していた。『緑山古墳群』の分布図によると、D-13ないしD-13とD-14の間の尾根線上に採取範囲が及んだものと推定される。この周囲については、樹木が覆い繁っていたことからD-13がこの採取範囲から確実に除外されるかどうかは確認できなかった。

なお、尾根線付近での排土内から鉄片が採集されているものの、古墳にともなうものであるかどうかは不明である。

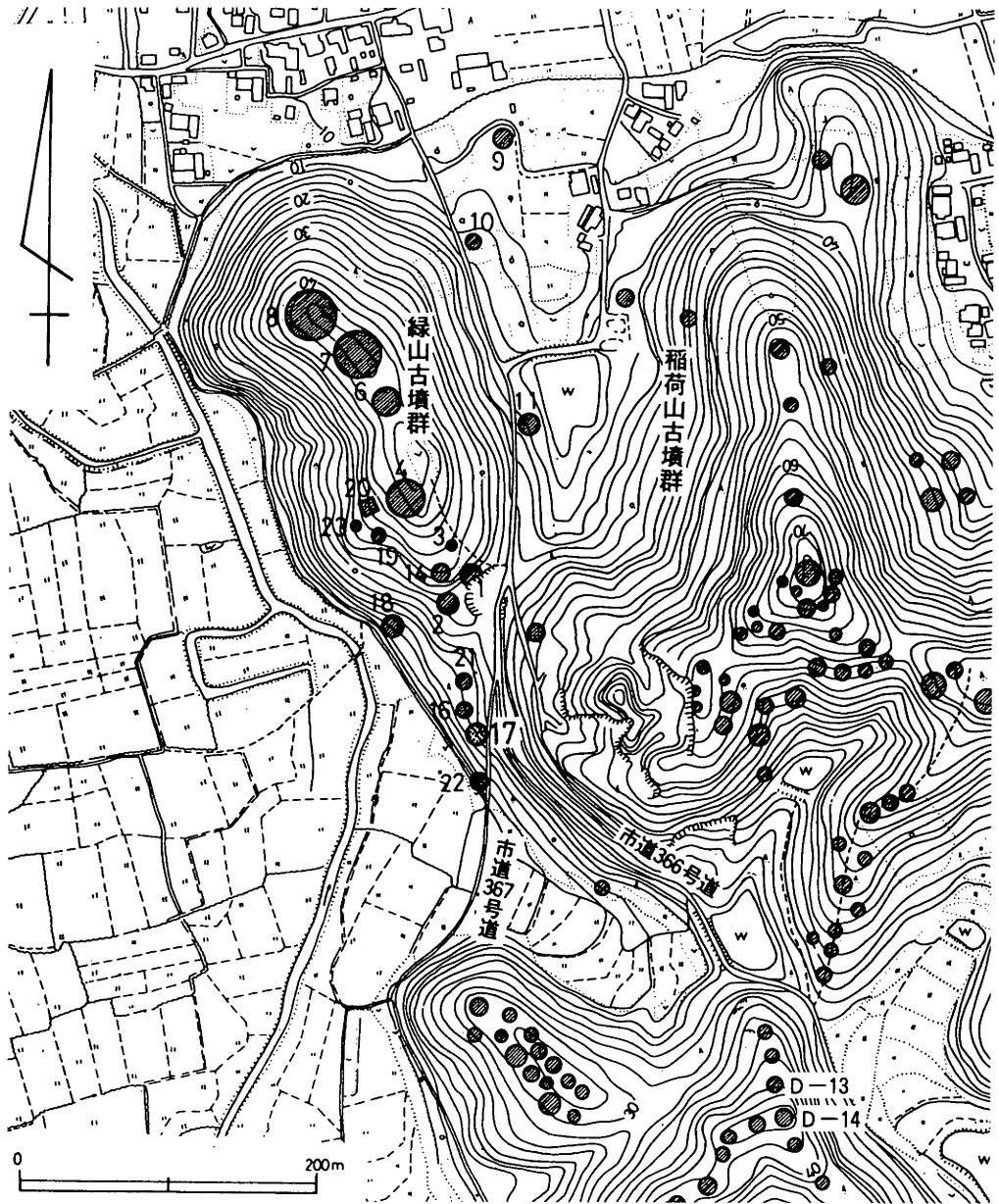
#### (まとめ)

以上のように、土砂採取事業の進行により、古墳が消滅したかどうかははっきりしなかった。周知古墳であるD-13号墳が採集範囲内に確実に位置していたか、あるいは採集された遺物がD-13号墳または新規の古墳にともなうものであったならば、古墳が所在していたという、仮定にすぎない。また、事業者によれば、尾根線付近での土砂採取において、石棺となるような



石材はまったく認められず、遺物もなかったとのことである。これについても、古墳の主体部が石棺でなく、木棺直葬であったという可能性をさらに仮定させるにすぎない。いずれにせよ、はっきりしない結果となったのは、すでに進行している事業については文化財保護の行政的対応ができていなかったことによるもので、新規事業における事前審査を遺漏なきように努力する以上に、このような進行中の事業に対しても何らかの対応が必要であることを痛感している。今後の課題でもある。

(前角 和夫)



第7図 緑山周辺地形及び古墳分布図(「緑山古墳群」より)(S=1/5,000)

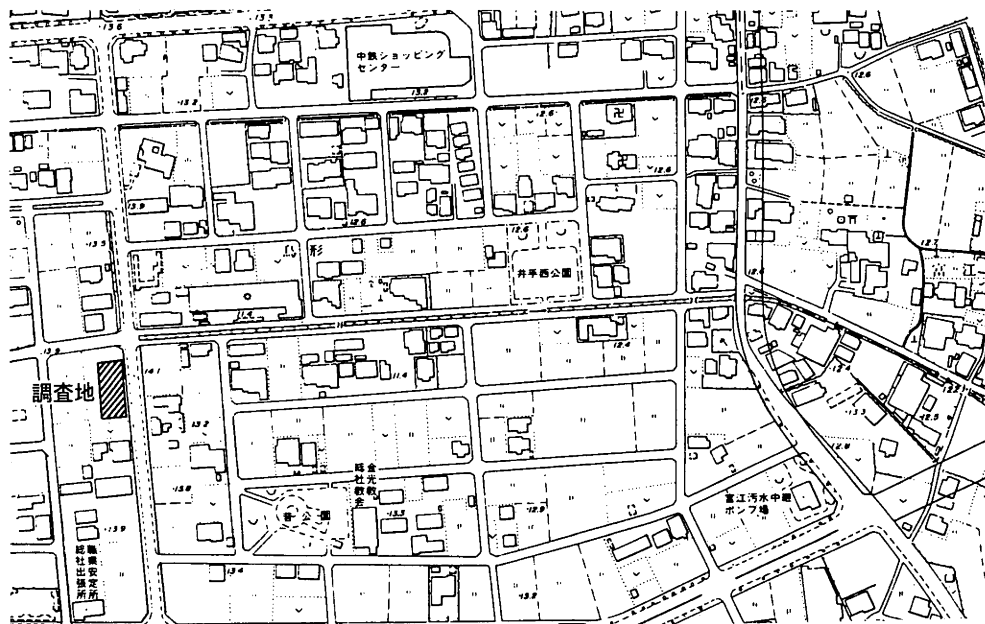
## 賃貸マンション建設に伴う立会調査

遺跡名 真壁遺跡  
所在地 総社市真壁築地ノ内17・20  
調査期間 1994年10月10日

### 調査概要

本調査地は、市内で初めて広範に集落跡が調査された真壁遺跡の北西に位置する。このときは、契機になった区画整理事業がほぼ半分以上終了していた。そのため、市役所を中心とした付近の遺跡の状況がつかめていない。しかし、調査地区周辺に旧河道が北西から南東にかけて流れていたことが、周辺の状況から想定されていた。

調査は、基礎部分を掘削した時点で立会を実施することとした。調査の結果、全体に遺跡の存在が可能な微高地が確認された。このことから、想定される河道は調査地より北にあることが明らかになった。調査地では、表土下に床土が認められ南西方向に若干下がる。そのため、南には包含層がある。基盤層は、淡茶灰色砂質土で礫は認められない。(谷山)



第8図 立会調査位置図 (S=1/5,000)

## 砂川流域における遺跡分布調査—その2—

遺跡名 新山廃寺跡  
所在地 総社市黒尾  
調査期間 1994年10月30日・11月2日

### 調査概要

#### (調査経緯)

総社平野の北東部に位置する砂川は、古代の山城である鬼ノ城の築かれた山塊付近を水源にして足守川へそそぐ、長さ6kmほどの小河川である。日頃は水の流れのほとんどない河川であるが、豪雨ともなると驚くほどの水量をみせる河川でもある。しかも砂川という名称のとおり、かつては膨大な量の土砂を運び込み、また別名天井川ともいわれるように、その川底は平野部よりも高い位置にある。その結果、両岸は非常に高い堤防となり、またかつての洪水のなごりである砂山も周辺の水田地帯に最近まで残されていたという。

この砂川の水源地付近、標高330mを測る山間に新山集落がある。いまでは家並み7軒とわずかな営みであるが、南斜面に建てられる家々は、非常に高く築かれた石垣による平坦面の上に建てられている。同様に山間の谷筋等に広がる水田も、また高石垣によるものが多く認められる。これら石垣で築かれた平坦面は、かつてこの地に開山された寺院の各施設が建立された場所と推定され、集落一帯、またその周辺山中にまでその栄華の面影が色濃く残されている。

さて、今回の調査は、砂川公園から新山・岩屋集落に上がる道路がせまく、年々増加する鬼ノ城をはじめとした県立自然公園内での歴史的自然的散策を求めて訪れる人々にも不便であり、道路の拡幅が計画された。このうち今年度の工事範囲は、新山集落の上から鬼ノ城駐車場の下までの約500mである。

#### (調査経過)

事業は数年計画による実施で、直接の事前審査対象は今年度の工事範囲分である。しかし、次年度以降の計画にも対処・対応するためにはその計画全体範囲を含めた状況把握が必要となり、事前審査に先立って今回の分布調査を実施したものである。

計画された道路は、現道の一部拡げるものの、その大部分は新たに敷設されるもので、切土はおもに集落の付近、盛土は水田部分にあたる。調査にあたっては路線内はもとよりその周囲にも調査範囲を広げ、またこれまでにわかっている寺院遺構も視野に入れながら踏査を行った。

まず、砂川の右岸に沿って新山集落に向かう現道は、通称「猫岩」あるいは「猫股岩」という今は無き大岩とその背後に立ち塞がった山塊により、左に迂回しながら集落下の水田地帯に入ることとなる。しかし、かつては道を左に取らず右に迂回する旧道が存在していたものとい

う。現道に沿って観音めぐりの石仏が立てられており、おそらく明治時代かそれ以降に建立されたもので、このことから、旧道より現道への移行時期はこの石仏の建立以前と推定されよう。

旧道をのぼると、幅のせまい谷水田が開けてくる。小字では東谷となるが、孫字的に「大門」と通称される水田がある。この水田とその下の水田との境には、規則的に並んだ数個の自然石が露出しており、さらに水田内の地下にもいくつもの石の存在する場所が耕作中に確認されるという。ここが新山廃寺の山門跡となり、自然石を用いた3間×2間の礎石建物跡である。

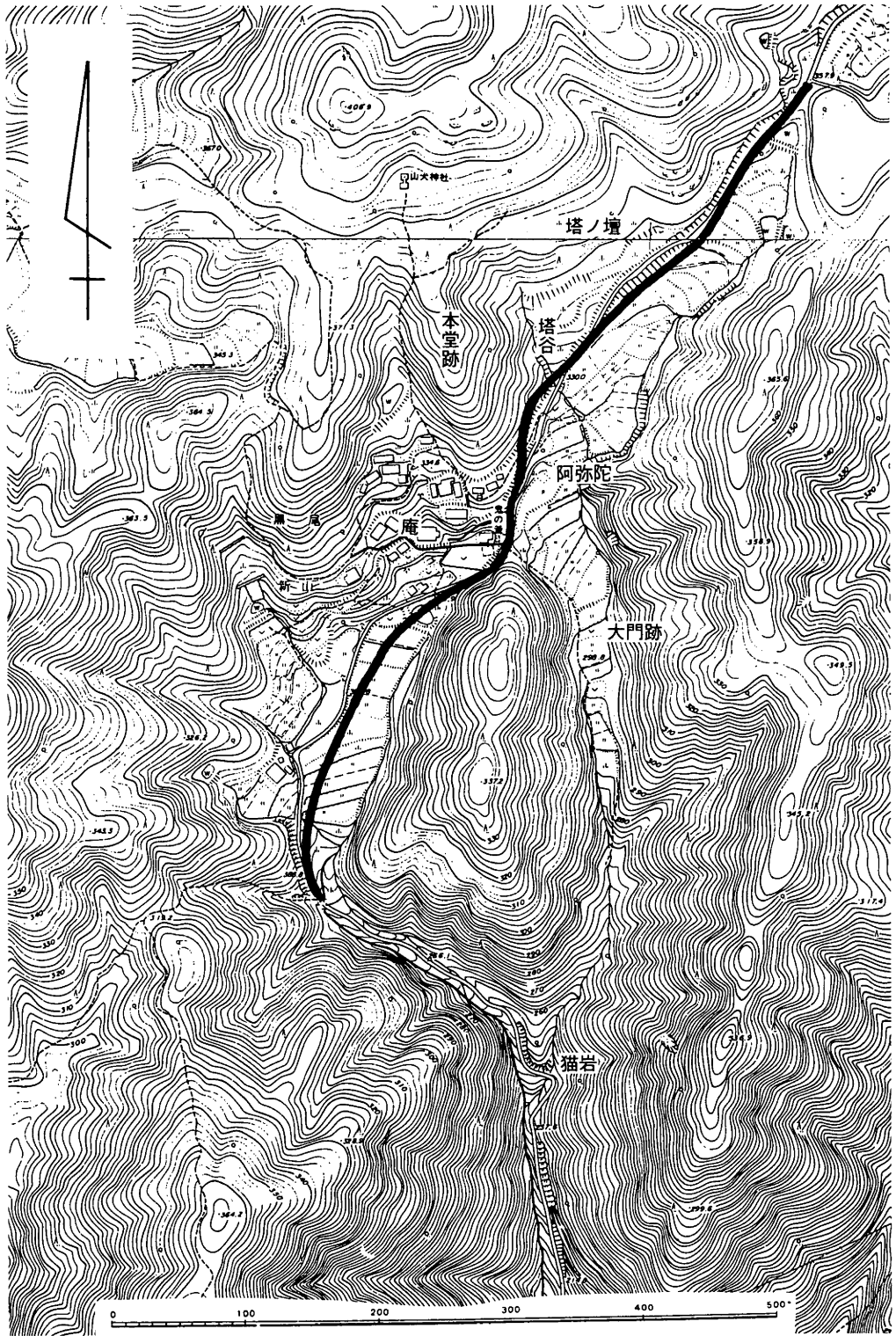
大門跡から山内をのぞむと、谷筋は東に折れて、目の前には迫り出した丘陵がみえる。この丘陵頂部に本堂跡があり、いまでも礎石が良好に残されている。本堂跡は、大門跡から真正面のわずかに西寄りに位置するが、その比高差100m、また丘陵斜面の急傾斜とあわせると大門跡から見上げるほどになる。



第2図版 調査地遠景

当初、谷川づたいであった旧道は、谷水田に入ると西側の谷（丘陵裾）沿いに移り、大門跡を過ぎて、本堂の立地する丘陵の先端あたりで現道にぶつかっている。そして現道をわたって新山集落に入るものと推定されるが、現道と重なってこの丘陵の東側沿いに進む可能性もあろう。現道をわたったあたりはボウダイボウ（菩提坊）と称されており、これにつづく新山集落の立地する高石垣群のあたりはアン（庵）と称され、これらから本堂の立地する丘陵の西側の谷間一帯には坊や庵などの寺院施設が建てられていたものと推定される。そして集落内から本堂に向かうことのできる北行きの小道が二つあるが、いずれも集落の北側の谷間、本堂のある丘陵の西裾に沿った小道と交わる。さらにこの小道をのぼると、その途中より本堂のある丘陵に直交している分かれ道が認められ、これをのぼって本堂の南側の尾根線上にあがり、本堂に参ることができる。本堂跡は、狭小な尾根線上にあり、大門跡よりかなり小ぶりの自然石を用いた礎石が5個露出し、またわずかに埋もれている礎石も確認でき、3間四方の礎石建物を推定することができる。

また、旧道と交わった現道は、本堂のある丘陵の先端を横切り、東谷の谷筋に沿って進み、分水嶺となる鞍部を越え、岩屋集落につづく。岩屋集落には、岩屋寺をはじめここにも多くの寺院施設が建立されており、新山から岩屋に向かうには現道が唯一であることから、現道以前にさかのぼる旧道の存在は確実視されよう。しかし、現道は一部で丘陵や谷を大規模に削りあるいは埋めていることから、現道イコール旧道とはならない。今回の調査範囲内においても、本堂のある丘陵の先端東側には、アミダガワチ（阿弥陀河内）と称される水田があり、さらに丘陵の東側にトーダニ（塔谷）と称される小谷が入り、つづいてトーノダン（塔ノ壇）と



第9図 調査地周辺図 (S=1/5,000)



## 種井地区ほ場整備に伴う調査

所在地 総社市種井

調査期間 1994年11月7日

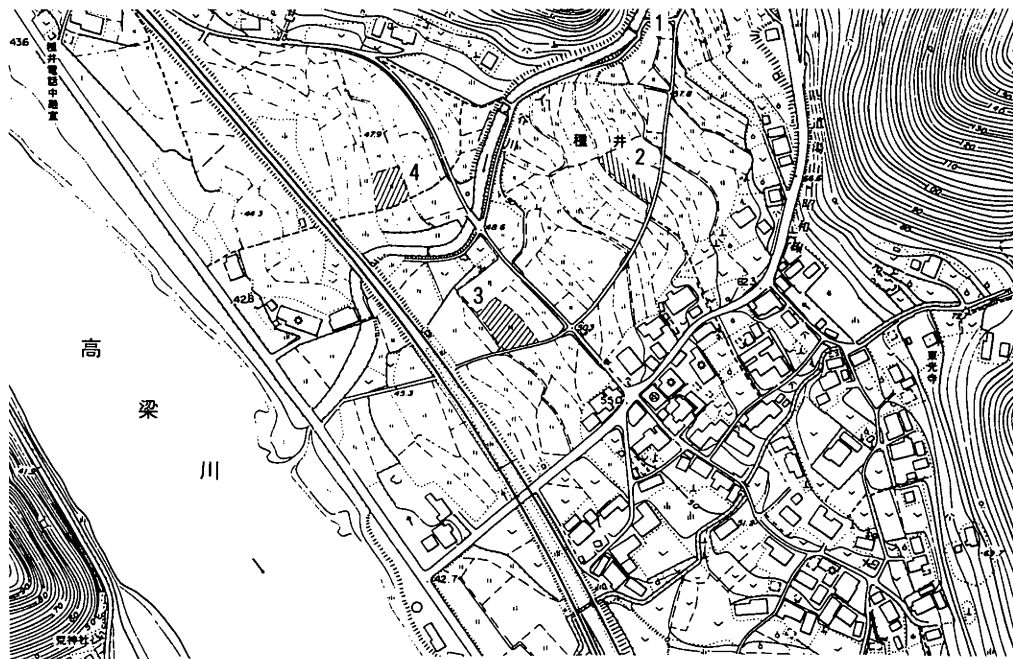
### 調査概要

種井地区で新たに、ほ場整備が計画されている。このため、事前の土質調査が行われた。この地区で埋蔵文化財の存在は知られていなかった。そこでこの調査に同行し、埋蔵文化財の確認を行った。

対象地区は、三方を山に囲まれ西に高梁川が流れる平野部である。平野部は、かなり高低差が認められ、石垣が多い。土質調査は4カ所で行われた。この調査で遺物は出土していない。また、調査が行われた土質は大きな岩や礫が主体であり、遺構の存在を示すような土は認められなかった。これらの土砂は、長い年月を掛けて周辺の山や大谷川を通じ流れ出したものと考えられる。谷筋には砂防ダムが建設されている。

このため、今回の調査では埋蔵文化財の存在は確認できなかった。

(谷 山)



第10図 調査位置図 (S=1/ 5,000)

## 宮原古墳群第1号墳について

遺跡名 宮原古墳群第1古墳

所在地 総社市東阿曾379他

調査期間 1995年1月7日

### 調査概要

現在、岡山県では文化財保護管理の一環として重要な遺跡について文化財指導委員による文化財パトロールを行っているが、委員の横田武夫氏と共に宮原古墳群を巡回した所、第1号墳の墳頂付近に開墾が認められた。宮原古墳群は、吉備高原の南縁から派生する一支派上にあり、いずれの古墳もなだらかに延びる尾根上に展開している。個々の実態については不明であるがなかには前方後円墳も含まれ遺存状況は良好であった。

第1号墳は宮原大池の北東にあたり尾根の先端部に位置する。従来より径約20mの円墳と考えられており<sup>(1)</sup>、現状においてもわずかな高まりが認められる。開墾は墳丘上で行われており主体部等の影響はなく、耕作は表土部分に留まっていると考えられた。遺物は弥生土器の細片を二辺採集した。いずれも弥生時代後期のものと考えられるので直接古墳に伴うものではない。

以上の事から、従来知られていた古墳と共に弥生時代の遺跡の広がりも今後注意していく必要があると思われる。

(松尾 洋平)

註1 岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図』第3分冊(昭和50年3月)



第11図 調査位置図 (S=1/5,000)



## 医院増築に伴う立会調査

遺跡名 総社遺跡

所在地 総社市総社261-1・263-9・263-10・595-2・井手14-2

調査期間 1995年1月9・10・11

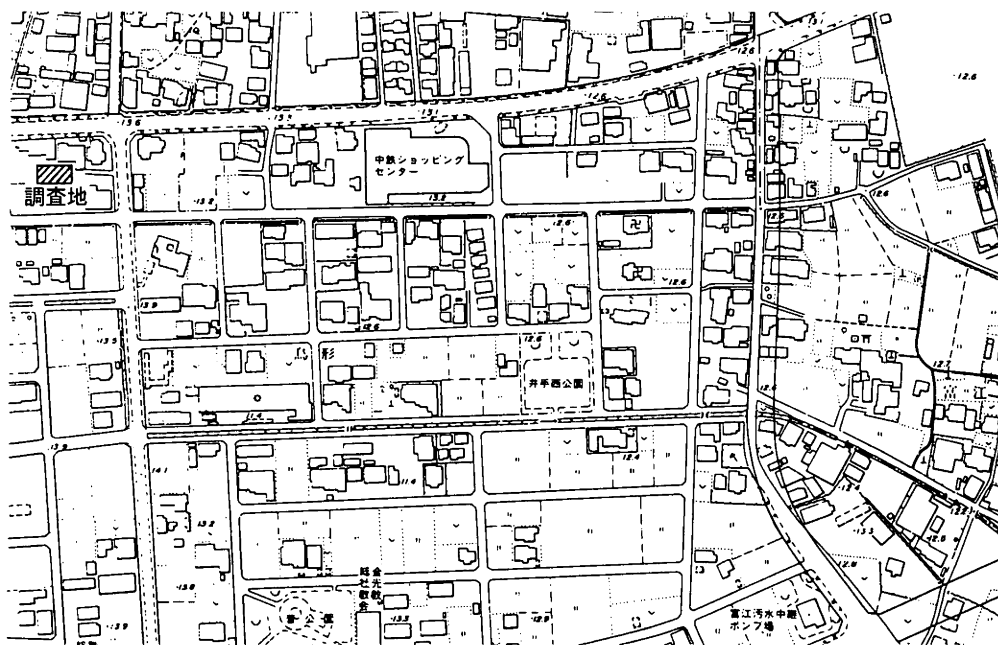
### 調査概要

本遺跡は、市役所の東約300mに位置し、区画整理事業が終了した住宅地域に所在する。この地は過去に駐車場として利用されており、アスファルト舗装がなされていた。近辺では、東に接する南北道路が新設された際、交差点付近で遺構が検出され、南側に河道が認められていた。

このため、今回調査を実施した地点は遺跡が存在する部分のはずれであることが想定されるが、基礎の掘削が大きいため、立会調査で確認することとした。

調査の結果、舗装の下に一部表土が残っており、その下に茶灰色砂質土が全体に認められた。その下に、遺物包含層が認められるが厚みは場所により異なる。この包含層の下は砂礫層で基盤層と考えられる。遺構と考えられるものは、砂礫層まで掘り込まれている。遺物はほとんど出土していない。

(谷山)



第12図 立会調査位置図 (S=1/5,000)

## 塔坂古墳群周辺における土砂採取事業

所在地 総社市小寺

調査期間 1995年2月4日

### 調査概要

#### (調査経緯)

総社平野の北端は、吉備高原の南端でもある。大局的には標高400mの高台から、突然にわずか10数mの平地へと変わるが、細かくは平野部に向かって幾筋もの丘陵が張り出し、その反面丘陵を縫うように谷が複雑に入り込んでいるという状況にある。

今回の調査地も平野部より約1.5kmほど北西に入り込み、さらに北東に分岐された小谷の北向き丘陵斜面を主としている。

調査地の立地する谷の南向き丘陵斜面には、その数30基を越す塔坂古墳群の所在が知られており、平野部に近接していないことや、丘陵尾根線上を含まないことから、その構成墳はいずれも横穴式石室墳になるうか。いくつかについては開口部を確認をしているが、詳細な分布調査等は一度も行われていない。しかし、周辺の調査では、竪穴系横口式石室や横穴式石室6基、小石室7基、さらに火葬墓3基で構成されるすりばち池古墳群や、前方後円形をふくむ横穴式石室墳が数支群まとまって構成される大塚古墳群、3基の横穴式石室墳からなる青谷川古墳群がある。このほか、大塚古墳群と青谷川古墳群からは炭窯も検出されており、製鉄炉の検出がなかったものの、この周辺において製鉄が行われていたであろうことは確実である。

#### (調査結果)

今回の調査は、通常の開発申請にともなう事前審査ではなく、その開発行為が行われていた事実を不時で確認したことによる緊急調査である。そのためすでに一部の範囲では工事が実施されており、伐採と掘削のための作業道がいくつも付けられていたという状況である。ただし、遺跡として確認された範囲については緩やかな傾斜面であったことから作業道を設定せずに伐採木の集積を行ったらしく、幸い掘削も及んでいなかったことから下草が繁茂するという状況にあった。

掘削の及ばなかった範囲を除いてまず地形を観察復元すると、東側に小谷が北に向かって入り込んでいるほかは北向きのかなり急傾斜の丘陵斜面であった。踏査を実施した感触では、古墳を築くような地形でないものと推測された。また、製鉄関連遺跡の立地する可能性についても作業道の断面などからその痕跡はまったくなく、この種の遺跡も存在しないものと判断した。当然のこと、集落遺跡の可能性も考えられない。

上記の範囲の西側に、遺跡の存在が確認された範囲が接する。さきにもたようにこの部分は

谷が北東に分岐する地点であり、斜面は西に向かって緩やかに傾斜している。ここにはすでに青谷川製鉄関連遺跡の発掘調査報告において炭窯の存在を指摘しており、その炭窯が今回の範囲の南端で再確認された。またその炭窯から北東約10mのところでも古墳を1基新規に発見した。古墳は、西向きの緩斜面に立地し、墳丘の高さ1mに満たないが、その周囲には全周する周溝を確認することができた。規模は周溝を含めて直径約6mほどの円墳である。墳丘上に石材がみられないことや、その墳丘の高さなどから横穴式石室墳ではなく、前期古墳になるものと推定される。

(まとめ)

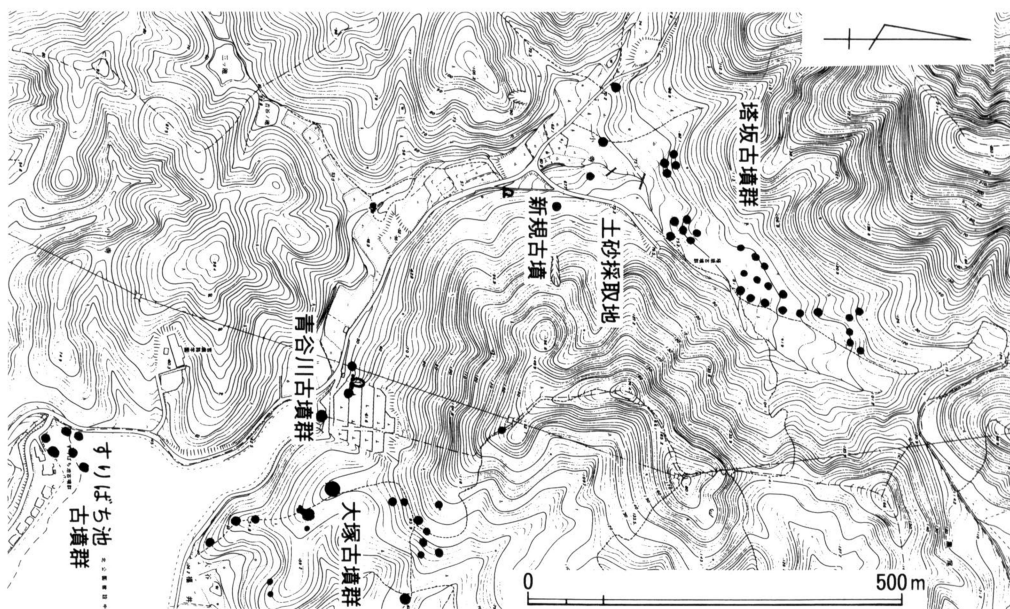
以上のように、今回の土砂採取事業に含まれると推定される範囲内には、周知の炭窯が1基と、新規発見の古墳が1基の、計2遺跡の所在が確認された。(前角)



第3図版 炭 窯



第4図版 新規古墳



第13図 調査地位置図 (S=1/10,000)

## 生命保険会社ビル建設に伴う確認調査

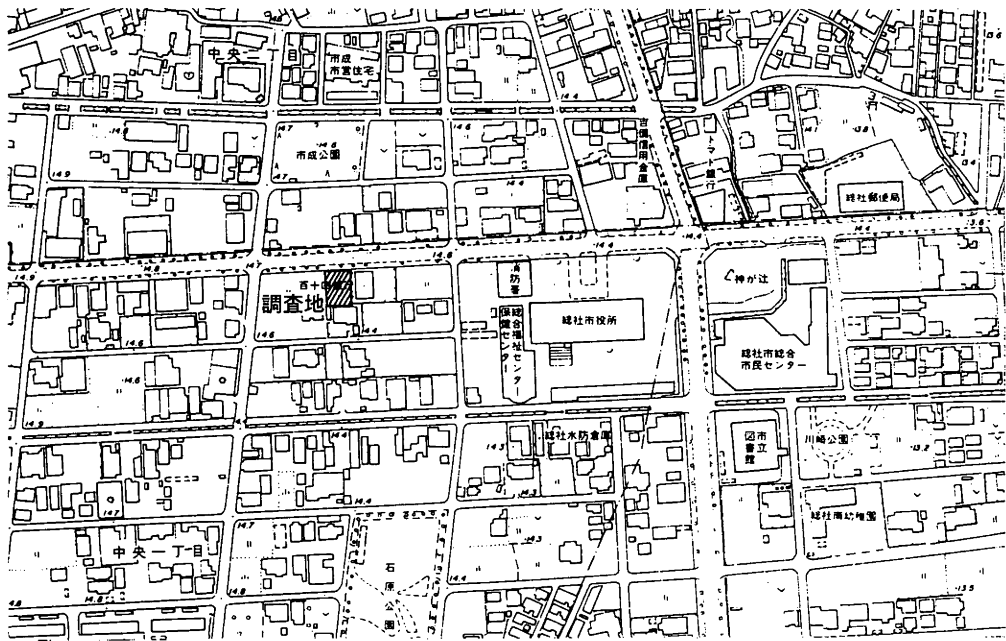
遺跡名 総社古開遺跡  
所在地 総社市中央1丁目2-110  
調査期間 1995年3月1日

### 調査概要

本遺跡の周辺では、遺跡の存在を示す資料は得られていなかった。遺跡の東に所在する市役所の周辺においては、湿地状の水田が多く遺跡の存在を想定できなかった。しかし、近年新たに行われる工事時の立会調査でこの周辺が微高地であることが明らかになってきた。

このため、今回は確認調査を実施した。確認調査は、用地全体が明らかになるように東西・南北方向それぞれ設定した。この結果、用地南がやや砂質が強いが土質に大差ないことが判明した。遺構は、北寄りで溝と柱穴が検出され出土遺物から中世の集落の存在が明らかになった。

工事前に発掘調査が必要なため平成7年度で実施する予定である。 (谷山)



第14図 確認調査位置図 (S=1/5,000)

## 共同住宅建設に伴う調査

所在地 総社市溝口字川崎608-1

調査期間 1995年3月14日～16日

調査面積 180m<sup>2</sup>

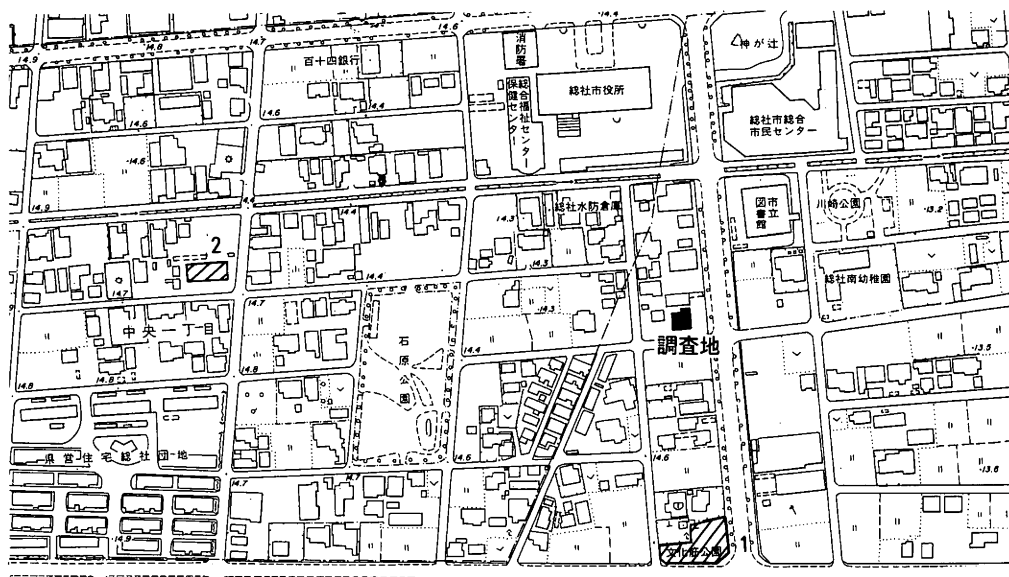
### 調査概要

本調査はアパート新築工事に伴って実施した。調査地は総社市役所の南約100mに位置しており、周辺には真壁遺跡、清水角遺跡、石原後遺跡（第15図1）などが知られている。また1990年には西約300mで寄宿舎建設に伴って古墳時代後期の住居址5軒と溝状遺構が検出されている（第15図2）。

調査地は、過去に地上げして造成されており、旧水田層の上に約65cmの厚さで砂礫土が客土されている。旧水田耕作土層のほぼ直下から淡黄灰褐色砂質土層の基盤土になっており、遺構は土壇5基と柱穴11個が検出された。検出面以下に掘削が及ばないため、現状のまま保存した。

土壇には茶灰褐色土が入り、弥生時代後期と考えられる遺物を含んでいる。土壇-1は深さ4～8cmと浅かったが、炭化物・焼土の分布が認められ、今回一番多くの土器が出土した。土壇-3にも少量の炭化物・焼土の分布が認められた。

柱穴には茶灰褐色土が入るもの3個と淡黒褐色土が入るもの8個がある。茶灰褐色土が入るものは土壇と同じく弥生時代後期と考えられる遺物を含んでおり、淡黒褐色土が入る柱穴の中には古墳時代後期のものと考えられる須恵器破片を含むものも認められた。



第15図 調査位置図 (S=1/5,000)

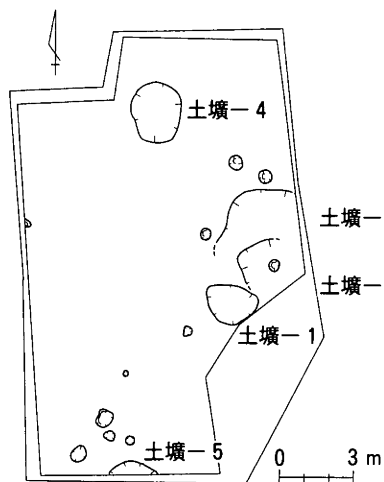
今回の調査では遺構の密度も薄く、明らかに住居址と判明するような遺構は検出されなかったが、周辺に集落遺跡が立地する可能性は高いと考えられる。

〔土壌-1 出土遺物〕

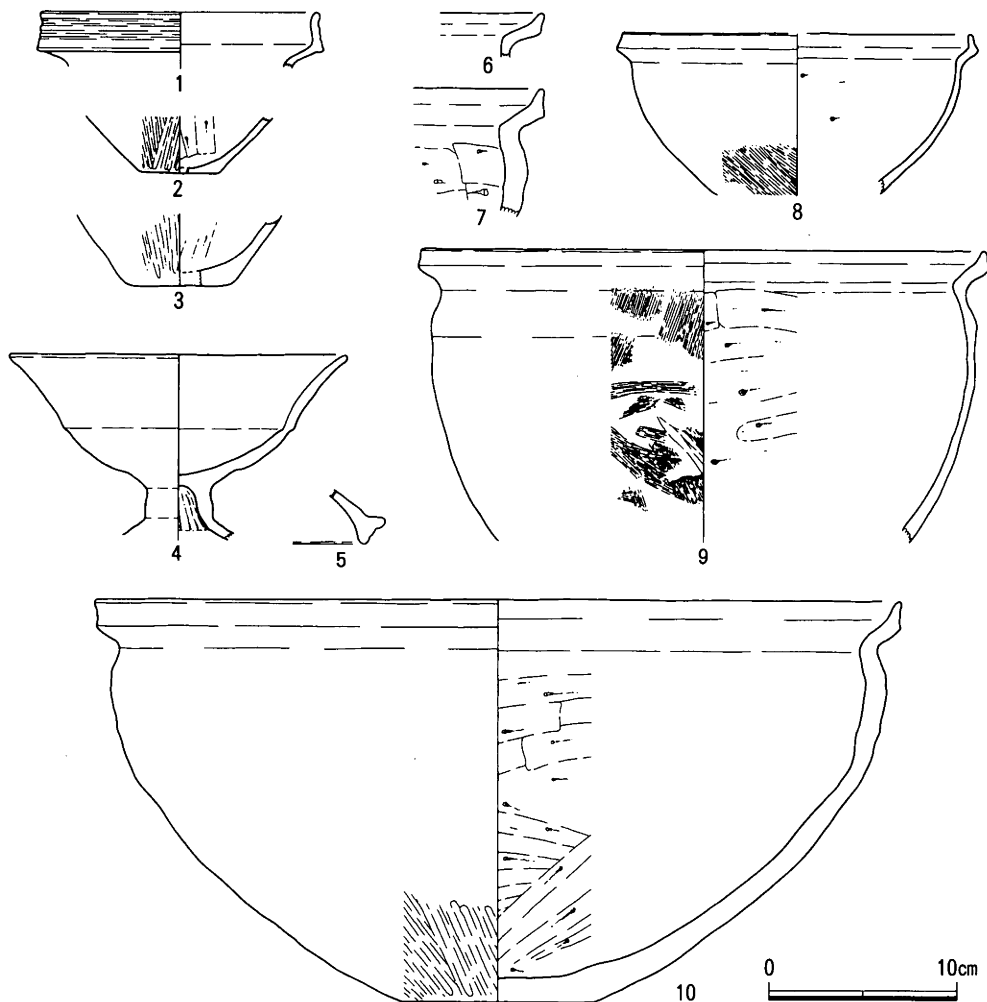
1～3は甕形土器。4の高坏の器表面は磨滅して調整不明。6～10は鉢形土器。9の内面はケズリの上をナデて滑らかに仕上げている。10は淡黄灰色を呈しており、底部内面中央には直径15cm程度の淡黒色に変色した焦げ付き跡が残っており、表面が荒れている。

〔遺構に伴わない遺物〕

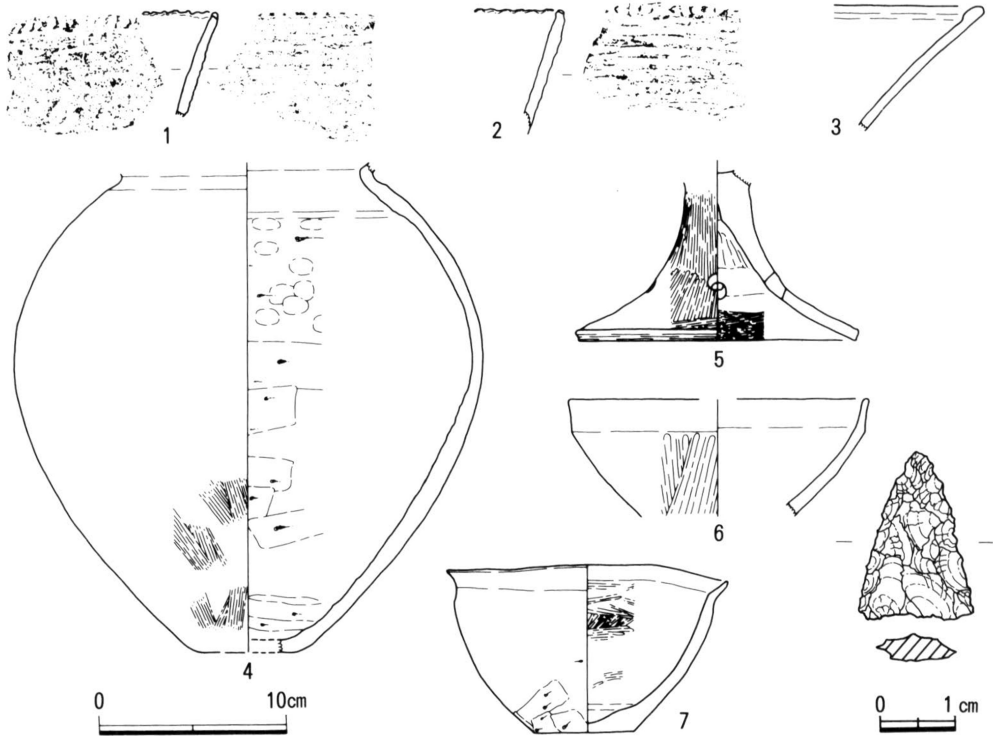
1～3は縄文晩期の土器と考えられる。いずれも淡灰



第16図 遺構配置図 (S=1/300)



第17図 土壌-1 出土遺物 (S=1/4)



第18図 遺構に伴わない遺物 (S=1/4)

石鍬 (S=1/1)

黒色を呈しており、1mm以下の細かい砂粒を少量含んでいる。1・2は深鉢で、口縁端部には刻み目が施されている。3は浅鉢と考えられる。4～7は弥生時代後期の土器である。6は底部は残っていないが、鉢形土器と考えられる。また石器はサヌカイト製の石鍬が1点出土している。  
(高橋 進一)



第5図版 調査区全景



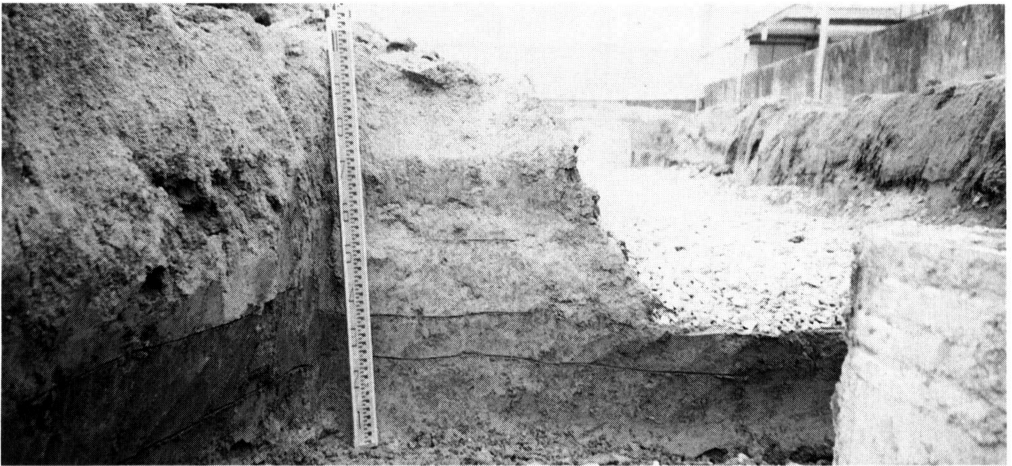
第6図版 遺構検出状況



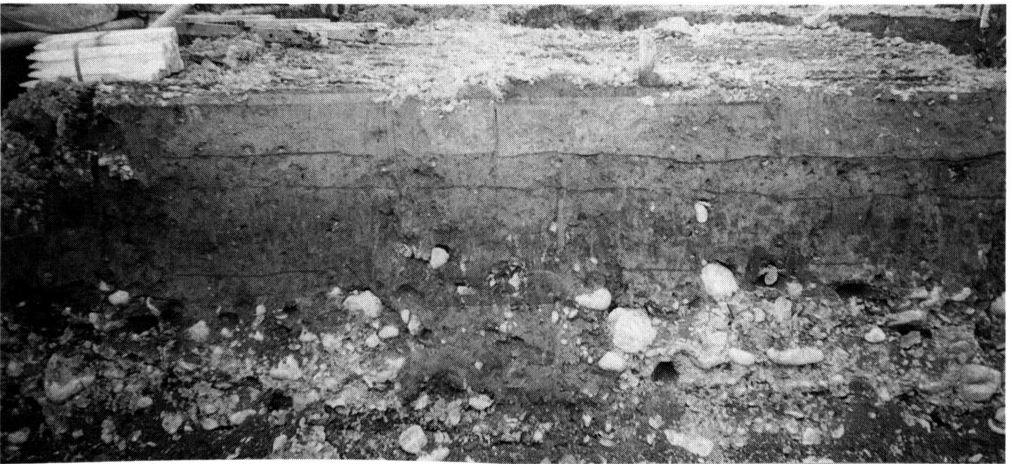




第7図版 賃貸マンション建設（北東部）



第8図版 賃貸マンション建設（南西部）



第9図版 医院増築（土層断面）



第10図版 ガソリンスタンド建設（土層断面）



第11図版 工場増築（土層断面）



第12図版 ビル建設（トレンチ南から）

### 3. 発掘調査概要

## 藤原北古墳群の発掘調査

遺跡名 藤原北古墳群  
所在地 総社市久代2372-1外  
調査期間 1994年4月11日～6月16日  
調査概要

採土事業が計画され、文化財の保護について調整を行ったが、他に適地を求められなかったことなどにより、発掘調査を実施した。調査地の周辺では、昭和60年以降、採土事業に伴い、高本古墳群、藤原北古墳群<sup>(1)</sup>の発掘調査が行われている。また、古墳や製鉄遺跡などが調査された水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群<sup>(2)</sup>は南に隣接した丘陵上である。

今回調査の対象となったのは、周知であった尾根上の12～15号墳の4基の古墳であった。しかし、実際に調査を行った結果、古墳の存在するのは調査範囲の西端部分に限られ、しかも古墳は円墳2基であることが判明した。この円墳2基は東から14・15号墳と称する。この2基の古墳は近接して築造される。また、15号墳については、当初西側に方丘をもつ前方後円墳の可能性も考慮されたため、今回の開発範囲外であったがトレンチによって墳形を確認したところ、方丘部については、人為的な盛土あるいは整形は認められなかったため、円墳と考えられた。

14号墳は、直径9.5m、高さ1.3mの円墳で2基の埋葬主体を持ち、主体部の方向は、尾根の方向に平行である。墳丘の中心部に石蓋土壇、少し南寄りに箱式石棺がある。石蓋土壇は蓋石のすき間に粘土を詰めることなどから未掘と考えられるが出土遺物はない。箱式石棺は、蓋石の一部が地表に露出していた。人骨の頭部の一部が出土した。頭は西向きである。

15号墳は、直径12.0m、高さ1.5mの円墳で13号墳と同様に尾根方向に平行な主体部を持つ。これは盗掘によって著しく損傷を受けていたが、扁平な石材が落ち込んでいたことからみて石蓋土壇であった可能性がある。主体部からは鉄器の破片が1点出土した。

14・15号墳の墳丘裾部からは6世紀末ごろの須恵器などの破片が少量出土した。これは墳丘上にもともとあったものというより別の何らかの行為に伴うものである可能性が高い。したがってこれら2基の古墳の年代観としては、高本古墳群などと同様5世紀代を中心とする時期とみるべきかと思われる。

(高田 明人)

### 註

1. 「高本古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』3 総社市教育委員会 1986  
「藤原北古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』11 総社市教育委員会 1993
2. 「水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9 総社市教育委員会 1991





第13図版 調査区全景（東から，空中撮影）

## 新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 その2

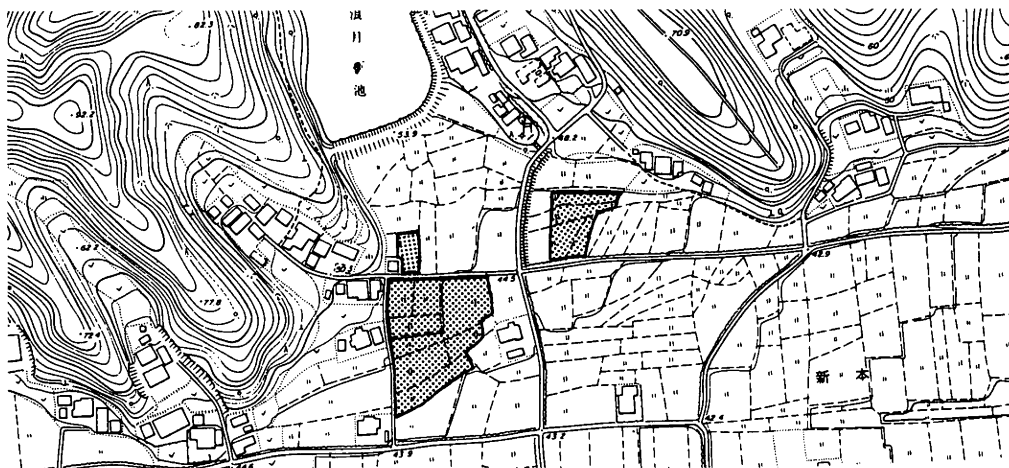
遺跡名 坊ヶ内遺跡  
所在地 総社市新本7126外  
調査期間 1994年4月1日～1994年7月16日  
調査面積 3200m<sup>2</sup>  
調査概要

前年度までの奈良時代の遺構の調査に引き続き、4月からは弥生・古墳時代の遺構の調査を行った。遺構は主に、南に延びる丘陵より派生した舌状の段丘上に濃密に確認された。

弥生時代の遺構は大半が後期と考えられ、住居址39軒と溝・土塋多数が検出された。住居址は全て円形を呈し、1～3回の拡張が殆どの住居に見られ、直径5m前後のものから9m前後を測るものが大半であるが、4回以上の拡張により直径11.5mで8本の柱穴を有する住居もある。また、床面に炭化材が放射状に遺存し壁面が被熱赤化した焼失住居や、二重に外周溝が巡らされた住居がある。溝や土塋には明確に用途や性格が限定できるものは無いが、S D03以东には、この時期の遺構が殆ど見られない事から、溝が何らかの役割を果たしていた可能性が考えられる。

弥生時代の遺物はS D03より整理用コンテナ約100箱分の土器がまとまって投棄された状態で出土したほか、溝・土塋等からかたまって検出された。これらの土器は一般的なものと、祭祀的な器種が混在しており、特別な傾向は見られない。また、住居址のフク土や床面上には殆ど遺物が認められないことから廃棄にあたって意図的に清掃されたと思われる。

他には住居に接する土塋から鉄斧が出土しているが、約600m西方に位置する横寺遺跡に見



第20図 調査位置図 (S=1/5,000)



られる様な絵画土器等は、同時期の集落にも関わらず一切見られない。

古墳時代の遺構は、前期の隅丸方形の住居址4軒、後期のカマド付きの住居址3軒を検出した。この内、後期の

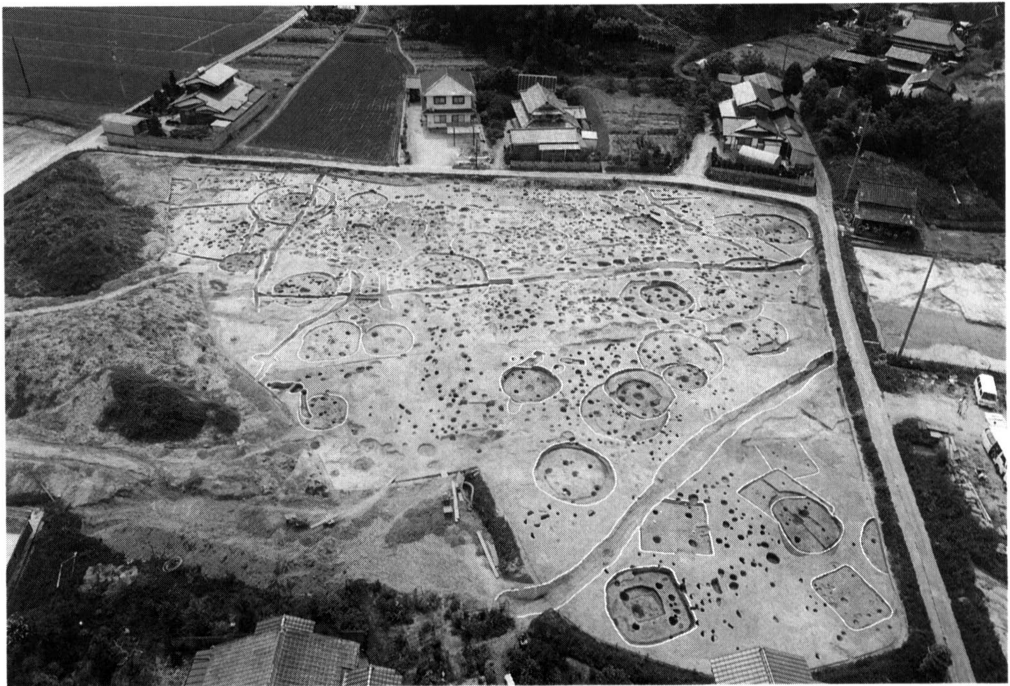
SH01は炭化材が放射状に遺存していたが、遺物等は認められない。また、SH03の床面中央には非常に被熱硬化した粘土の高まりが認められ、周辺が赤化しており磁石に反応する錆片も採取された事から、屋内の鍛冶炉と考えられる。

坊ヶ内遺跡の所在する浪月地区の谷部奥の斜面には、かつて横穴式石室を有する古墳が数基存在し、鉄滓が濃密に分布する地点もあることから、この集落との密接な関係、特に鉄生産についての関連が予想出来る。

(武田 恭彰)



第14図版 調査区遠景（南から）



第15図版 調査区近景（東から）



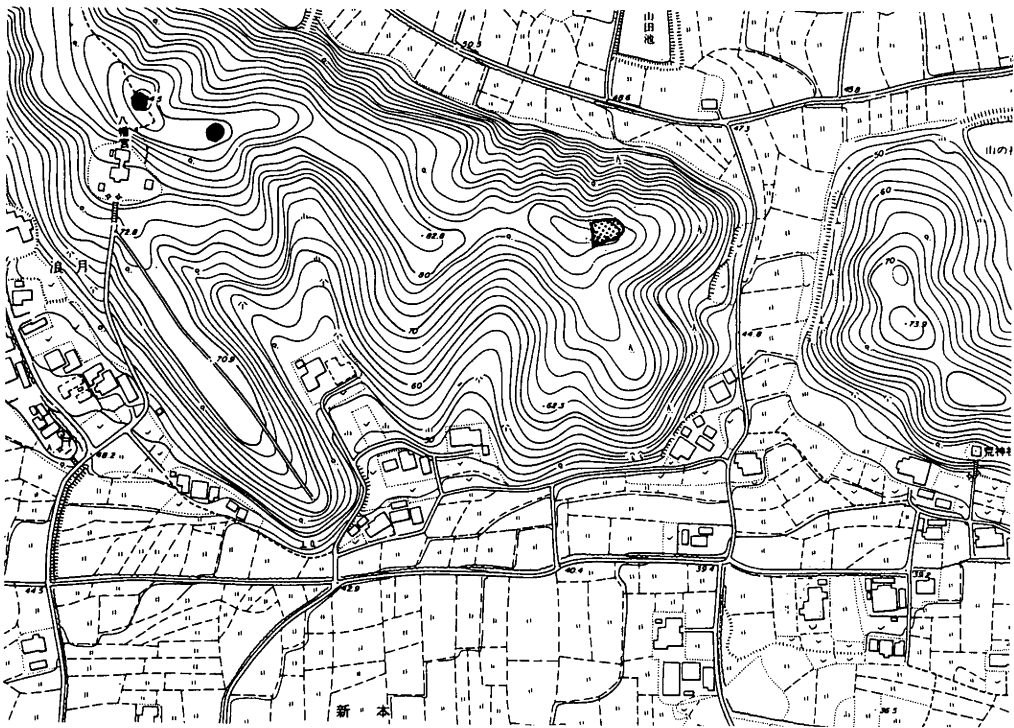
## 新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 その3

遺跡名 有安遺跡・有安1号墳  
所在地 総社市新本  
調査期間 1994年6月9日～1994年7月16日  
調査面積 480m<sup>2</sup>  
調査概要

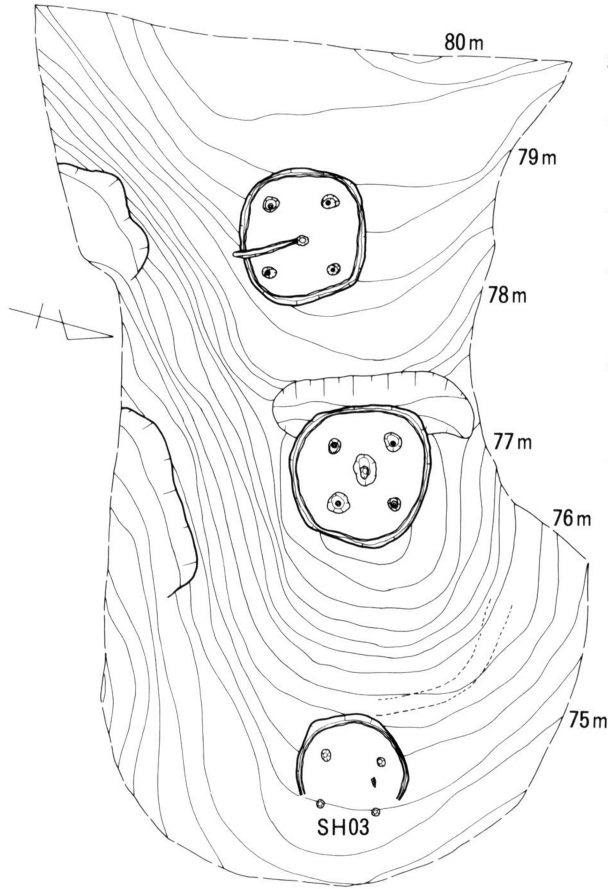
遺跡は新本川左岸の新庄地区と殿砂地区を隔て、東西に細長く延びる標高90～80mのなだらかな丘陵の端部に位置する。この丘陵上には、低い墳丘を有する前期古墳数基が存在する事は以前から知られていたが、現在は植林等により地形が改変され、正確な数は不明である。

今回、ほ場整備事業に伴う山土の採取にあたり、遺跡の存在が予想されたため、樹木の伐採後に確認調査を行った。その結果、古墳と見られる高まりと弥生時代中期の住居址・段状遺構を確認した。

調査は古墳から行き墳丘の精査を行った結果、主体部は削平を受け不明であったが、表土中より鉄鉾が出土した。周溝は斜面部では殆ど流失しているが、山側では明瞭に残存しており、この事から古墳の規模は一辺8m前後の方墳と推定される。



第22図 調査位置図 (S=1/5,000)



弥生時代の遺構は住居址3軒、段状遺構3ヶ所を検出した。住居址はいずれも尾根上に位置し円形を呈しており、柱穴は4本から6本である。3軒共に拡張は全く見られず、最も小型のSH03は床面上に炭化材が残る焼失住居であった。また、遺物は床面上には皆無で、貼り床も顕著には見られない。

段状遺構は斜面を切り出して平坦部を造成していたと思われるが、大半が流出しており、正確な規模は不明である。フク土からは土器片が上方から投げ込まれた状態で大量に出土した。

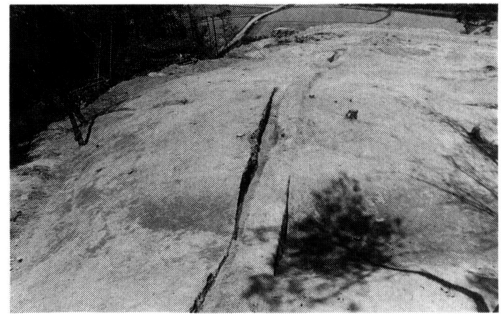
このような尾根上の集落は、総社平野に接する丘陵上になり普遍的に存在することが明らかになっているが、いずれも短期間の存続の傾向が強いのが特色である。

(武 田)

第23図 有安遺跡遺構配置図 (S=1/ 300)



第16図版 調査地遠景



第17図版 調査地近景

## 新本新庄地区は場整備事業に伴う発掘調査 その4

遺跡名 とんどこ 殿砂遺跡

所在地 総社市新本

調査期間 1994年12月16日～1995年1月31日

調査面積 1100m<sup>2</sup>

### 調査概要

殿砂遺跡の位置する谷は、新本川左岸域の有安遺跡が所在する低い丘陵の北に東西に延びている。遺跡は東に開口する谷最奥部の山裾の細長い段丘上に南面して所在している。

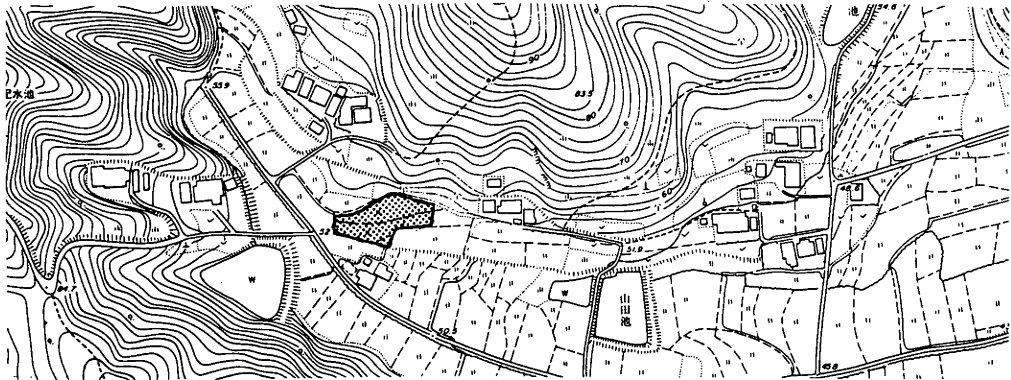
遺構・遺物は大半が中世で、古墳時代の遺物が若干混じる。

中世の遺構は建物6棟、井戸2基、溝8条、石垣状遺構、土墳墓等である。この内、最大のS B01は6間×5間で南と西に庇が付く約16m×15mの建物である。柱穴は30cm前後であるが、四角い柱材が残存しているものが多く、抜き取られた柱穴には細長い川原石が差し込まれている。他の建物も同様の状態の柱穴が多い。

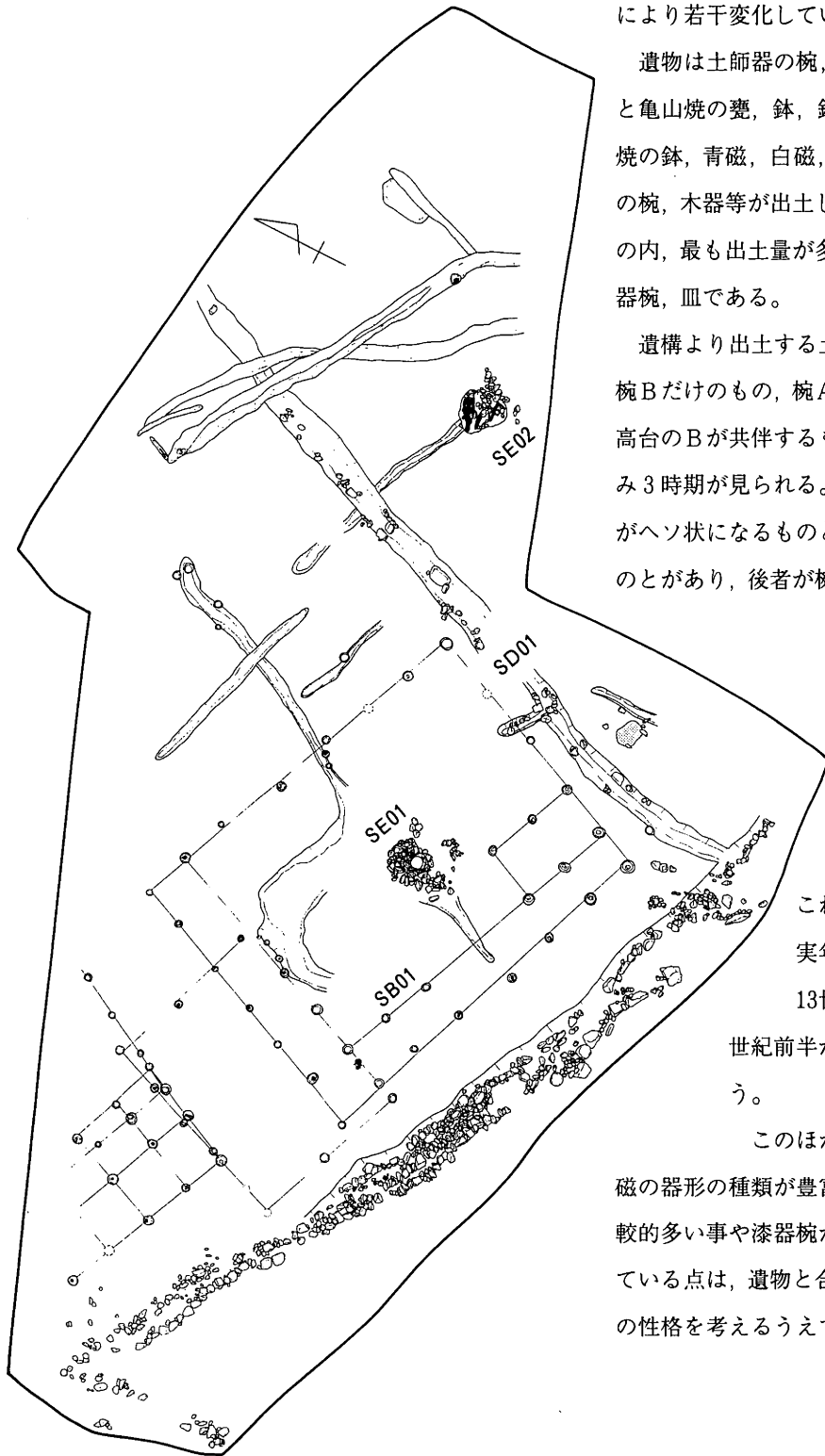
井戸は石積みで約2mの底に曲物を据えているS E01と、約1.5mの深さで板材を杭で留めたS E02がある。両方とも廃棄にあたっての特別な祭祀行為などは確認出来ないが、S E02は周辺が造成されて埋められる時の廃材や石等が上層にまとめて投棄された状況で検出された。溝は建物の方向に合わせて掘られているが、建て替え時に、焼土、炭化材等で埋め戻されているものや、土師器碗を並べて埋め戻した溝もある。

石垣状遺構は建物の平坦面の南面を画するかのようになり、人頭大の川原石を2段に重ね約30mにわたって築いている。この石垣は、平坦面の半分以上が斜面や小谷を埋めて造成されているため、その土を留める役割が考えられる。

建物は遺物や切り合いから3時期あったと考えられるが、石垣や溝なども、造成による拡張



第24図 調査位置図 (S=1/5,000)



により若干変化している。

遺物は土師器の椀、坏、皿、鍋と亀山焼の甕、鉢、鍋、瓦、備前焼の鉢、青磁、白磁、石鍋、漆器の椀、木器等が出土している。この内、最も出土量が多いのは土師器椀、皿である。

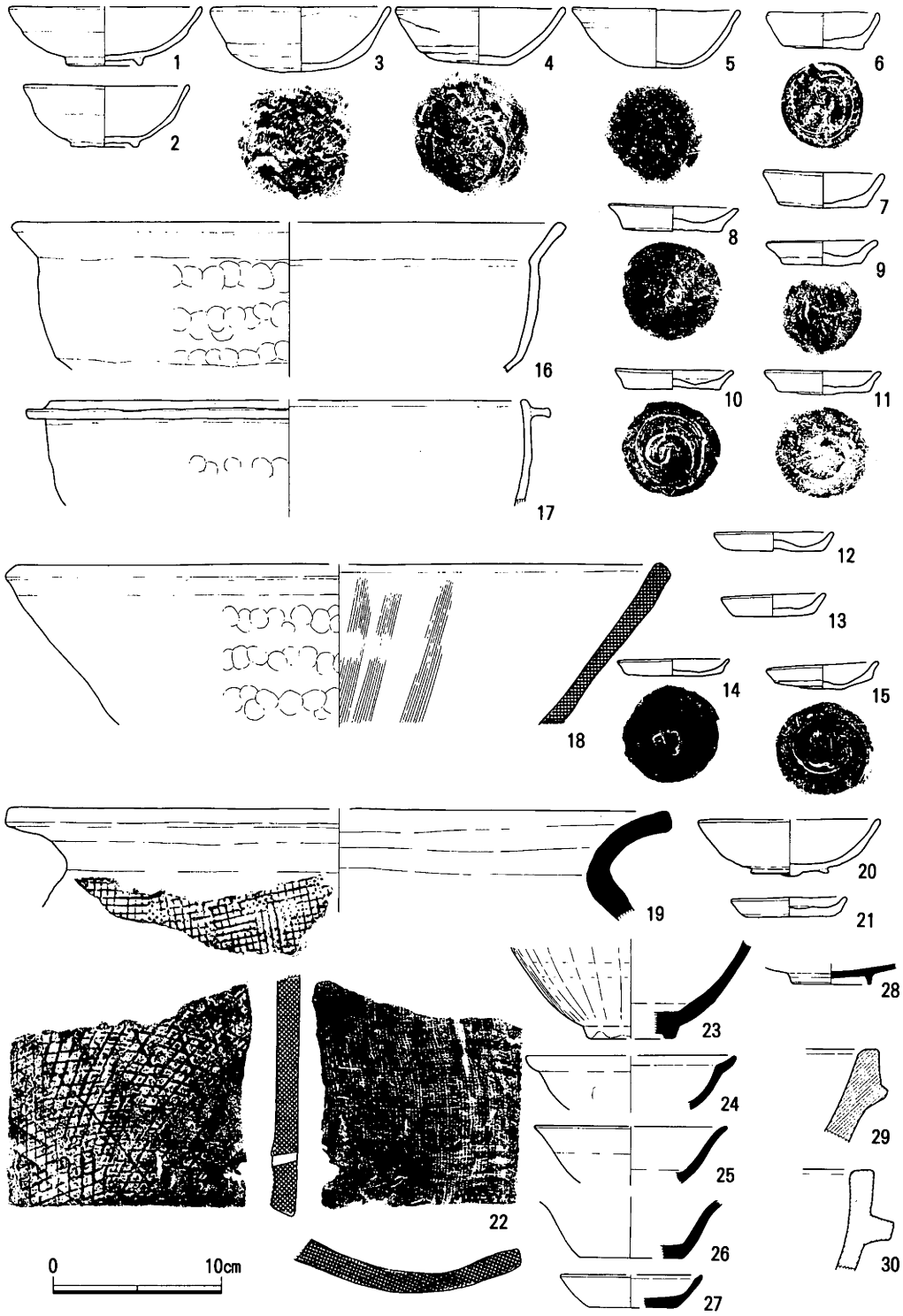
遺構より出土する土師器椀は、椀Bだけのもの、椀Aと退化した高台のBが共伴するもの、椀Aのみ3時期が見られる。椀Aも底部がへソ状になるものと窪まないものがあり、後者が椀Bに伴う。

これらの土器の実年代としては13世紀末から14世紀前半が考えられよう。

このほか、青磁、白磁の器形の種類が豊富で、量も比較的多い事や漆器椀が3点出土している点は、遺物と合わせて遺跡の性格を考えるうえで興味深い。

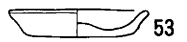
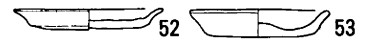
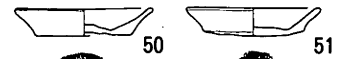
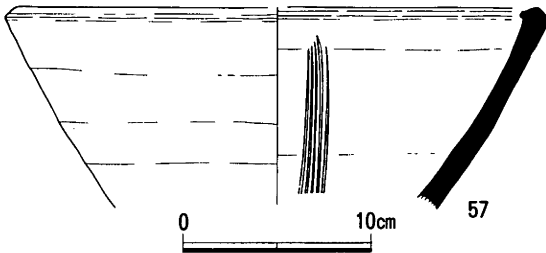
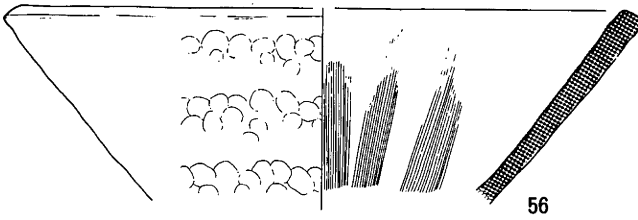
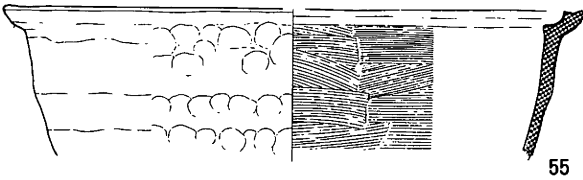
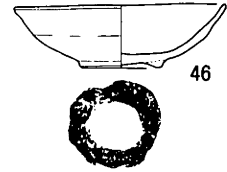
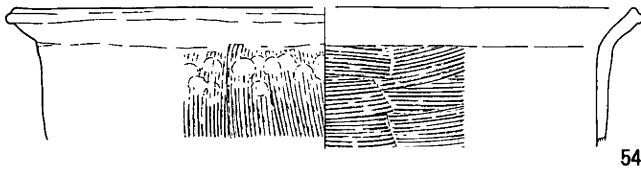
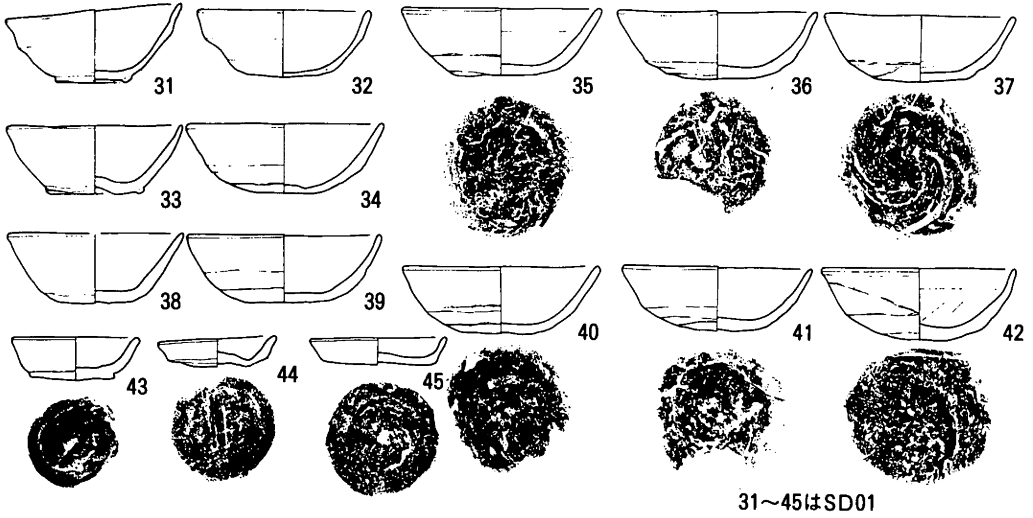
(武田)

第25図 殿砂遺跡遺構配置図 (S=1/600)



1～18はSD01東造成土，19～21はSE01

第26図 出土遺物 1 (S=1/4)



54~57は石垣南の低湿地

第27図 出土遺物 2 (S=1/4)



第18図版 調査区遠景（東から）



第19図版 調査区近景（南から）

## 新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査 その5

遺跡名	高砂遺跡
所在地	総社市新本
調査期間	1995年2月1日～4月30日
調査面積	6200m <sup>2</sup>
調査概要	

高砂遺跡は殿砂地区から山田地区にかけて谷が開けはじめる付近へ、北から派生する緩やかな丘陵の先端部に位置している。遺跡は浸食後残った二つの段丘状の平坦面と斜面に存在し、斜面を1区、平坦部を2区として工事により影響を受ける部分について調査を行った。

1区では主に弥生時代後期から古墳時代の集落が緩やかな斜面に立地する状況を検出した。弥生時代の遺構は住居址9軒、溝、土壇、谷等であるが、さほど濃密な分布は見られない。

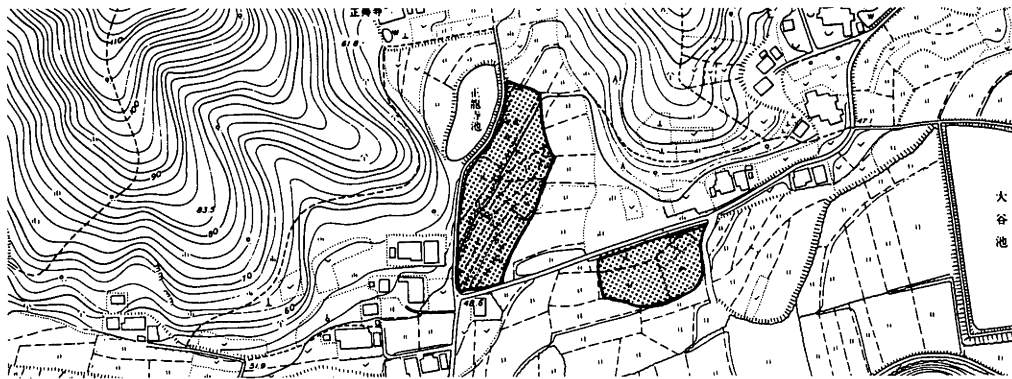
集落は南北に長い調査区の中央を東西に走る谷により分断されており、谷より南には遺構が比較的少ない。

住居址はS H03を除いて他は直径7m～4mの円形を呈し、いずれも2～4回の拡張が見られ、貼り床も入念に施されている。床面上に炭化材が見られるのはS H05のみであるが、遺物が全く残っていない事は全ての住居に共通している。

方形のS H03は、円形の04に切られているため正確な形態は不明であるが、一辺約7mで四隅に4本とその間に2本ずつ計12本の比較的大きな柱穴が壁際に検出された。床面には4本の柱と中央穴があり通常の住居と同様である。

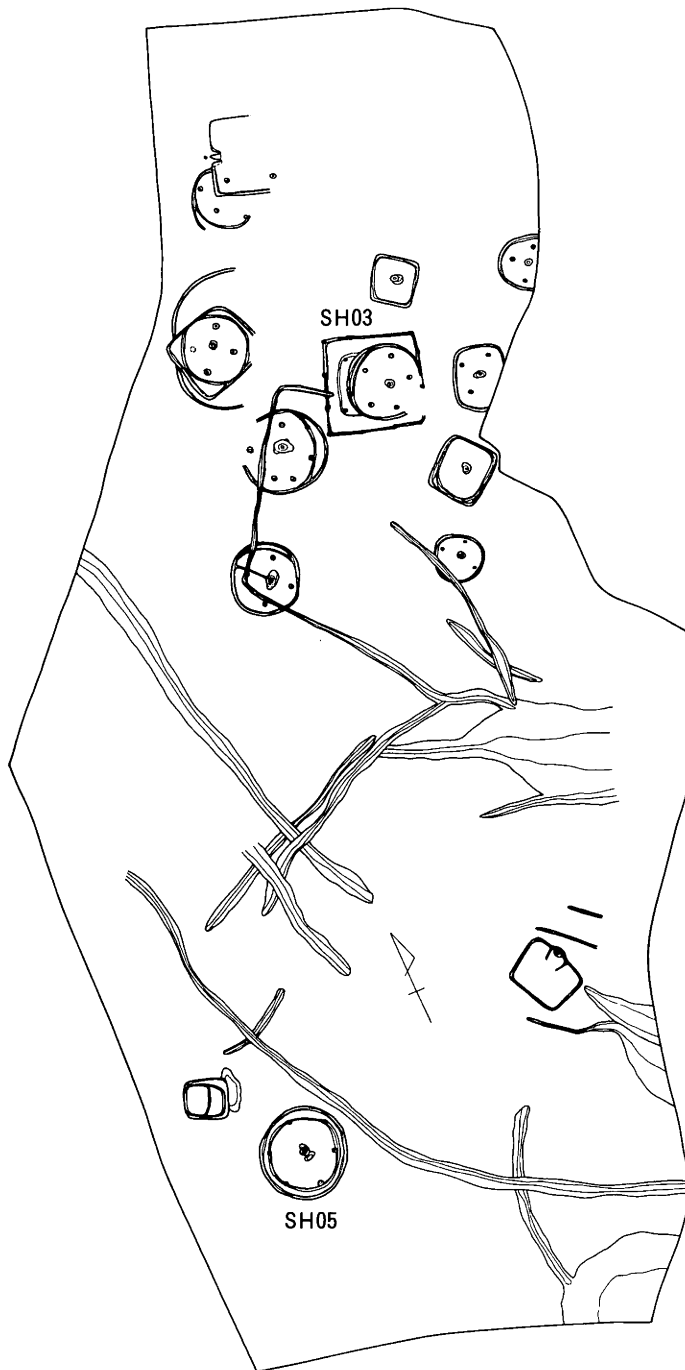
溝は山側から住居への水をかわすために円弧状で谷に注ぐ様に掘られたものが多い。

谷のフク土からは整理コンテナ110箱分の土器がまとめて投棄された様な状態で出土したが、比較的、長頸壺と器台が多いことが特色である。



第28図 調査位置図 (S=1/5,000)





古墳時代の遺構は前期のカマドの付かない隅丸方形の住居址が6軒、カマド付きの後期の住居址が1軒、溝、土城等が検出された。

特に古墳時代前期の遺構が、新庄地区のなかでは比較的多く確認されたが、これは本遺跡の上方の尾根に所在する前方後円墳をふくむ砂子山古墳群との関係が考えられる。

2区は舌状に突き出た平坦面に中世の建物、井戸と、隣接して広がる水田遺構を検出した。

水田は灰色の微砂に覆われた低い畦状の高まりや溝が部分的に確認出来たが、後世にかなり削平を受けているため全体の規模は不明である。

(武田)

第29図 高砂遺跡遺構配置図 (S=1/600)



第20図版 調査区遠景（北から）



第21図版 調査区全景（真上から）

## 福井地内における分譲宅地造成事業に伴う発掘調査

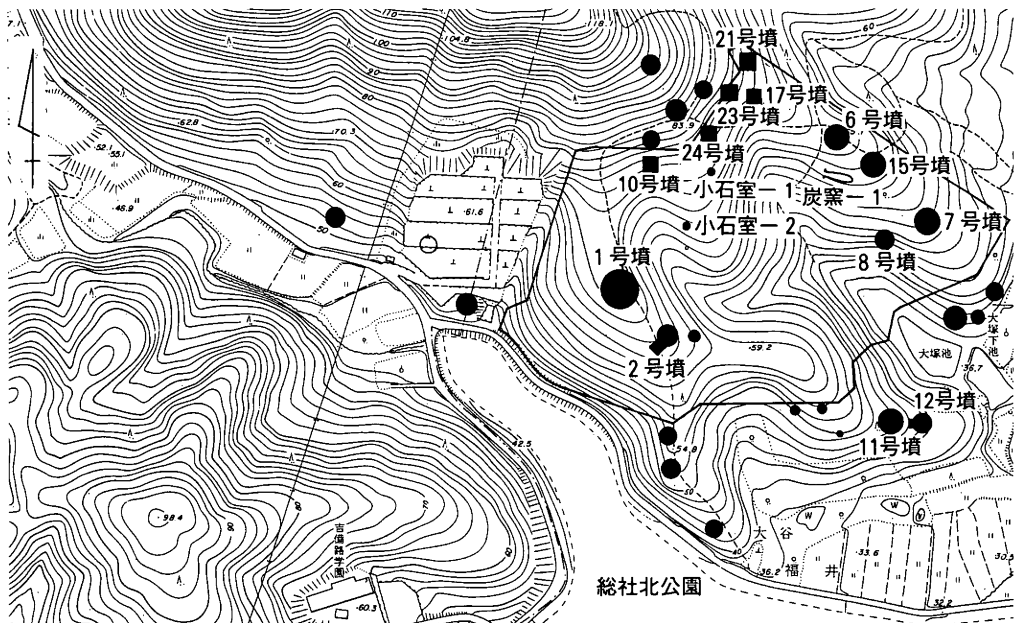
遺跡名 福井大塚古墳群  
所在地 総社市福井字大塚1583-1他17筆  
調査期間 1993年12月1日～1994年8月5日  
調査面積 約4,500m<sup>2</sup>  
調査概要

本調査地は、総社市街地の北に広がる低丘陵の縁辺に位置している。福井大塚古墳群は、岡山県遺跡台帳に大谷古墳群として記載されているが、前回1992年1月18日～1993年6月30日までの調査時に小字名の塚を用い福井大塚古墳群と呼称することとした。

調査対象となったのは当初6、7、8、10、17号墳の5基であったが、調査の進行に伴い、新たに15、21、23、24号墳・小石室-1、2及び横口付製炭窯が新規に発見され、調査をおこなった。また造成予定地内の丘陵斜面には重機によってトレンチの掘削を行い、集落址、製鉄遺構等の確認調査を行った。

横口付製炭窯は、尾根稜線上からやや下った斜面にテラスを作り、山側に排水のための溝を廻らせている。半地下式の窯体は全長10m、幅約1.5mを測り、8個の横口を持っている。内面は赤褐色に硬く焼きしまり、河原石を組んだ煙道もよく焼けていた。

古墳群は当初すべて円墳と考えられていたが調査の結果、6・7・8・15号墳が円墳であり、



第30図 発掘調査位置図 (S=1/ 5,000)

10・17・21・23・24号墳は方墳らしいことが判明した。

墳丘規模は6・15号墳が径約15m、7・8号墳が径約10m、17号墳が一辺約4m、23・24号墳が一辺約5m、10・21号墳が一辺約7mを測る。

内部主体はいずれも横穴式石室であり、長さ2.5m前後・幅0.6～0.7mの17・24号墳と、長さ4～4.5m、幅0.7～1.0mの8・10・21・23号墳、長さ7～9m・幅0.7～1.0mの6・7・15号墳に大別できる。このうち6号墳が奥壁に向かって左片袖、7・15号墳が右片袖である以外は無袖の石室である。床面は6・7・8・15号墳が礫敷で、他は土床である。なかでも15号墳は奥壁近くからそれぞれ円礫敷、角礫敷、須恵器敷と3種類になっていた。石室の天井石は6号墳が完存していた他は、ほとんど抜き取られていた。

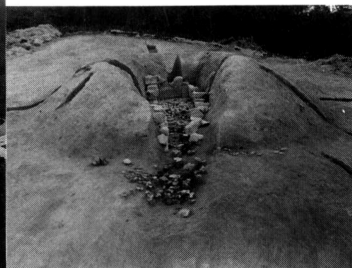
遺物は、8・17・23号墳からは出土しておらず、時期を明確に出来ない。6・7・15号墳は遺物から6世紀後半の築造と考えられる。6号墳はおもに羨道から蓋坏・高坏・横瓶などの須恵器を中心に50点以上の土器が出土している。7号墳は前庭部から蓋坏・高坏などの須恵器が掻き出された状態で出土した。15号墳からはミニチュアの長頸壺などの須恵器が出土している。10号墳・24号墳は、7世紀後半の築造と考えられ、高台付の須恵器長頸壺・坏のほか、10号墳からは土師器甕・坏など多数の遺物が出土している。

小石室-1・2はともに石材を一辺1m強の方形に組んだ石囲が検出され、存在が明らかになった。小石室-1は床面に小角礫を敷き詰めており、須恵器平瓶1点が副葬されていた。この土器から7世紀中葉の時期のものと考えられる。小石室-2は床面に大きめの平石3個が敷かれていた。副葬品は無かったが、排土中から鉄釘が出土している。

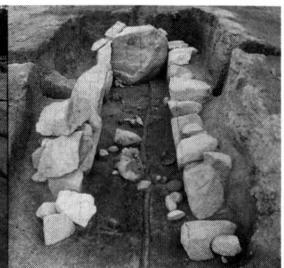
以上のように今回の調査では、福井大塚古墳群は6世紀後半から築造が盛んになり、7世紀後半には横穴式石室と平行して小石室も築造されていることが明らかになった。（高橋）



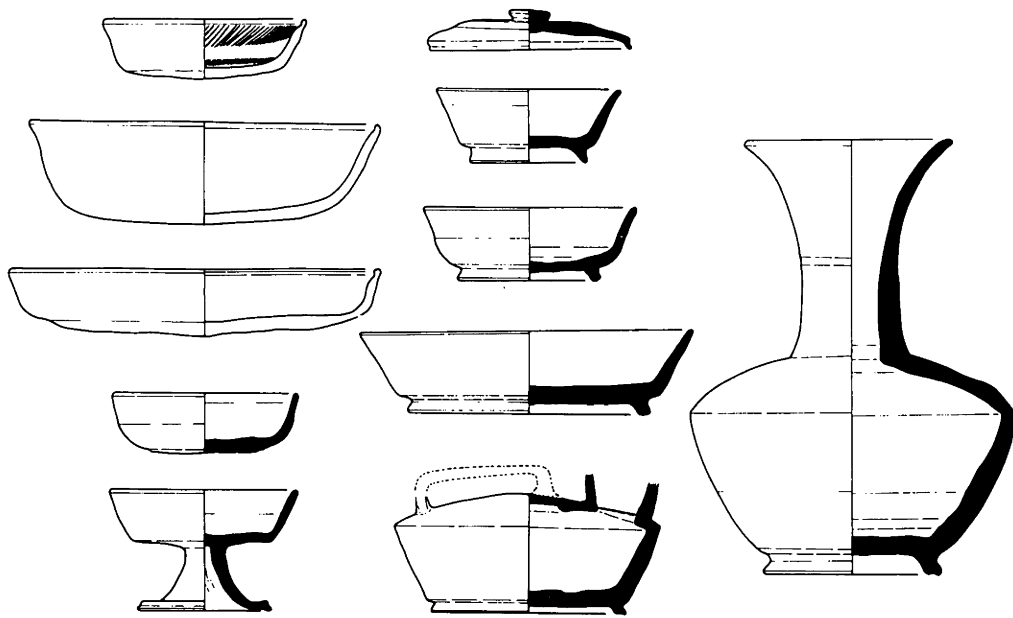
第22図版 調査地遠景



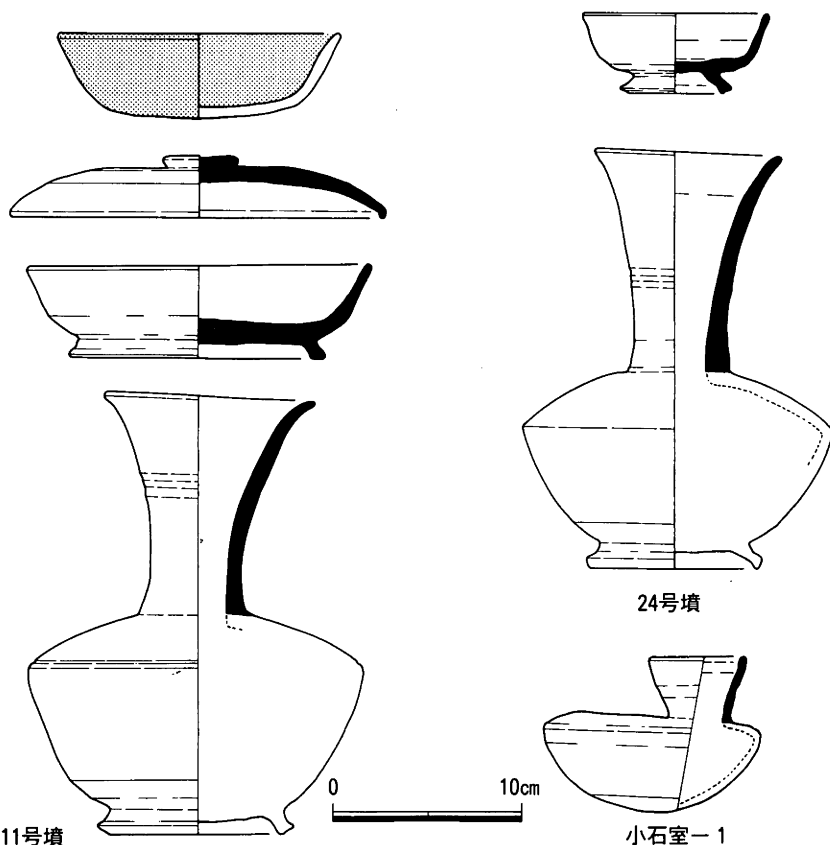
第23図版 7号墳遺物出土状況



第24図版 10号墳遺物出土状況



10号墳



11号墳

24号墳

小石室-1

第31図 出土遺物 (S=1/4)

## 駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 三軒屋遺跡, 尾毛手遺跡, 惣善寺遺跡Ⅰ区, 西三軒屋遺跡Ⅰ区

所在地 総社市三輪

調査期間 1994年9月20日～1995年3月31日

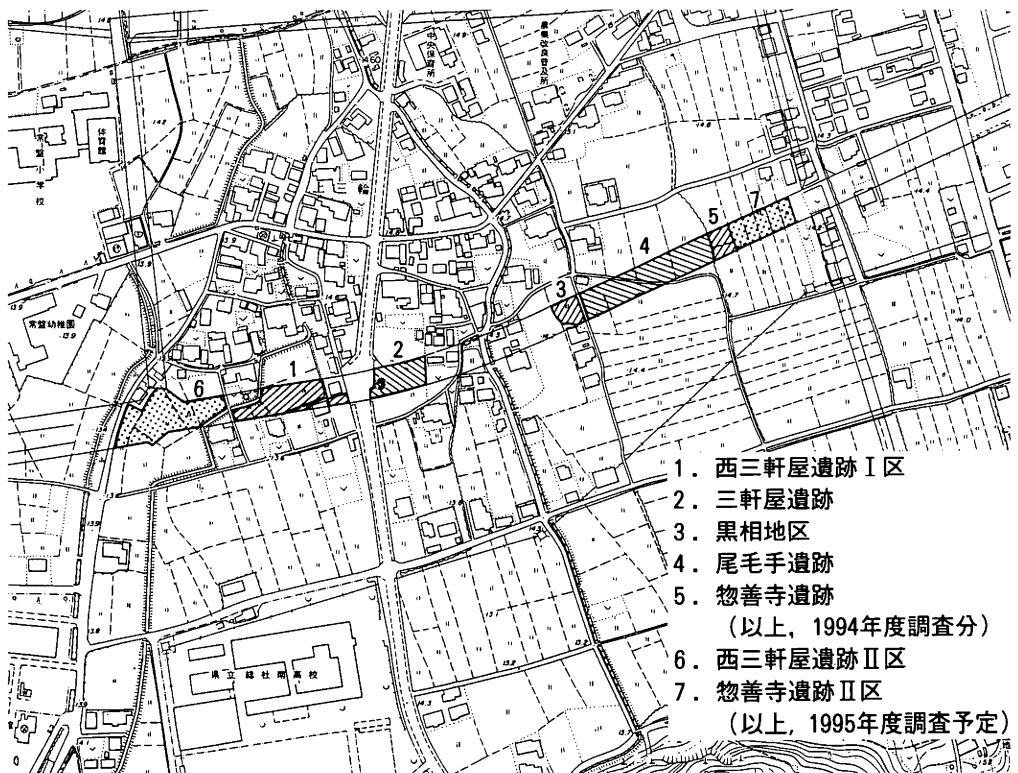
調査面積 6500m<sup>2</sup>

### 調査概要

#### (調査経緯)

総社駅の南部地域を対象とした区画整理計画が立案され、その事業に伴って、すでに一部整備されている東総社中原線に接続するよう、22m道路の建設が予定された。周辺には真壁遺跡や樋本遺跡が所在し、道路計画予定地内にも遺跡が広がる可能性が高いことから確認調査を実施した。確認調査は、1990年11月19日～1991年1月14日まで行なわれ、その結果遺跡の存在が認められたため、発掘調査を実施することとなった。

調査は、工事工程に合わせて、三軒屋遺跡→<sup>くろあい</sup>黒相地区、<sup>やけで</sup>尾毛手遺跡→惣善寺遺跡Ⅰ区→西三軒屋Ⅰ区の順で行った。なお、遺構の検出された地区は、小字名を付して遺跡名とした。



第32図 調査区位置図 (S=1/6,000)

(遺構・遺物)

三軒屋遺跡，西三軒屋遺跡Ⅰ区

三軒屋遺跡は、西から東へ緩やかに下がっており、最も高い西端部に、弥生時代から中世にかけての溝・土塋・柱穴に加え、中世と思われる石敷遺構が検出された。しかしこれらの遺構は、後世の地下げにより大幅に削平されており、遺存状態はきわめて悪く、石敷遺構の性格も不明である。

下層には、まばらではあるが全面に縄文時代中期～晩期の遺構が存在する。従来基盤と考えられてきた黄褐色の層のなかに掘り込まれたもので、埋土と基盤層との間に大きな違いは見いだせない。中には、焼土塊を含むものもあり、その一つから焼土塊と重なって丹塗り磨研土器の頸部片と胴部片が出土している。

西三軒屋遺跡Ⅰ区は、門田三輪線を挟んで三軒屋遺跡に西接する。三軒屋遺跡で出土した石敷遺構はここでは検出されず、古墳時代の溝・柱穴が若干と、中世の溝・溝状遺構・畝状遺構が多数出土し、やや様相は異なる。

下層には、側溝中から基盤層内に焼土塊が見られることから、三軒屋遺跡同様縄文時代の遺構が存在するものと思われ、来年度引き続き調査を行う予定である。

遺物は、古墳時代中期の大溝から土器が多量に出土した以外は、各遺構からの遺物出土量は少ない。

遺構・遺物等から、両遺跡は集落の中心からはずれているものと思われる。西三軒屋遺跡Ⅱ区の表土剥ぎの際、遺物がこれまでと異なり多く出土することから、集落の中心は西および地形の上がっていく北側に推定することができる。

屋毛手遺跡・惣善寺遺

跡Ⅰ区・黒相地区

隣接したこの地区では、近世以降の水田層を除去すると、黒相地区及び屋毛手遺跡の農道以南に礫層がひろがり、黒相地区からは、遺構、遺物の出土はみられなかった。屋毛手遺跡の上層からは、礫層がきれる農道付近より、弥生時代から古墳時



第25図版 西三軒屋遺跡Ⅰ区上層全景（東から）



第26図版 屋毛手遺跡上層空撮（真上から）

代初頭に属するものと思われる北西-南東方向の溝が、10条程度重なりあって検出された。また、中世の溝も南北方向に数条検出されている。そのほかこれらの時代に属する柱穴や土壇等が出土したが、総じて遺構密度は低く、遺物も少ない。惣善寺遺跡Ⅰ区上層の状況もほぼ同様で、数条の溝と

若干の土壇・柱穴が検出されたのみである。このことから、弥生時代から中世にかけては、集落のはずれにあたるものと思われ、集落の本体は地形が上がっていく北側に存在したと思われる。

屋毛手遺跡、惣善寺遺跡Ⅰ区の下層からは、縄文時代後・晩期の土壇・柱穴が多数検出された。これらの遺構の埋土は、三軒屋遺跡における縄文時代の遺構内埋土と異なり暗褐色を呈する。中には2m以上の長さや1m以上の深さを持つ遺構もあるが、遺物が少ないこともあり、性格は不明なものが多い。

来年度（1995年度）は、引き続き西三軒屋遺跡Ⅰ区の調査を行い、終了後は西三軒屋Ⅱ区続いて、惣善寺遺跡Ⅱ区の調査に移る予定である。

（平井 典子）



第27図版 屋毛手遺跡下層全景（西から）



## 鬼城山第1城門跡の発掘調査

遺跡名 鬼城山  
所在地 総社市奥坂1762-6・7  
調査期間 1994年11月21日～1995年5月19日

### 調査概要

国指定史跡鬼城山の第1城門跡は、昭和53年の学術調査の際にすでに門の跡であることが指摘されていたが、平成5年11月15日に、露出していた石材の一部に加工痕があることが判明し、これが唐居敷であることが明らかになっていた。その後平成6年2月3日に開催された第2回目の鬼城山整備委員会では、当面3ケ年で現況調査を行うが、その一環として第1城門跡で将来整備を行うための基礎資料を得るための発掘調査を平成6年度中に実施することが承認されたため、平成6年11月21日に調査に着手した。

調査は、崩壊した石材の撤去にかなり時間を費やしたが、その結果、城堡の中ほどに4本の門柱で支えられる構造物があり、これまで知られていた土塁に対して斜めに築かれる石垣は、背面の門柱につながり、また東側にもこれに対応する石垣が存在し、城内から城外に向かって漏斗状にすぼまる形であることが明らかになった。石垣は長さ6m、高さ2mほどで最大6段が残存した。

門は、まず版築によって地業を行ったのち一辺1mほどの方形の掘形を穿ち、径40～45cmの門柱を立ててから唐居敷や敷石を据える。門柱の間隔は間口346cm、奥行270cmである。門の側面は版築による土壁と考えられる。前面の門柱の間に間口240cmの両開きで内側に開く扉を備える。また唐居敷だけでなく門柱で囲まれる内側は平滑に整えられた割石を組み合わせた石敷きとしているのが特徴である。城内側の門柱の背面には、細長い2個の石材を横たえた段差をつくっており、これと背後に露出する岩盤との間は少し敷石がある。

既発見の唐居敷は、原位置にあるかどうか疑問がもたれていたが、対応する唐居敷が西側で検出されたことにより、もとの位置にあったことが明らかになった。さらに既発見の唐居敷は、木の根や土砂の流出などの影響を受け三つに割れているが、復元すれば240×170cm、厚さ40cmを計る大きなもので、新規に発見されたものもほぼ同様の規模である。

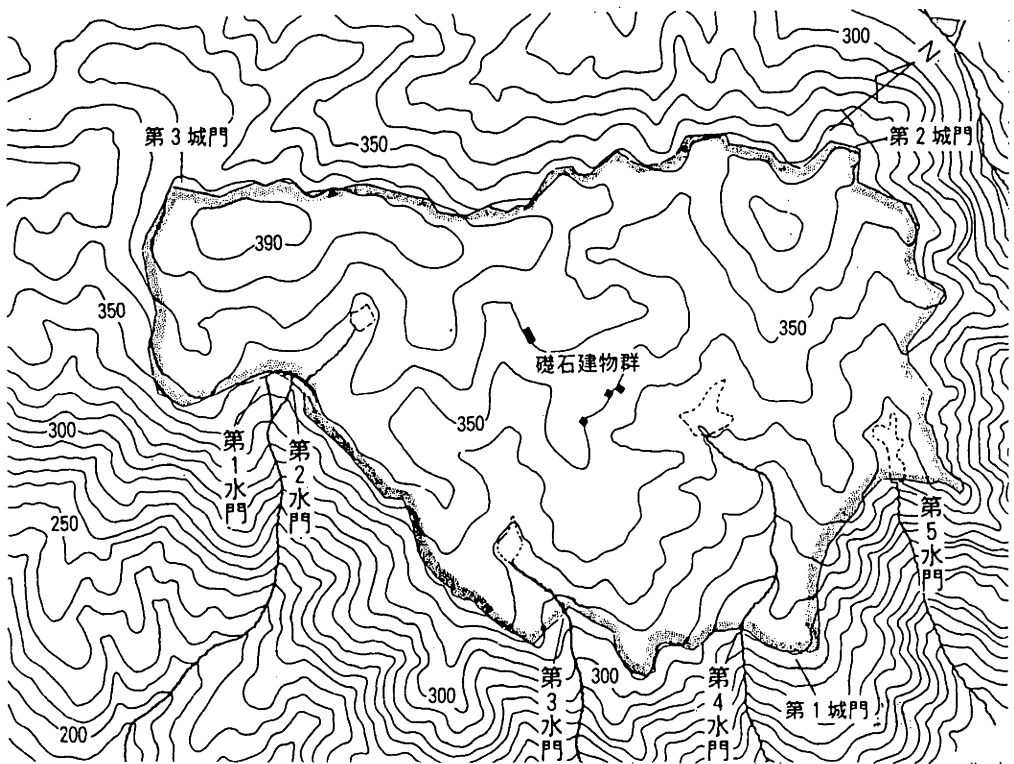
唐居敷の全面3.2mの位置には外側列石があり、敷石から列石の上面までの高低差は約2mである。城外から門にいたる通路は、外側列石の切れ目が通路になる可能性も考えられるが、土砂の流出が著しく、はっきりしない。また、城内に向けての通路は、石垣の間の岩盤に階段などの加工を見いだせないことから、梯子段などを使用して岩盤上を通ったことも想定できるが、判然としない。

城内側の門柱の両側には、ほぼ3 m間隔で柱の痕が西側に2本分、東側に3本分検出された。これは、門柱とは異なり版築を敷石から50cmほど積み上げてから堀形を穿って立てられ、土塁上に柱が露出していたものであれば柵あるいは板塀の可能性が考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師器の細片がごく少量認められたにすぎず、これらは流土中の出土である。また、瓦は出土していない。したがって、築造年代を知る手がかりは、唐居敷の構造が大野城跡太宰府口城門の第1期のものに近いという一点のみしかないが、今回の例が蹴放の加工をもつなど、厳密に同一の手法というものではないこともまた事実である。

今回の調査の結果からは、第一城門跡においては一旦門の整備が行われた後に柱を建て替えるなどの修築はなかったと考えられる。さらに、現在まで防御正面側と考えられる南面する城門は他に知られておらず、第一城門跡を廃棄して他に移動させたことも考えにくいことから、城そのものとしての機能を果たした期間は実は短期間であったとみる事が可能であるかもしれない。

(高田)



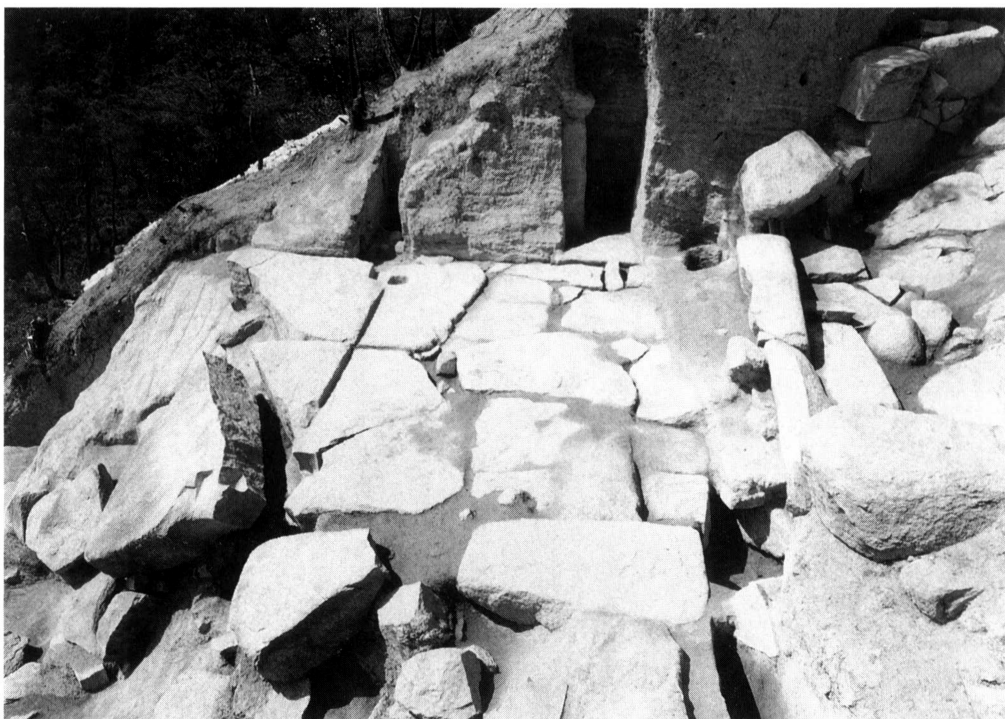
第33図 鬼城山城 (S=1/ 8,000)



第28図版 第1城門跡（空中撮影）



第29図版 第1城門跡近景（南東から）



第30図版 第1城門跡近景（北東から）



第31図版 唐居敷近景（北西から）



第32図版 版築の状況（東から）



第33図版 門柱土層断面（東から）



## 4. 発掘調査報告

松 井 古 墳

## 図 目 次

第34図	周辺遺跡分布図 (s=1/20,000)	58
第35図	調査前墳丘図 (s=1/150)	61
第36図	調査後墳丘図 (s=1/150)	63
第37図	墳丘断面図 (s=1/100)	64
第38図	石室実測図 (s=1/80)	65
第39図	遺物出土状況図 (s=1/80)	66
第40図	古墳 出土遺物 1 (s=1/4)	67
第41図	古墳 出土遺物 2 (s=1/1,1/4)	67
第42図	古墳 出土遺物 3 (s=1/12)	69
第43図	出土遺物 (s=1/4, 1/2, 1/1)	70
第44図	基壇平面図 (s=1/60)	73
第45図	基壇断面及び瓦立面図 (s=1/60)	73
第46図	基壇建物 出土遺物 1 (s=1/4)	75
第47図	基壇建物 出土遺物 2 (s=1/4)	75
第48図	基壇建物 出土遺物 3 (s=1/4)	76
第49図	基壇建物 出土遺物 4 (s=1/4)	77
第50図	基壇建物 出土遺物 5 (s=1/4)	78

## 図 版 目 次

第34図版	1. 調査地遠景 (北から)	2. 基壇全景 (真上から)	81	
第35図版	1. 調査前の墳丘 (北から)	2. 石室掘り上がり状況 (南から)	82	
第36図版	1. 石室入口集石	2. 石室入口遺物出土状況	83	
第37図版	1. 基壇掘り上がり (北東から)	2. 基壇掘り上がり (西から)	84	
第38図版	1. 基壇瓦列 (東から)	2. 基壇瓦列 (真上から)	85	
第39図版	1. 石室内遺物出土状況	2. 周溝内遺物出土状況	3. 基壇排水溝遺物出土状況	86
第40図版	出土遺物 1		87	
第41図版	出土遺物 2		88	
第42図版	出土遺物 3		89	
第43図版	出土遺物 4		90	



# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査にいたる経過

本古墳が所在する丘陵の開発行為許可申請が平成6年6月28日付けで岡山県知事あて提出された。この場所は南西方向に備中国分寺跡，南東にこうもり塚古墳，備中国分尼寺跡がある吉備路風土記の丘県立自然公園に隣接する。この場所には，遺跡が所在することが明らかではなかったが，周辺に重要な遺跡が多いことから，現地踏査を実施した。

現地は開発に伴う測量のため，以前に下刈りが実施されていたので，地形の観察が容易であった。古墳は南向きの斜面に，明らかに石室を抜き取った凹部として認められた。このため，地権者に古墳が存在することを連絡し，協議を行った。

協議の結果，古墳の位置が開発区域の進入道端にあたり保存が困難なこと，古墳の一部が既に破壊されていることから開発申請許可後に埋蔵文化財の発掘調査を実施することとした。

## 第2節 調査の体制

発掘調査は，総社市教育委員会が実施することになり，谷山雅彦・松尾洋平が担当した。

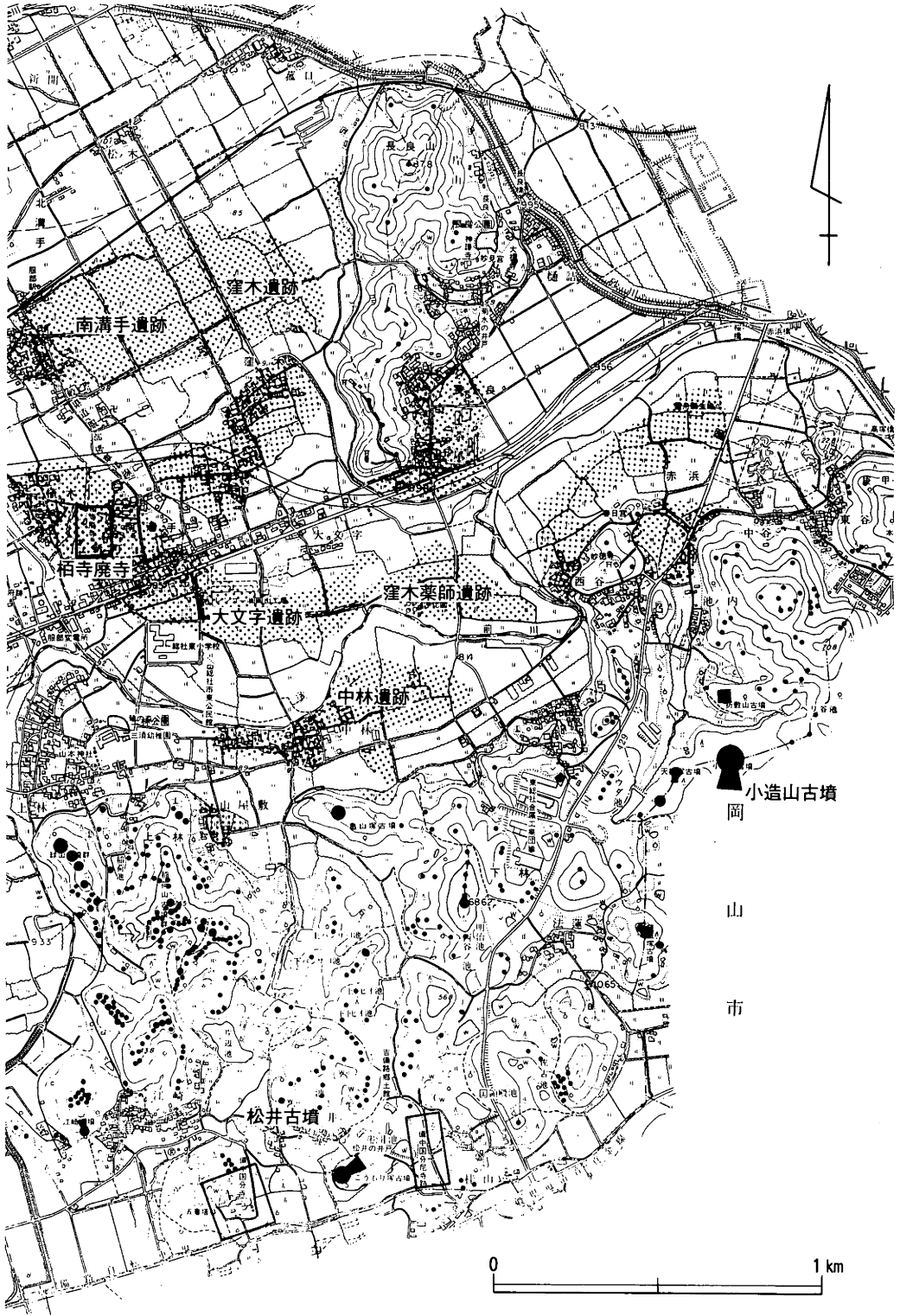
調査は，平成6年9月12日から10月31日まで実施した。調査にあたっては，地権者，建築設計会社の方々に種々の便宜を図っていただいた。また，現地指導においては県教育委員会の河本清，葛原克人，岡山理科大学亀田修一氏の御教授をいただいた。記して厚く感謝の意を表します。

### 調査組織

#### 文化財室

参事 兼室長	村上幸雄	(調整担当)	主事	平井典子	(調査担当)
			主事	武田恭彰	(調査担当)
主幹	山西賢一	(庶務担当)	主事	前角和夫	(調査担当)
主任	谷山雅彦	(調査担当)	主事	高橋進一	(調査担当)
主任	高田明人	(調査担当)	主事補	松尾洋平	(調査担当)

作業員 大村務 小池克己 林智恵子 松本和子



第34図 周辺遺跡分布図 (S=1/ 20,000)

## 第2章 地理的・歴史的環境

松井古墳は、総社市上林松井に所在する。

総社市は岡山県の南部に位置し、吉備高原の南端部分とそこから広がる沖積平野からなる。総社市の中央には、県内三大河川の一つ高梁川が蛇行しながら南流している。総社平野の東部はこの高梁川の氾濫原であり、現在でも多くの旧河道が凹部として認められる。

平野部の形成は、出土する遺物から遅くとも縄文早期には開始され、安定した状況になったのは晩期と考えられる。しかし、その後も度重なる洪水で高梁川の分流が平野部を西から東へ流れた。これが現在でも認められる河道跡である。

高梁川東岸の平野では、市街化に伴う発掘調査で弥生時代の集落遺跡の様子が明らかになりつつある。集落では、住居が数軒単位でまとまり、微高地に沿って認められた。市内の真壁遺跡<sup>(1)</sup>はその代表であり弥生時代後期を中心とした集落で旧河道南に展開する。また、備中国府確認調査<sup>(2)</sup>では、市内金井戸周辺の微高地を中心に調査を実施したが国府はもちろん弥生時代の集落においても断片しか認められなかった。集落が存在する微高地は限定されていたと思われる状況であり、今後さらに解明されなければならない問題である。

平野部の周辺の丘陵部では、古くから古墳が多く知られている。今回報告する松井古墳が所在する旧三須村の丘陵部<sup>(3)</sup>では、過去の分布調査によって古墳の内容がよく知られている。現在確認されている古墳は、350基を越えている。最も著名な古墳は、全国9位の作山古墳<sup>(4)</sup>である。また、岡山市との境の丘陵上には北から折敷山<sup>(5)</sup>・小造山<sup>(6)</sup>・夫婦塚<sup>(7)</sup>・銭瓶塚古墳<sup>(8)</sup>などが知られている。

後期古墳では全長約100mのこうもり塚<sup>(9)</sup>、全長約45mの江崎古墳<sup>(10)</sup>などの前方後円墳があり、この地域が吉備の中心であることがうかがえる。ここでは、庚申山・雲上山・松井（右経）・緑山・稻荷山・ドンドン山古墳群などの後期群集墳が密集している。単独墳では、亀山古墳、鳶ノ尾塚古墳などが目を引く。古墳時代の集落も丘陵周辺で確認され始めている。窪木薬師遺跡<sup>(11)</sup>は、三須丘陵の北に位置し、前川改修工事に伴い岡山県古代吉備文化財センターにより発掘調査が実施された。ここで注目されるのは、集落内で鉄器製作を5世紀前半以降7世紀前葉にかけて行っていたこと、また5世紀前半の住居から鉄鋌が出土したことなどである。

その後この地の南には、備中の国分寺・国分尼寺が造営された。国分寺は、天平時代に建立され、中世まで存続した。しかし、その後衰微し廃寺になり江戸時代になって日照山国分寺として再建された。伽藍配置など一部は発掘調査により明らかになっているが、周辺については調査されていない。

(谷山)

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 位置と環境

本墳は、総社市上林松井1309-5番地外に所在する。

松井古墳は、今回の住宅造成を契機に新規発見されたもので三須丘陵に位置する。三須丘陵は、総社平野南縁の主峰列から北東へのびる半独立状の標高50～60mの低丘陵地帯群で構成され、その規模は3.5×1kmほどのひろがりをもつ。この丘陵地には、これまでのところ約350基の古墳が確認されている。

松井古墳群は、三須丘陵南側のほぼ中央に所在し、40余基の古墳から構成される。古墳群が立地する丘陵は標高50mほどで中央に小さな谷を挟み、南北長800m・東西長700mほどの小尾根である。古墳群は、中央の谷を隔てて東西に二分され東側尾根には11基の古墳が確認されている。内部主体は不明なものが多いが、石室は7基確認されており主として斜面に立地している。一方、西側尾根では31基の古墳が確認され、その内、箱式石棺は6基認められており尾根上に立地するものが多い。横穴式石室は2基確認されている。墳形は、現在知られている限り円墳が大半を占める。古墳群中、著名なものにトビオの塚古墳がある。西側尾根の尾根上に立地し、墳形は、計23mの円墳で、横穴式石室の玄室長11.5m、幅2.3mを測る大型の石室をもっている。

調査前の本墳は、墳丘が馬蹄形状を呈し中央に石室の石材を抜き取った8.5×4.5mの窪みが認められた。また、山側を中心に弧状の周溝らしい凹部も確認することができた。本墳の周辺は墳丘の北側、及び東・南側に畑地が広がり、東側では周溝の一部が削平されていた。また、開口部の前面には小径があり、南側は段差をもって畑地となっていた。

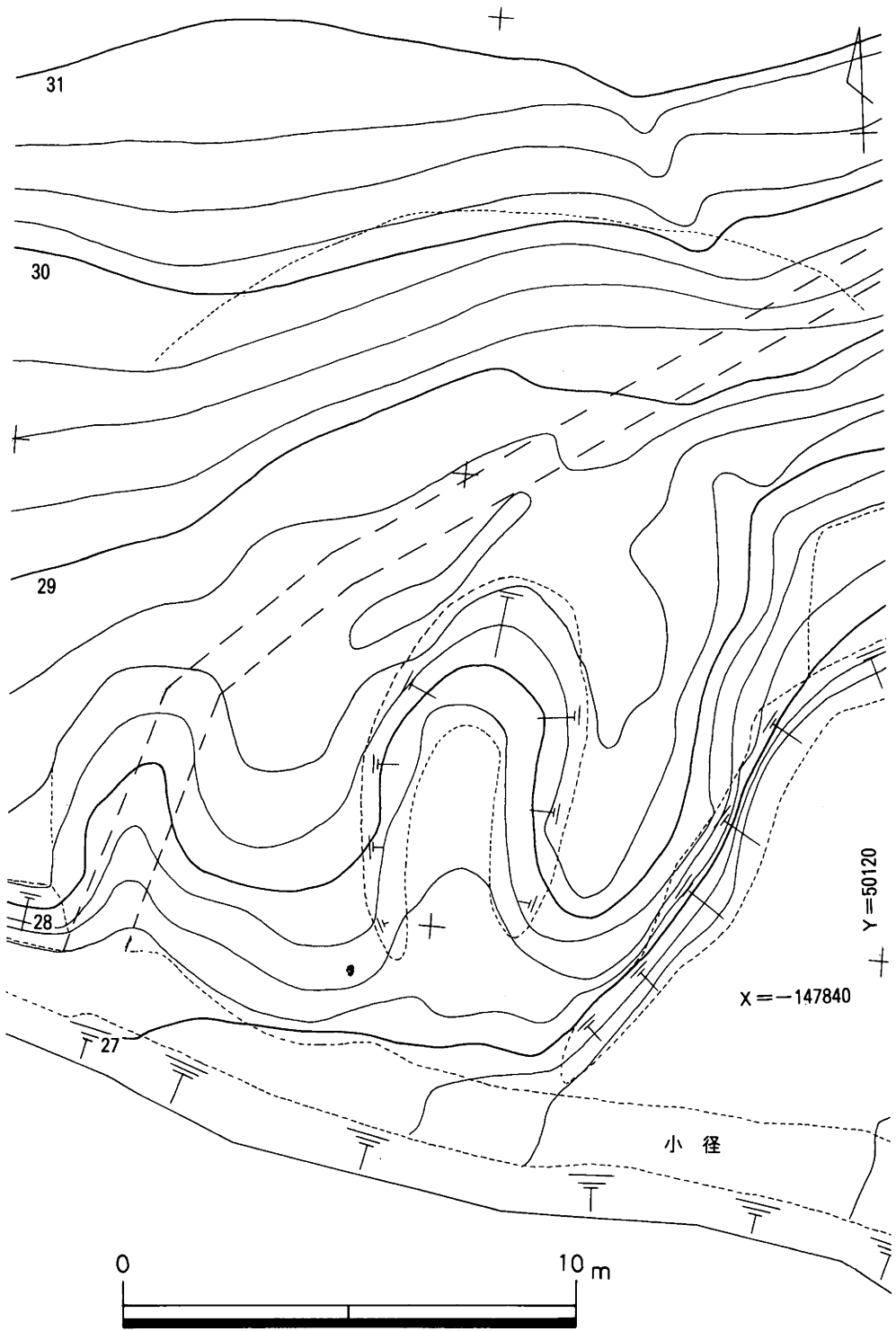
以上の状況をもとに計測したところ、本墳は径14m前後の円墳らしく、墳丘中央部の石材抜き取り痕から内部主体は南に開口する横穴式石室と推定された。(松尾)

### 第2節 松井古墳

#### 1. 墳丘と周溝

墳丘の規模と墳形を確認するために石室の主軸側と、それに直交する形で十文字にトレンチを入れた。さらに、その間に数本のトレンチを補足的に入れ墳丘を確かめた。

南北に設定したトレンチの断面観察からすると、基盤層は北から南へ下降している。また、東西トレンチでは、西から東へとゆるやかに傾斜しており墳丘の北・西側が南・東側よりも相



第35図 調査前墳丘図 (S=1/150)

対的に高いことがわかった。このことより地形を大きく改変することなく墳丘が築成されたと考えられる。

東西トレンチから墳丘の築成をみるとまず、墓壙は基盤層を掘り込んでつくられている。各層の厚さは20～50cmで各層はさらに分層でき、比較的ていねいなつくりである。基盤層に近い部分は水平に積み、墳頂に近い上部に及ぶにつれ上方に傾斜する。また、現状で観察する限り墳丘の盛土は、西側で基盤層から墳頂部までが75cm、東側では1.10mを測ることから東側の方が厚い盛りとなっている。側壁と墓壙との間には約10cm単位の細かい層で順次埋められ、やがて、基盤層と同じレベルで厚さ2cmの炭層に至る。6層中の赤灰色砂礫土には、さらに細かい単位からなる明灰色砂礫土と暗赤橙色砂礫土があり、これらはレンズ状堆積となって互層状をなす。このレンズ状堆積は、東西断面とも水平に盛っているというよりは上方を指向している。東西両断面の土質を比較すると、西側の方が軟らかく層自体も明瞭に分かれるものではない。一方の東側断面は、全体に硬く層の単位も多かった。

周溝は、墳丘の周りを円弧状にめぐり、特に西側と北東側は残存が良好であった。

墳丘の規模は、まず東西トレンチにより墳端が12.2mを測り、南北トレンチからは約11mが計測された。また、周溝は残りのよい西側からすると幅約2mを測り、周辺地形と周溝の最深部との差は1mを測る。

以上のことより、本墳の墳形と規模はおよそ12mの円墳で、幅約2m・深さ約1mの周溝が円弧状にめぐっていたものと考えられる。 (松尾)

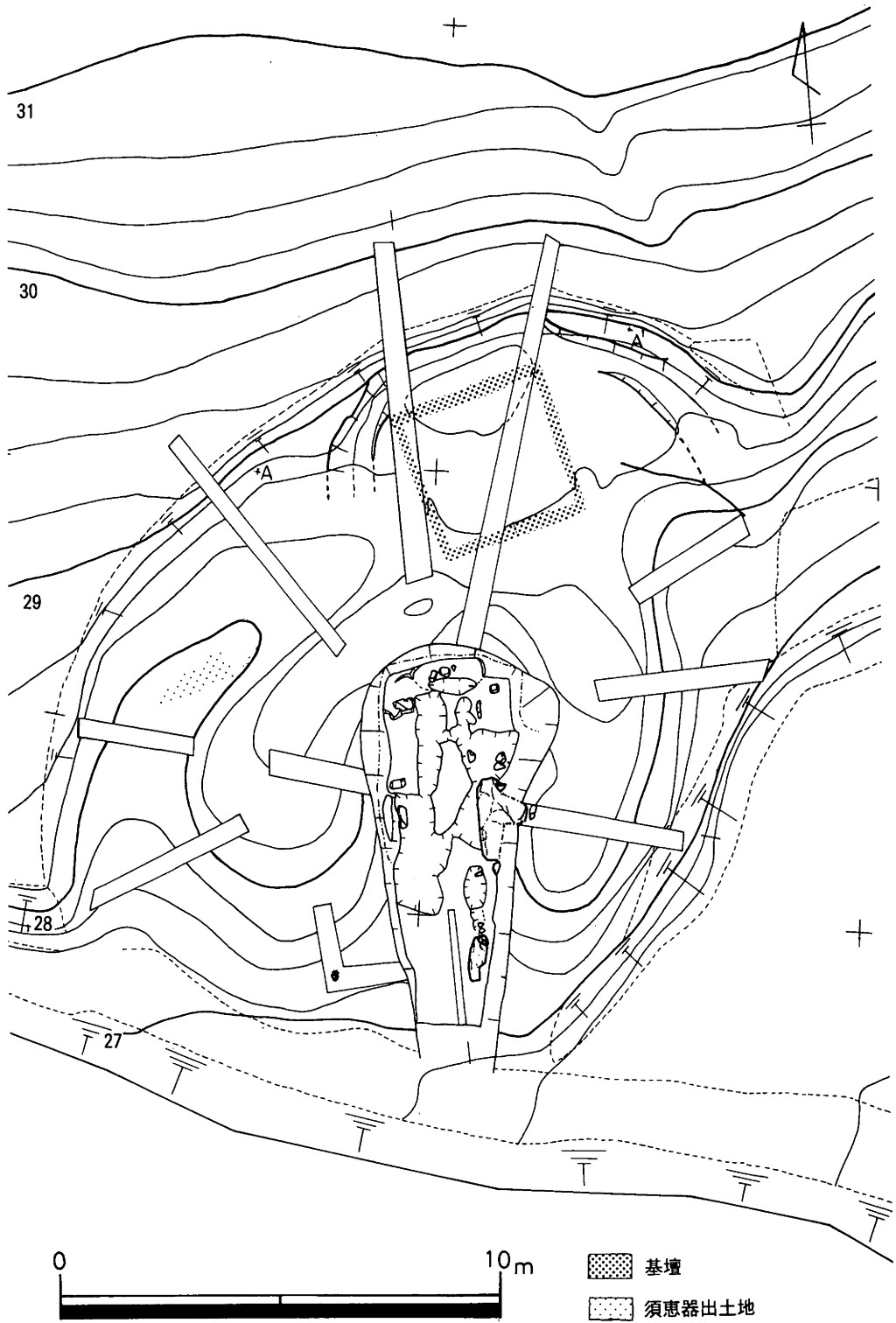
## 2. 横穴式石室

本墳は、2石を残して石材のほとんどが抜き取られている。しかし、石室を構成していた2石とその残存状況や石材の大きさ、さらに墓壙の形状等から内部主体は横穴式石室であったことは間違いない。石室内に散在する小石材は、壁石を安定させるための裏込め石、詰石、あるいは石材を抜き取る際にできた石屑等が考えられる。

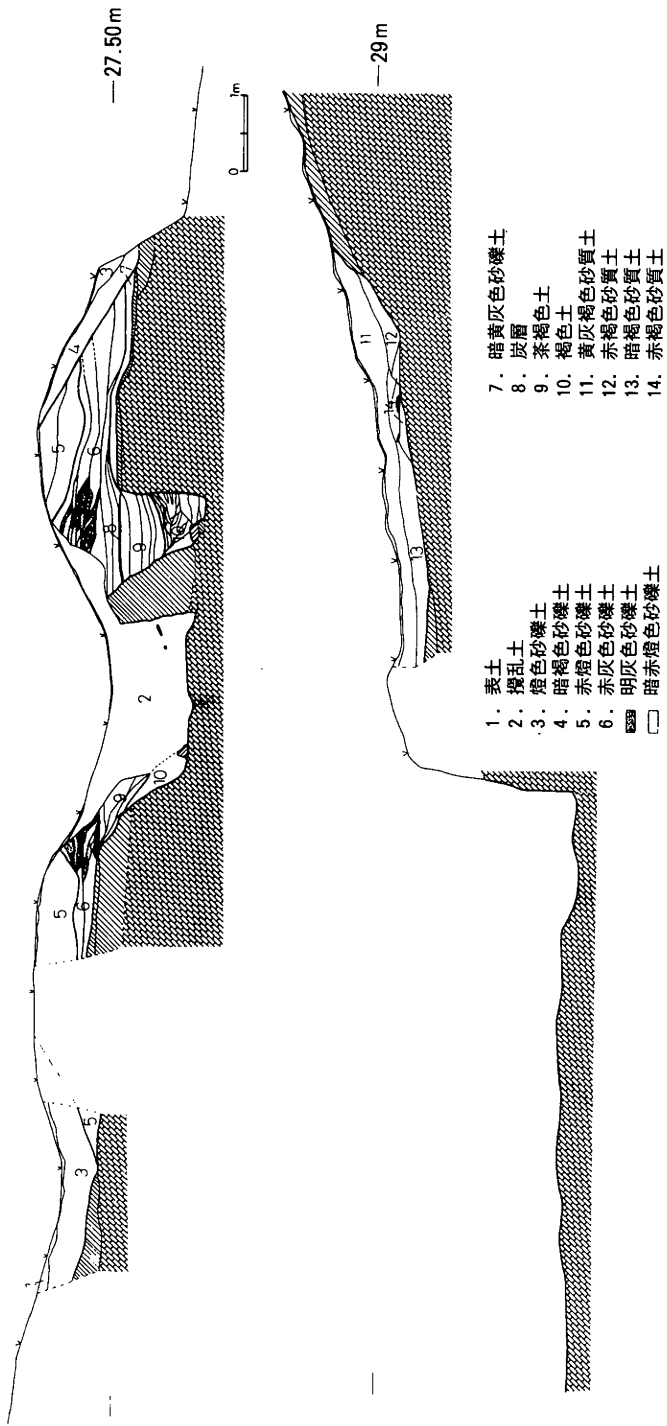
主軸線は、石室が抜き取られているため墓壙幅で決めた。これに従えば奥壁側で2.8m、開口部付近で1.47mを測ることから、その中間でセンターを割り出し、さらに奥壁からみて左側壁の方向性を考慮し、主軸を導いた。すなわち、主軸はN3°Eで南に開口する。

石室長は、石が抜けているため確定できない。しかし、床面に残っている石材抜き取り痕や入口付近の土層から考えて、石室長を推定すると奥壁前面に認められる穴の後端から左側壁の開口部端までは6.8mを測り、おおよその石室長が7m前後であったことが導きだせる。

石室幅は、左側壁に対応する右側壁が不明であることからもとめにくい。しかし、あえて推測すると石室中央から奥壁にかけては、両側壁に添うかのように2条の抜き取り痕が見られる。これを先述の奥壁の例と同じく、前方から掘りおこしたと仮定すると抜き取り穴の両幅は、



第36図 調査後墳丘図 (S = 1/ 150)



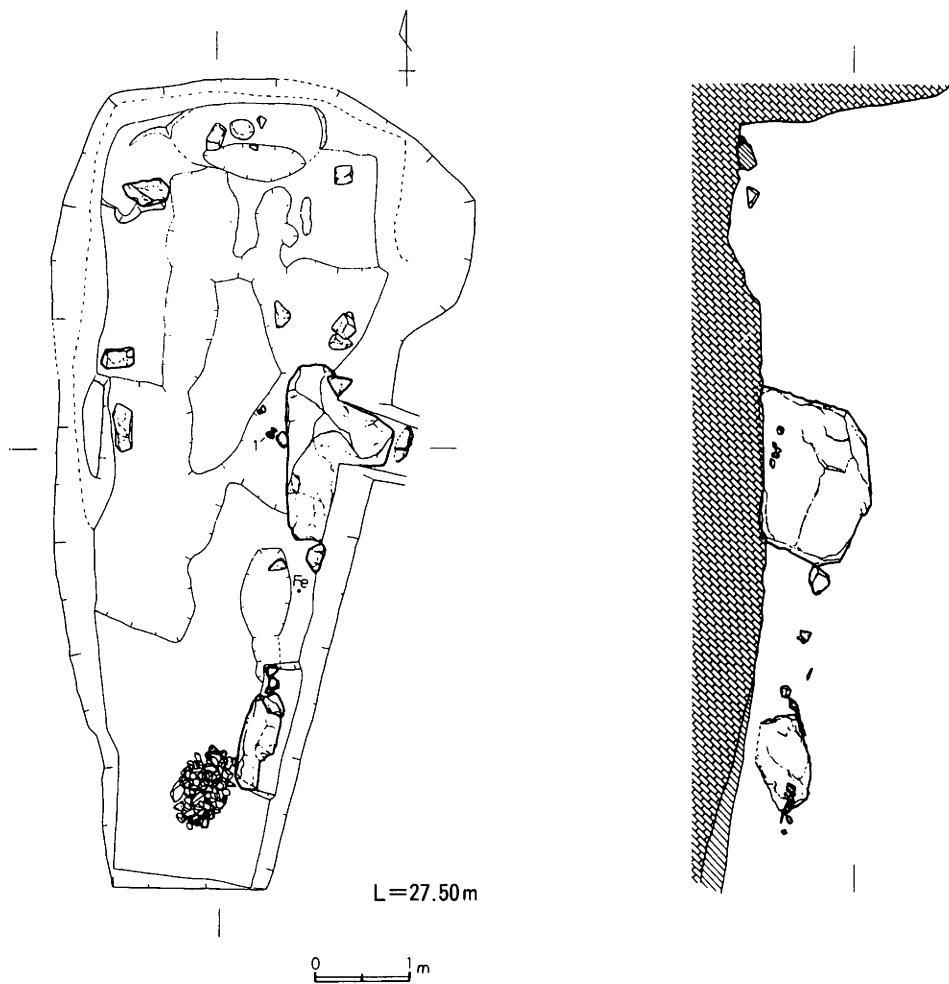
第37図 墳丘断面図 (S=1/100)

1.12~1.28mとなり石室幅を予想させる。また、石室の高さは奥壁側の墓壇掘り方と、残存する墳丘の高さ等から考えて約2m前後であろうか。

残存する左側壁の間には、抜き取り穴があり、穴の形状だけからすれば、袖石の存在を窺わせる。しかし、石を抜き取る際に前面から掘り起こしたものと考えると、無袖形式のものとなり、この抜き取り穴の状況からは、袖の有無はいずれとも決めがたい。床面は激しい攪乱をうけて不明な点が多いが、礫などは認められず土床の可能性も考えられる。

開口部に集石している礫群は、一見閉塞石のように見える。しかし、瓦、須恵器、土師器をふくんでおり、床面からはおよそ30cm浮いた状態で検出されたので閉塞石ではない。墓道は、開口部前面に小道が通っているため明瞭に検出することはできなかったが、土層観察から開口部側の左側壁の前面には石材のあった痕跡は考えられず、素掘りの墓道がとりついていたと思われる。





第38図 石室実測図 (S=1/80)

以上のことから、本墳の内部主体は全長約7m、巾1.3m前後、高さ約2mの横穴式石室であったと推定され、ほぼ真南に開口していたと考えられる。(松尾)

### 3. 遺物の出土状況

石室は、先述したように残存状況は良くなく石室を構成していた石室は2石を残し、ほとんど残存していない。また、石材を抜き取る際、攪乱を受けたせいかわ遺物の残存も良好ではなかった。

石室内遺物の分布は、全体的に左側壁中央の側壁周辺から奥壁側にかけて分布する一群と、開口部付近に認められる一群に分けられる。また、遺物は、石材抜き取り穴からの出土がめだつ傾向があった。出土した遺物は、須恵器、土師器、土師質陶棺、鉄釘、鉄滓、青銅製仏像、

耳環、碧玉製管玉等がある。

奥壁から石室中央付近にかけて、左側壁に添うように須恵器高坏、土師器高坏が出土し、青銅製仏像もこのあたりから出土している。また、土師質陶棺は多数の破片が左側壁中央の石材を中心に分布していた。鉄釘も石室中央の床面に近い所から数点出土しており、木棺の可能性を示唆している。

開口部の遺物は、須恵器甕、内面黒色土器、瓦、埴が礫と共に検出された。平面的には、90×50cm程度の広がりを見せ、層位的には床面から30～43cmの間で集積しており、これらを取り除いたのちに、鉄滓が5点見られた。鉄滓は、石室内より合計35点出土している。開口部付近からの出土が多く計23点出土しており、残りの12点は埋土中からの出土である。

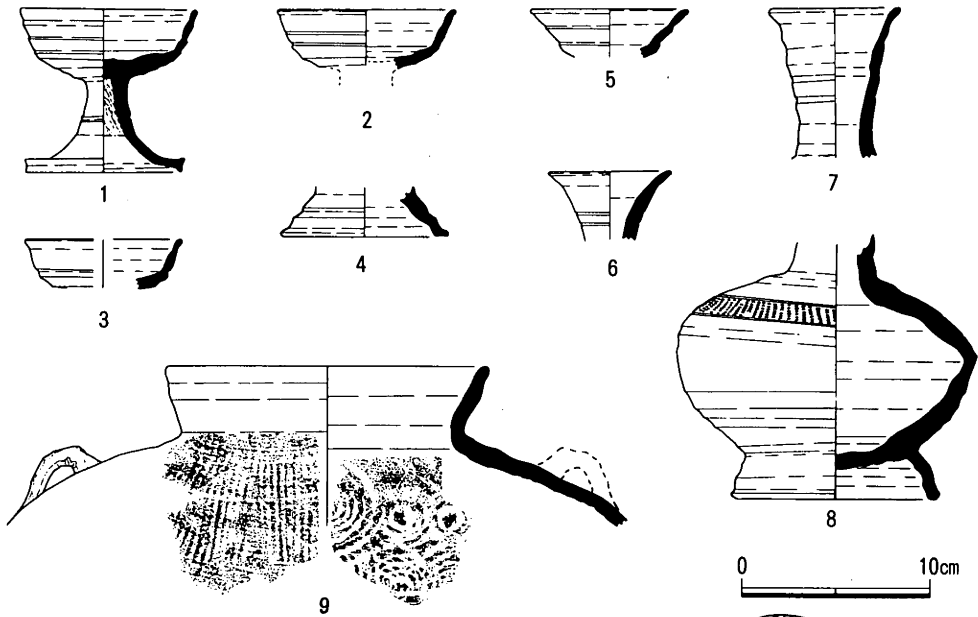


第39図 遺物出土状況図 (S=1/ 80)

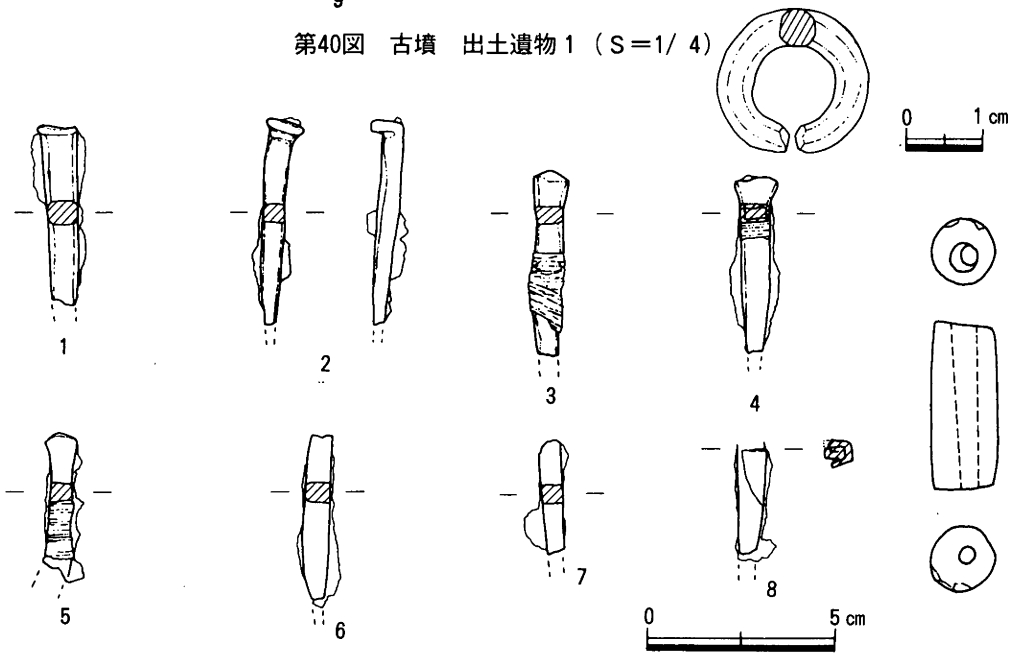
鉄滓は、大きいもので12.7×8.3cm、小さいもので1.5cmと形、大きさ共に様々である。床面付近では開口部で5点出土し、大きさは2～3cmと少ぶりである。奥壁付近にも1点出土しているが、他の遺物と同じく攪乱土中からの出土なので、現位置を保っているとは言いがたい。

#### 4. 出土遺物

攪乱のため残りの良好な遺物は少ない。石室内出土の遺物は、本来古墳に伴うと考えられる



第40図 古墳 出土遺物 1 (S=1/4)



第41図 古墳 出土遺物 2 (S=1/1, 1/2)

須恵器 1～8, 土師質陶棺, 耳環, 鉄釘, 鉄滓などで, 須恵器 9 のみは墳丘西側の周溝内より出土したものである。

石室内を再利用した土器群には, 1～3, 5, 8, 10, 11がある。他には, 埴, 瓦, 青銅製仏像が出土している。開口部には礫と共に集積された遺物に 1, 2 の土師質土器がある。また, 墳丘北西側の周溝からは, 4, 7 の土器群と鉄釘 2 本, 不明鉄器 1 本が出土した。

須恵器高坏 (1～3) 1 は, ほぼ完形品の高坏で口径 9.3cm, 器高 8.6cm, 底径 8.3cm を測る。口縁部は回転ナデを施し二条の沈線が入る。脚部は内外面を回転ナデし, 脚端部を上下につまみ上げる。脚柱部外面には一条の沈線が入り, 内面にはしほり痕を顕著に残している。

2, 3 は坏部で 2 は口径 9.2cm, 4 は復元径 8.4cm を測る。調整は内外面共に回転ナデで, 底部にヘラ削りが認められる。また 2 には二条の沈線と, 3 には, 彫りの深い沈線が認められる。

台付鉢 (4) 4 は, 台付鉢の脚部と考えられ, 底径 9 cm, 脚は強くふんばる。端部は外側に拡張され内外面とも回転ナデである。

罎 (5) 罎の口縁径は 8.2cm を測り, 精良な胎土をもつ。内外面に回転ナデを施した後, ヘラによって二条の稜線をつくり出している。

壺 (6) 壺と考えられるが口径約 6.4cm を測り, 口縁部はラッパ状に外反する。二条の沈線が入り, 断面はやや内厚となる。

台付長頸壺 (7・8) 7 は, 壺の頸部で口径 6.8cm を測る。内外面ともに回転ナデで口縁端部を外反させる。頸部中央には二条の沈線が入る。8 は, 頸部を除き残りは良好である。肩部には, 上下の沈線によって区画され中央に刺突文がめぐる。調整は, 内面に回転ナデを施し, 低部にはヘラ削りが認められる。外面は体部下半までが, 回転ナデで, 以下は回転ヘラ削り。また高台をはりつける際に, 低部に刻みを入れている。

把手付甕 (9) 大型の甕で, 口径約 17cm, を測る。残存からすれば 1 箇所にも耳がつくが, 他の箇所にも取りつく可能性がある。体部外面はタタキを施した後, カキ目調整を行い, 口縁部は内外面とも回転ナデを行う。体部内面は円弧状の当て具痕が顕著で, 耳のとりつくあたりから円弧をすり消す。

耳環 耳環は, 外径 2 × 1.9cm, 内径 1.1cm, 重量 5.2 g を測る。金の遺存状況は良好である。

鉄釘 (1～9) 釘の頭部を L 字状に折り曲げるものは, 1, 2 があり, 厚さ 5～6 mm を測る。頭部がふくらむものは 3～5 で, 厚さ 5～6 mm を測り, 4 の断面には板状の鉄板が巻かれている。6～8 も厚さ 5～6 mm を測り, 残存はよくない。ただし, 8 は断面観察より, 鉄板を釘の中心から折りまげており, 最終的に巻きつけた鉄板の一部が釘の表面に認められる。

土師質陶棺 (1) 土師質陶棺の大きさは, 残存長 56.6cm, 最大幅 57cm, 最大全高約 46.4cm 身の高さ 70cm を測る。胎土は, ややあらく, 砂粒は 2 mm 程度の長石が多い。

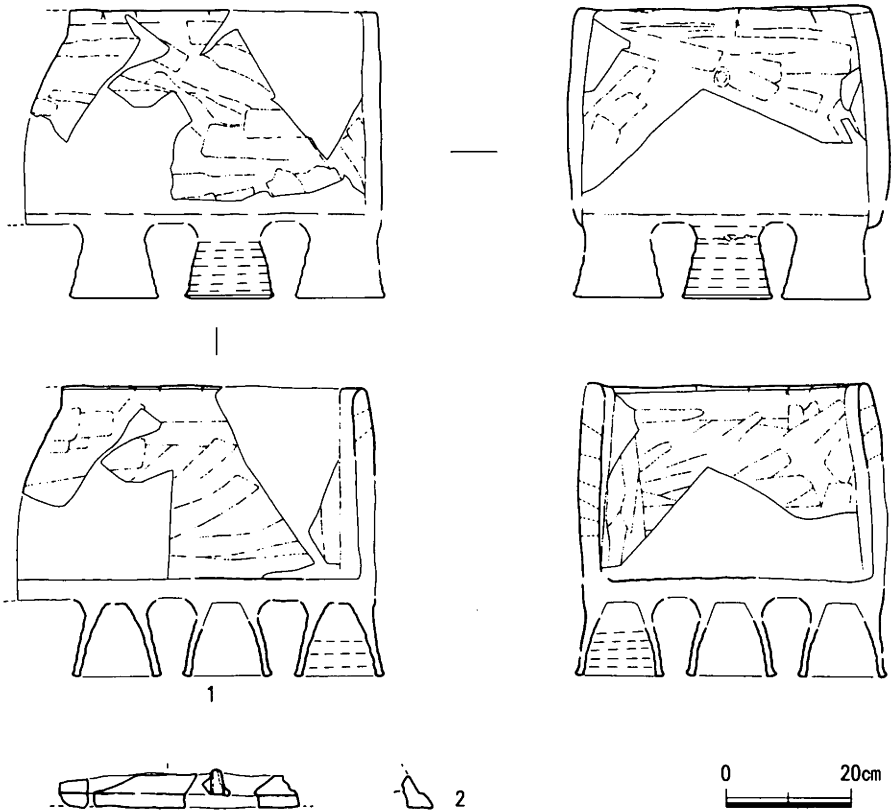
1は身で、断面をみれば身の両側面は緩やかに内傾し、上部が狭まる格好をしている。下縁部幅は46.6cm、上縁部幅は46.2cm、上縁部幅で41.4cmを測る。

身の側面には、外面に横方向のナデ、あるいは、斜め方向のナデが認められる。底部近くには、底部からナデ上げてきたのか、上方向へのナデがみられる。また、表面には、一部布目圧痕がみられた。端部には、丸みをおびるようにナデられており、葉派痕が所々にみられる。また、端部から1.8から2.3cm下にヘラ状工具による切り込みの痕跡と、端部から約1.5cm下には、焼成不良のためにできたと考えられる黒班がみられた。側面には、横方向のナデ、斜め方向のナデが施され、端部から約6mm下には、細い線刻が、棺内を巡るようである。小口外面も基本的に横ナデであり、側面とのコーナーとは、縦状とナデられている痕跡があった。

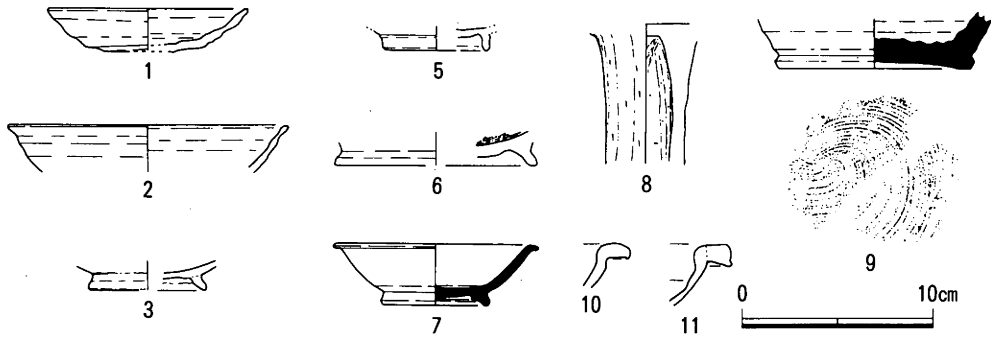
また、側面の外側と同じく端部から約2.5cm下にヘラ状工具による圧痕がみられる。尚、側面でみられた黒班は、小口側では見られなかった。

小口内面も、横方向のナデ、斜め方向のナデを施しているが、側面とのコーナーには、横方向のナデのあとに、縦方向にナデを施している。

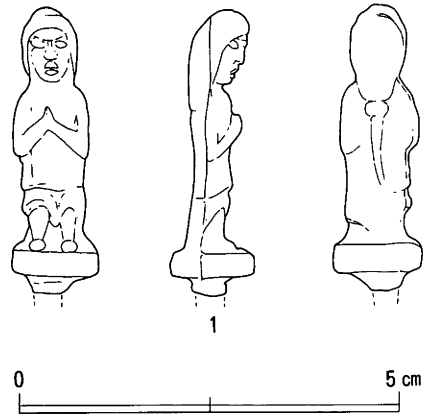
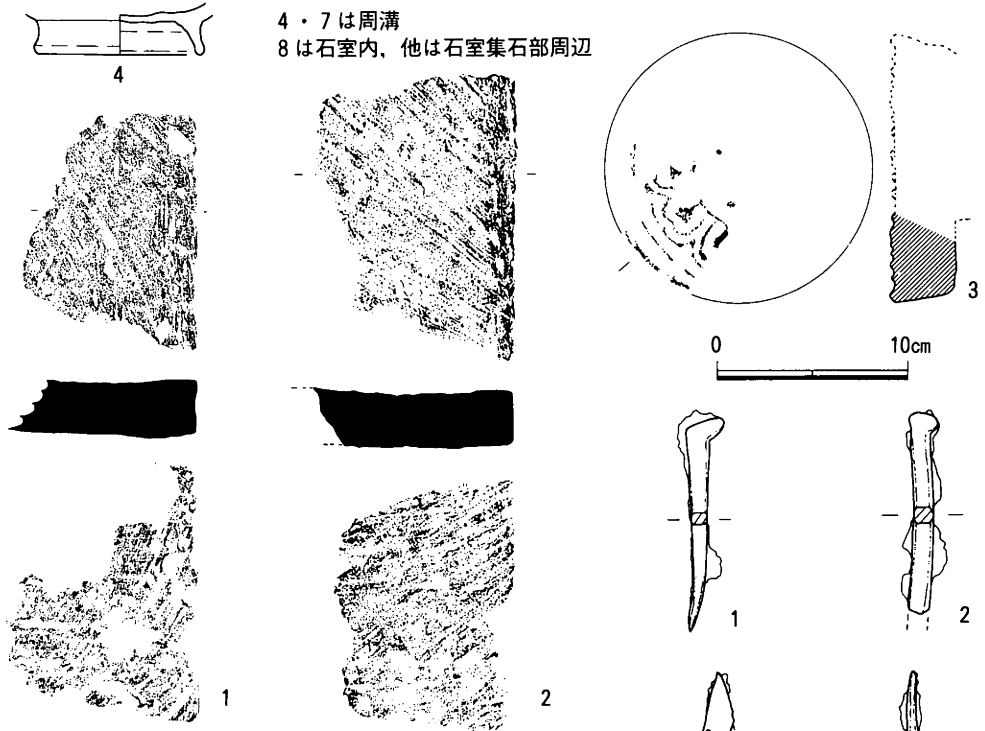
陶棺の断面については、粘土紐痕が内傾している様子が窺えた。



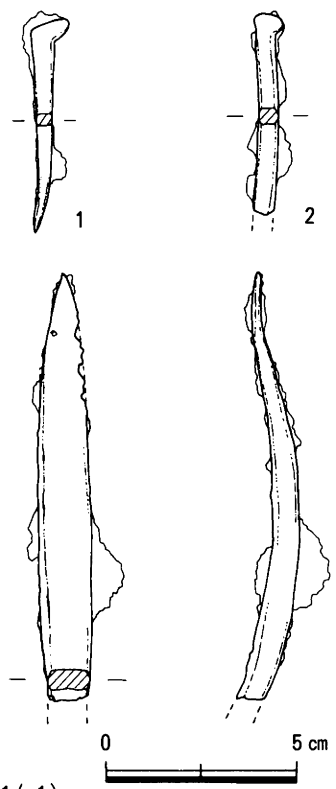
第42図 古墳 出土遺物3 (S=1/12)



4・7は周溝  
8は石室内、他は石室集石部周辺



1・2・3は集石部  
及び周辺



第43図 出土遺物 (S=1/ 4, 1/ 2, 1/ 1)

脚部は、底部約14cm、外面脚高12.4cm、内面脚高11.6cmを測る。脚は裾ひろがり、端部は内外に拡張する。調整は内外面とも、回転ナデを施しており、脚の上部には、底部との接合痕がみとめられる。

2は、蓋の一部で、身との接合部になる。

外面端部には、下面幅4.2cmを測る突帯状の帯が外方向へ突出し、蓋は、約60°の傾斜をもって上方へ延びる。蓋と身との接地部には、葉脈痕が所々にみられる。また、残存はわるいものの、接地部は、高さ約2.5cmを最高に、ドーム状に内湾していた事が観察される。

また、蓋には、幅1.8cm高約7mmの突帯がついていたようだが、どの部位についていたかは残存がわるく明らかにできなかった。蓋の調整は横方向にナデられている。

以上の観察から松井古墳出土の陶棺は、亀甲型陶棺のように多数の突帯をもたない事、身の小口面と側面には、明瞭にコーナーをもつ事、脚は裾広がり、回転ナデを施す事、等の諸特徴から、形式は家形陶棺である事がわかる。ただし、蓋の残存が非常に悪い事から、切妻式になるか、四注式になるかは判断できなかった。

土師質土器杯（1） 口径10.4cm、器高2.2cmである。底部外面にヘラ切りを施す。

土師質土器椀（2～4） 2は、椀の口縁で、口径約14.4cm、内外面に横ナデを施す。3は、椀の底部で底径約6cmを測り、高台は、中途から屈折し外反する。4は、底部で、底径約8.4cmを測る。胎土はこまかく、にぶい黄橙色を呈する。

内面黒色土器椀（5，6） 5の底径は5.3cm、6は約10.6cmを測る。5，6共に内面は黒色で、6には幅2.5mmのミガキが見られる。

緑釉陶器椀（7） 椀の口径は約10cm、器高3.2cm、底径5.4cmを測る。素地は細かく、白色を呈する。また、器表面には、オリーブ黄色の釉が所々に残存している。体部は、やや内湾しながら立ち上がり、端部は外側に折り返す。高台は、いわゆる蛇の目高台である。

土師器高杯（8） 高杯は、脚柱部のみで明橙色を呈す。外面は、下から上にかけてヘラ削りし、面取りを行う。内面上部には、しぼり痕が認められ、脚柱部は左回りにヘラ削りを行う。尚、外面は15面、内面は7面の面取りが行われている。

須恵器壺（9） 9は壺の底部で底径10cmを測る。底部内面には、強い回転ナデが施され、外面は回転糸切りである。上げ底の底部は、先端が外側へ突出しヘラによる面取りが行われている。

土師質鍋（10，11） 口径は10で約42.8cm、11で約41.8cmを測る。両者とも細かい胎土をもち堅緻である。10の口縁部は厚く肥厚し、下端を外側につまみ出すのに対し、11は下方へつまみ出している。

埴（1，2） 1の厚さは2.8cm、2は3cmである。両者共に上面と、側面にケズリを施し

ている。上面の縁には、ケズリの後、側縁に添ってナデ仕上げを行う。色調は、淡黄色を呈す須恵質で、断面形状がブロック状を呈する。

軒丸瓦（3） 3は、破損のため残存はよくないが、直径約14cmの単複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦質ではなく浅黄色を呈する土師質で、胎土は粗い。珠文は1+8になる所2点しか残存していない。周縁は平縁ではなく丸みを帯びる。間弁は中房にまで達せずに弧状にのび、蓮弁の周囲を圏線状につつみこむ。全体的に范の彫りが浅く瓦当厚は3.5cmである。よってこの軒丸瓦は、若干の相違が認められるが備中国分僧寺式軒丸瓦の第3類と考えられる。

鉄釘（1～2） 1は、全長5.6cm、厚さ約4.5mmを測る。細身の釘で頭部はL字状に曲げている。尾部は、やや反るものの先端は鋭角にとがっている。2は、厚さ5mmを測り頭部を折り曲げている。

不明鉄器 残存長11.1cm、厚さ1.1cmを測る。先端はとがり、刀子のように見えるが、両側面には刃はついていない。鉄器の側面は、湾曲し、先端が折れまがっている。（松尾）

青銅製仏像（1） この仏像は、石室の埋土をふるいにかけて発見した。このため、確かな出土地点は不明である。しかし、ふるいにかけて土が古墳内奥の下層の土であることから、この仏像は石室内部に存在していたことは間違いのないと思われる。仏像は青銅製で、合わせ型による鑄造である。総高3.85cm、幅1.15cm、厚さ0.75～0.55cmである。この大きさは、青銅製仏像では小型に属する。像の足下の台は円形でその下に棒状の突起を持つ。この突起は本来もう少し長く、別の台に突き刺すためのものと考えられる。全体の風貌から、天部像と考えられる。

（谷山）

### 第3節 基壇遺構

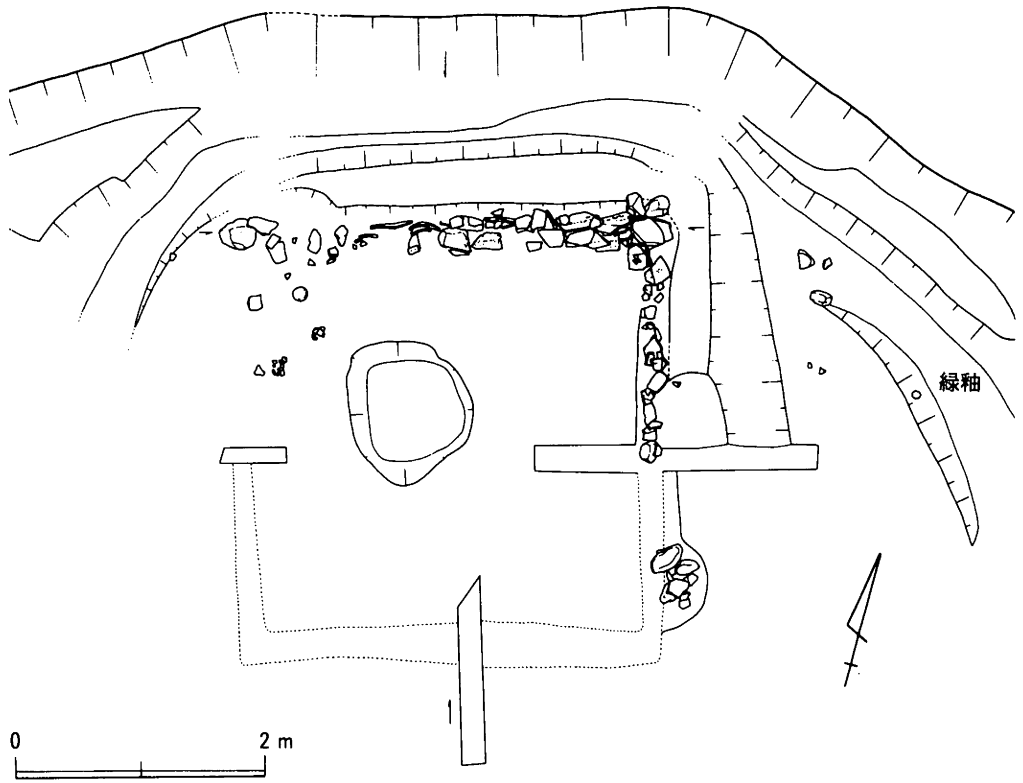
#### 1. 基壇

基壇は、当初その存在すら確認できなかった。調査前の地形観察では、山側の掘り込みは古墳の周溝と考えられた。古墳自体も前節で述べたように、大きく破壊されており墳端も明確ではなかった。

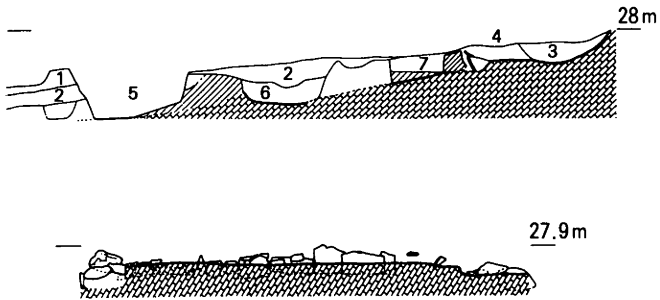
最初に基壇の一端が確認できたのは、古墳の周溝を確認するために入れたトレンチの端に石と瓦が検出されたためである。瓦の出土から、瓦窯の可能性も考えられたが、出土した量や炭・焼土等が認められないことから窯本体ではないと判断された。古墳内部の調査においても瓦片が出土し、瓦を伴う遺構の存在が想定された。古墳内部の調査が進展するに伴い、当初設定した南北トレンチが東にやや寄っていたため、石室の主軸でトレンチを再度設定した。このトレンチにも山際で瓦が出土し、北周溝内に瓦を用いた遺構の存在が明らかになった。

これらの瓦は、周溝内北で直線状に認められ、南部分に瓦が少量しか出土しないため、山





第44図 基壇平面図 (S=1/60)



1. 表土
2. 灰白色砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 淡茶灰色砂質土
5. 茶灰色砂質土
6. 暗灰白色砂質土
7. 淡赤褐色砂質土

第45図 基壇断面及び瓦立面図 (S=1/60)

際に長方形の基壇がありこれに使用していると考えられた。しかし、瓦の用い方が山側に瓦を立てており、さらにその外側に排水溝が存在することから、当初発見した瓦列が北の端であり、基壇本体は南に広がることが想定された。このため、再度トレンチの壁を検討し直した。この結果、古墳の周溝を北側と東側では一部拡張し、南側では周溝を埋めて基壇の面を造り出していることが判明した。

基壇は、比較的良好に残存している北側から推測すると、一辺3.3mを測る2間四方の堂宇と考えられる。出土した両端とその中間に位置する石は柱を支えるために据えたものと考えられる。石はいずれも一辺約30cmの大きさで東端では2石重ねていた。石と石の間は平瓦を半切したものや丸瓦を並べ、さらに外側に瓦を立てていた。この並べられた瓦の高さは、残存状態が悪く明確にできないが、おそらく石の高さと同じと考えられる。この瓦積みの上に壁が想定される。基壇内の北西部分で土師質土器が出土した。基壇造成時の地鎮に関わる遺物の可能性も考えられる。

基壇外部には、基壇北辺沿いから八の字に開く排水溝が設けられている。また、東辺沿いにも溝が認められ、これは雨落ち溝と考えられる。(谷山)

## 2. 出土遺物

基壇建物に伴う遺物は、まず基壇上より出土した1, 2があり、基壇の中央穴からは3～5が出土した。また、6は基壇より東側の排水溝から出土している。また、図示した瓦、塼は瓦積基壇を構成していたものの一部である。

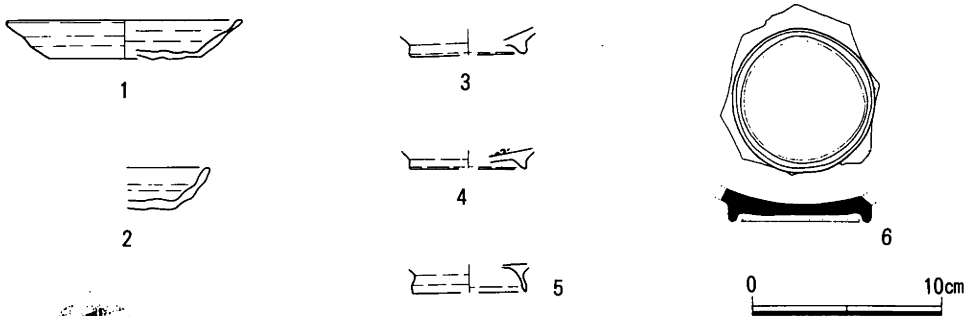
土師質土器杯(1, 2) 1は、口径12.2cm, 器高2cm, 底径8cmを測る。体部内外面は、横ナデを施し底部にはヘラ削りが見られる。色調は明橙色を呈している。2も同じ調整で、黄白色を呈している。

内面黒色土器椀(3～5) 3, 4は底径約6cm, 内面にはミガキが認められる。5は、底径約6cmで高台は細長く立ち上がり、ヨコナデが施される。(松尾)

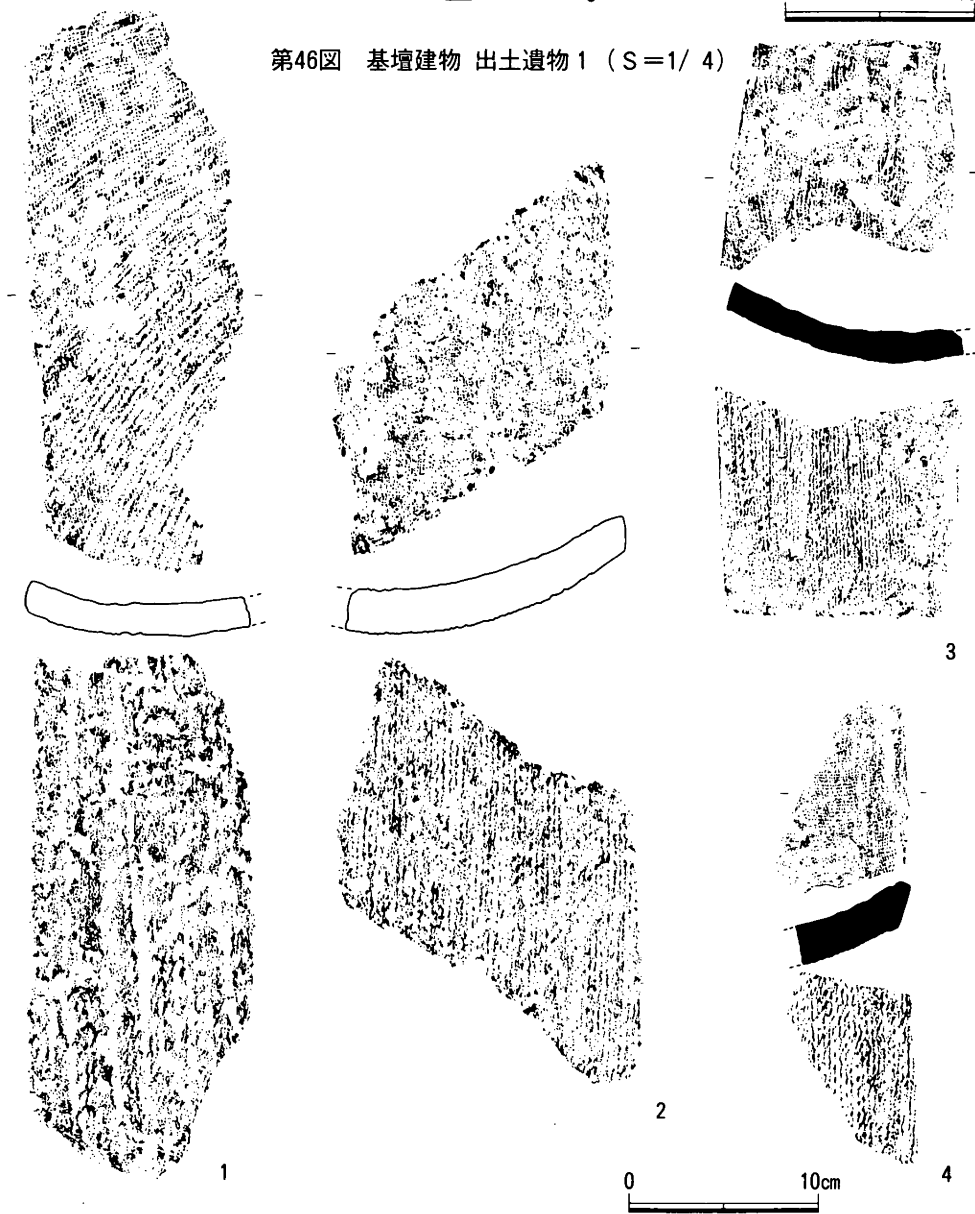
緑釉陶器椀(6) 高台部分のみ残存している。焼成は、須恵質で釉は濃緑色を呈する。意図して周辺を打ち欠いている。(谷山)

平瓦(1～10) 平瓦は、土師質のものが多く、須恵質のものは少ない。また基本的に調整は凸面に縄目タタキ、凹面に布目圧痕が見られる。以下詳述するにあたり、便宜的に側面の形状に分けて述べる。

側面を直線的に面取りするものは、1～3がある。1は厚さ1.6cm, 凹面に糸切り痕が顕著である。側面に添って瓦を割っており端面を欠く。2は厚さ2～2.3cmで、縄目の密度は4本/cmである。3は、須恵質で胎土は細かく厚さ1.3～1.5cmを測る。凹面には板ナデを施した痕跡があり、その原体の幅は0.9～1.4cmである。縄目タタキの密度は5本/cmで、原体の幅



第46図 基壇建物 出土遺物 1 (S=1/4)



第47図 基壇建物 出土遺物 2 (S=1/4)



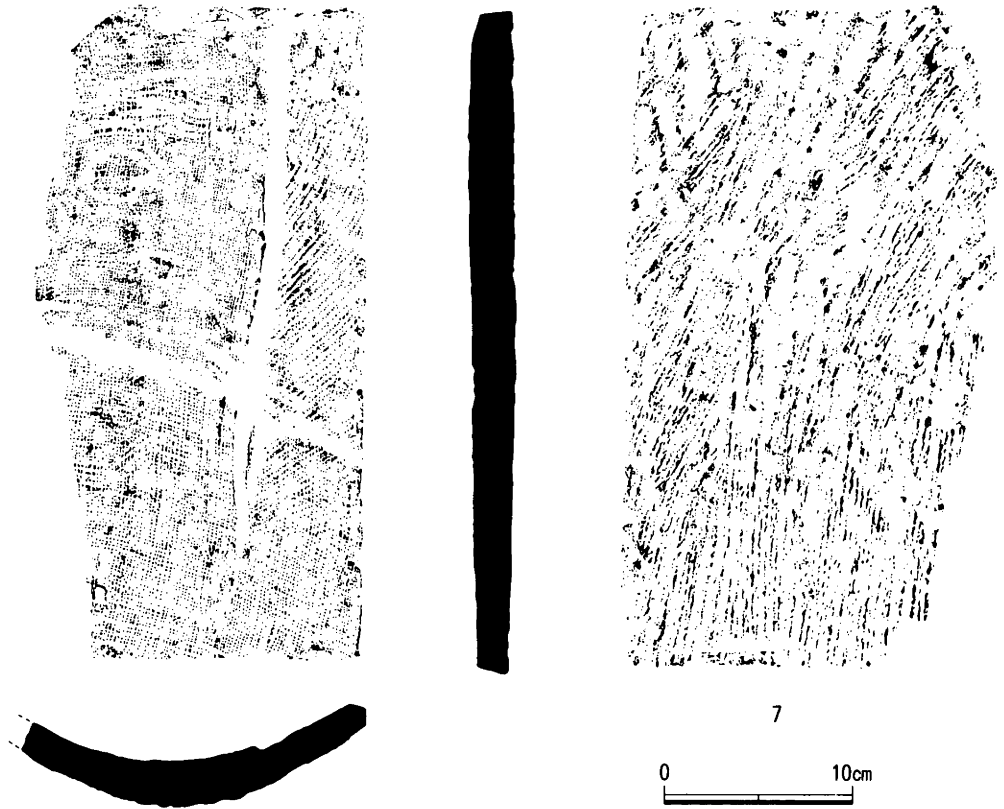
5



6



第48図 基壇建物 出土遺物 3 (S=1/4)



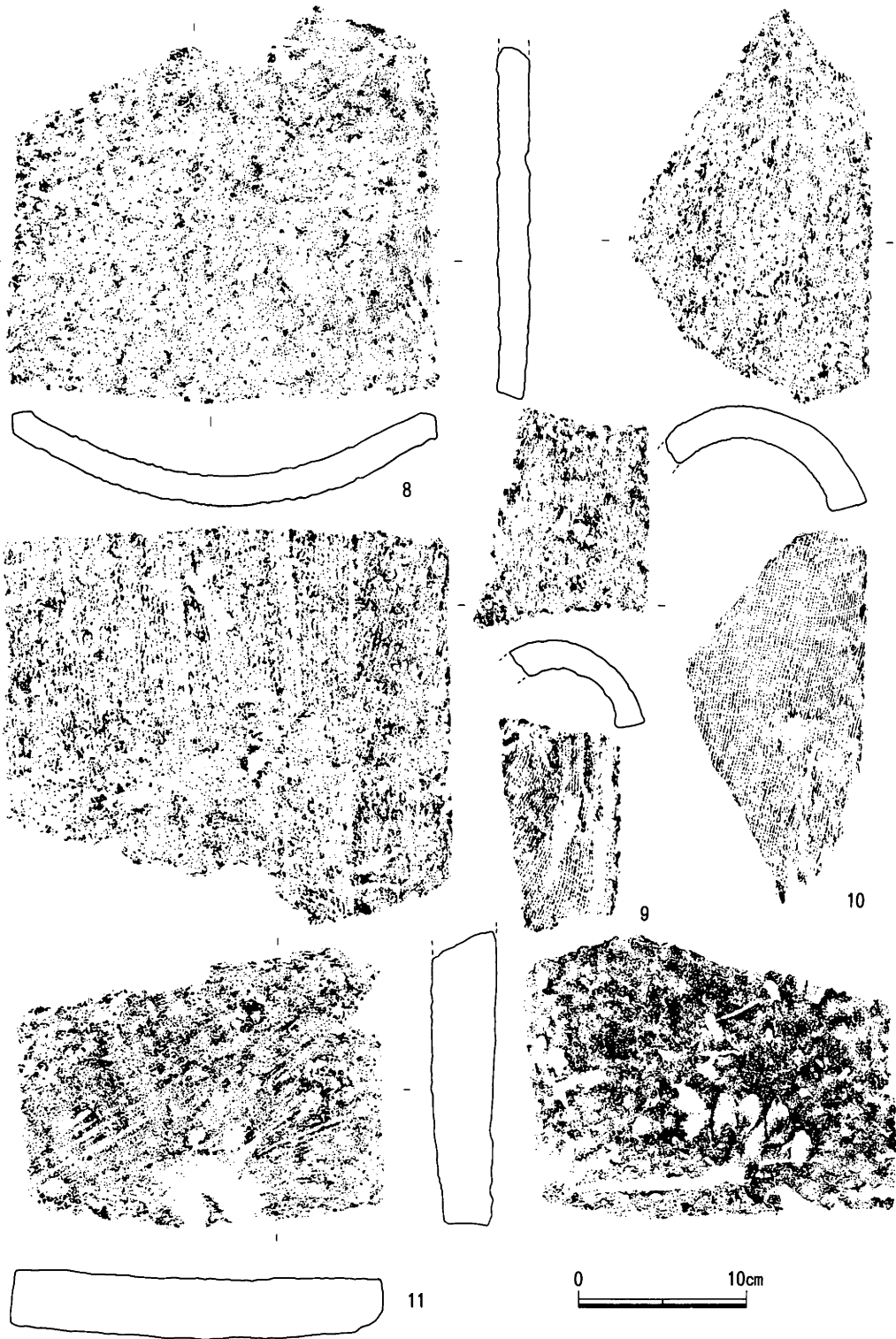
第49図 基壇建物 出土遺物 4 (S=1/4)

は3cmである。凸面側を長く面取りし、凹面側を短くし面取りするものに4がある。4は須恵質で、凹面は布目圧痕を部分的にすり消している。また、側縁にそって紐痕跡が認められる。

側面を直線的に切り、凹面側を浅く面取りするものに、5、6がある。5は、厚さ2.1~2.2cmで凹面には糸切り痕が認められる。凸面に施された縄目の密度は4本/cmで、原体の幅は3.5cmである。側面を意識して割っている。6は、厚さ2.3~3.5cmで、中央が肉厚である。凸面は縄目タタキの後、ナデを行い。凹面は、側縁に3cm、端縁に3.7cmの面取りが施される。

凸面、凹面の両側から面取りを行い、中央に稜線をもつものに、7、8がある。7は須恵質で、厚さ1.3~2.3cmを測る。凹面には糸切り痕が見え、紐痕跡が斜行している。凸面は斜め方向にタタキが入り、密度は4本/cmで、原体の幅は3.5cmを測る。また、端面、側面共に残存しているが、広端、狭面の区別はない。側面を意識して割っている。8は、厚さ1.7cmを測る。凸面は縄目タタキで、密度は4本/cm、原体の幅は約4cmである。端面に添って割っている。

以上の平瓦は、模骨痕と粘土板の合わせ目が見られない。また、残存のよい瓦には、広端・狭端の区別がないこと。そして、糸切り痕の残存からもほとんどの瓦は一枚作りであったと考



第50図 基壇建物 出土遺物 5 (S=1/4)

えられる。

丸瓦（9、10） 9は厚さ1.5～1.9cm、10は1.9～2.1cmを測る。両者共に凸面に縄目タタキのナデを施す。なお、10の側面には凸面側に一部破面が認められる。

埴（11） 11は厚さ3.4～3.5cmで、一辺22.2cmを測る。上面は、糸切り痕が顕著でフラットな面をもつものに対し、下面はナデで、やや丸みをもつ。断面形状が板状を呈し、上下面には埴を持ち上げる際にできた指頭圧痕が顕著に残存している。色調は黄橙色を呈し、土師質である。

（松尾）

#### 第4節 まとめにかえて

今回調査を行った松井古墳は、7世紀に築造されたと考えられる横穴式石室を持つ径12.5mの円墳である。石室は破壊が著しく石材の積み方などはわからないが、その規模は全長約6.5m、石室幅約1.2mと推定される。備中国分寺周辺地域では意外に横穴式石室墳は少なく、多くは丘陵北西部に集中する。このことから、松井古墳は一見規模は小さいようであるが、こうもり塚古墳、江崎古墳などの首長墓が築造された丘陵南部に位置することは重要と思われる。また、石室内から陶棺が出土したことは、きわめて注目される。岡山県は、陶棺が多いことが知られている。しかしその多くは県北部に集中し、県南部の総社市では数点しか出土していない。このうち1点はこうもり塚古墳から出土した亀甲型陶棺である。松井古墳はこうもり塚古墳から北西約300mと近距離に位置し、この被葬者が窪屋郡域における重要な人物であったことが考えられる。

平安時代に建立されたと考えられる小堂宇も県内では調査例がほとんど無く注目される。堂宇の位置が備中国分寺の北東、鬼門に当たることも堂宇の性格を考える上で重要と思われる。また、出土した青銅製仏像も類例の少ない貴重な遺物で、この地域の信仰形態を知る重要な資料と思われる。

古墳と平安時代の小堂宇との関係については、時期的に大きな隔りがあり、結び付を求めることは困難のように思われる。しかし、堂宇を建立する際に古墳の北側を選地したことは、この古墳を意識してのことであろう。この古墳が、こうもり塚古墳などにつながる首長系列の墓であるならば、現時点ではこの古墳はこれら系列の最後のものとなる。このような位置づけが正しいならば、その後方に堂宇を建立する意識も理解しやすくなるのではないだろうか。

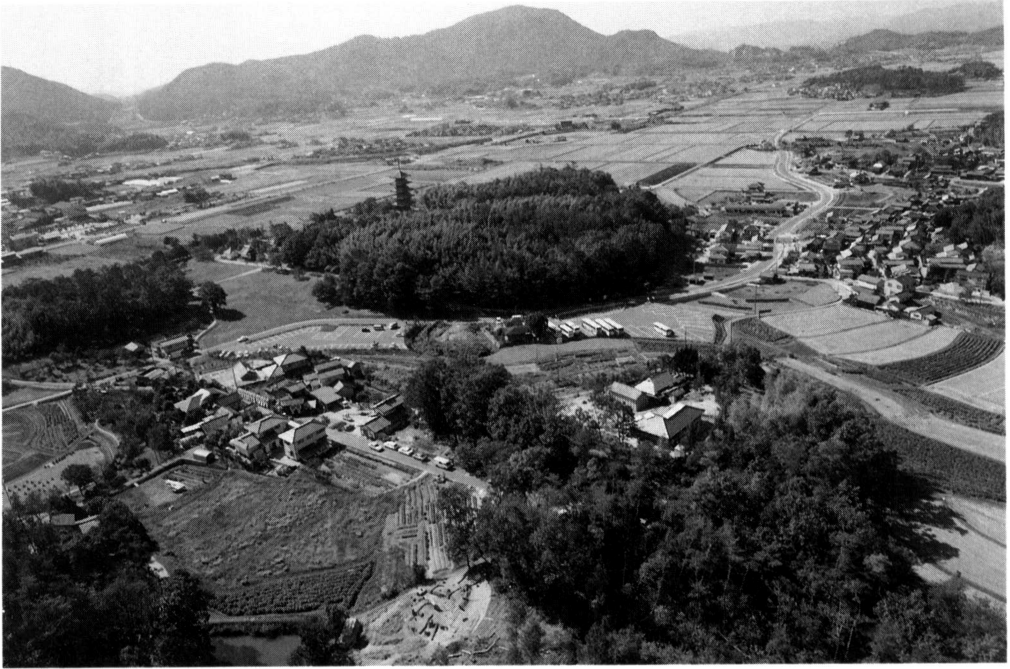
（谷山）

註

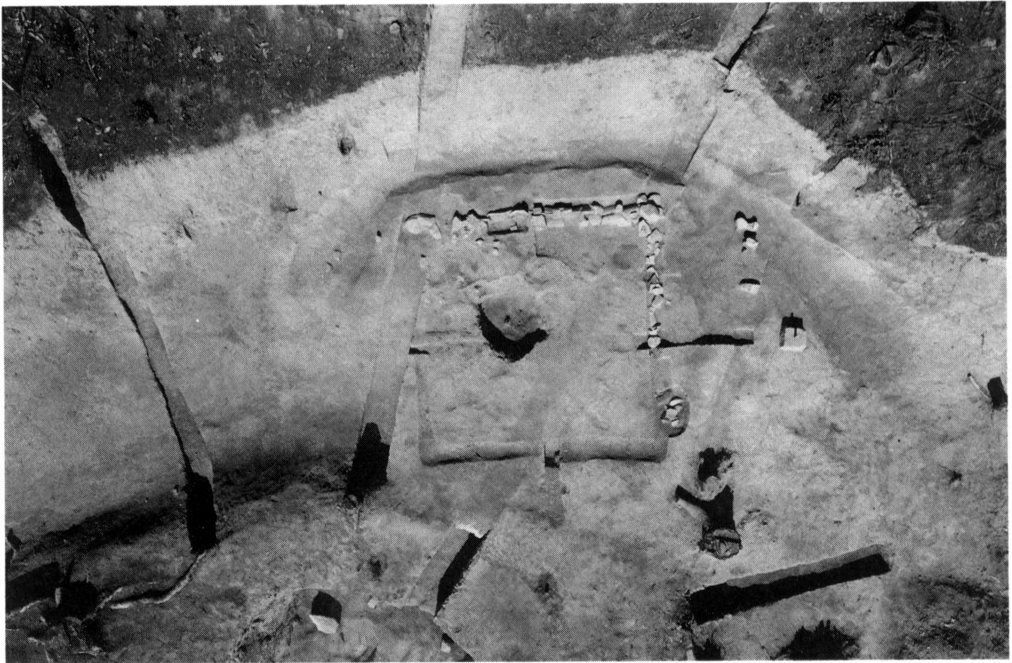
1. 村上幸雄ほか「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会 1987年
2. 村上幸雄ほか「備中国府跡 緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7 総社市教育委員会 1989年

3. 「岡山県遺跡地図」（第三分冊）岡山県教育委員会 1975年  
「三須丘陵遺跡分布調査報告」岡山大学考古学研究部 1976年  
近藤義郎ほか「緑山古墳群」緑山古墳群調査団編 総社市文化振興財団 1987年
4. 近藤義郎・葛原克人・中田啓司「作山古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会 1987年
5. 前角和夫「折敷山遺跡・雲上山11号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10 1993年
6. 中田啓司・近藤義郎「小造山」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会 1987年
7. 谷山雅彦「夫婦山」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会 1987年
8. 高田明人「銭瓶塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会 1987年
9. 近藤義郎ほか「こうもり塚古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会 1987年
10. 近藤義郎ほか「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 総社市史編さん委員会 1987年
11. 島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 岡山県教育委員会 1993年
12. 仏像については、斉藤孝、村田靖子、金子啓明、浅井和春、加島勝先生の御教授をいただいた。時期等は、見解に差があるので現時点では確定しなかった。





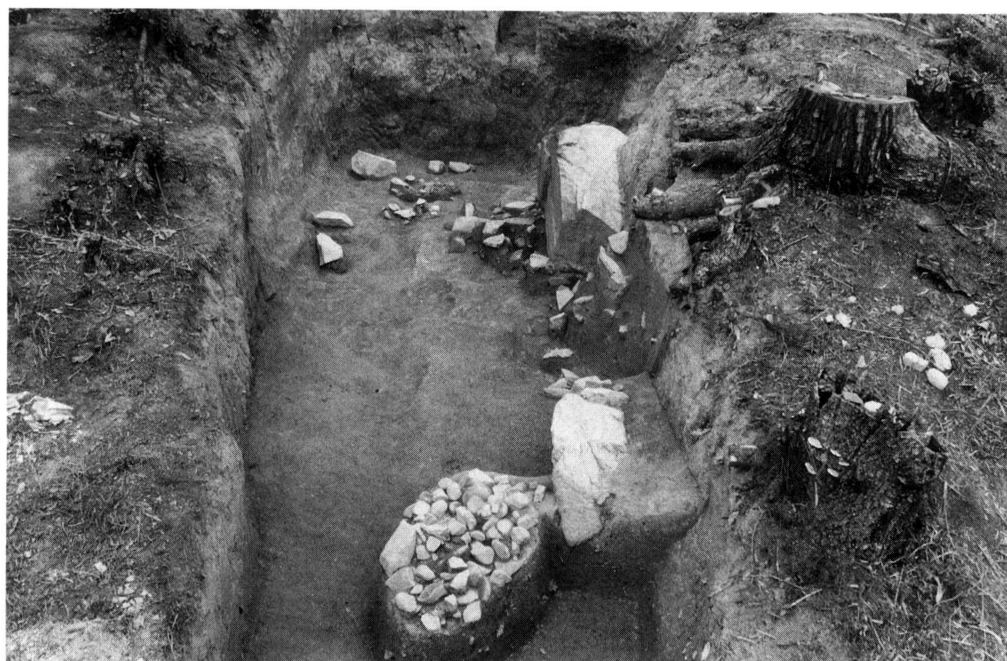
1. 調査地遠景（北から）



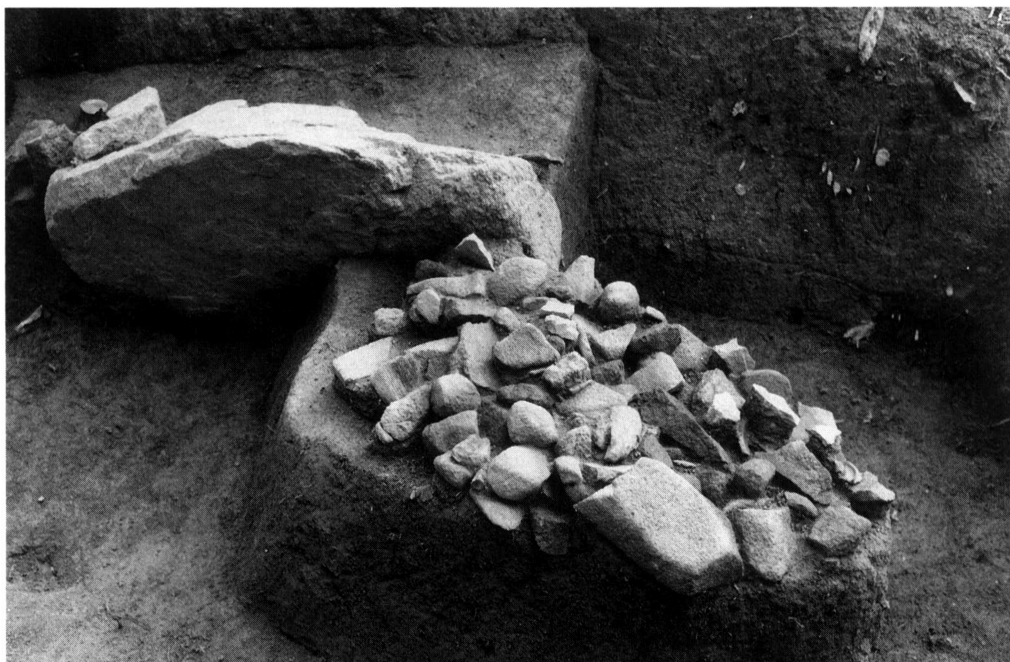
2. 基壇全景（真上から）



1. 調査前の墳丘（北から）



2. 石室掘り上がり状況（南から）



1. 石室入口集石



2. 石室入口遺物出土状況

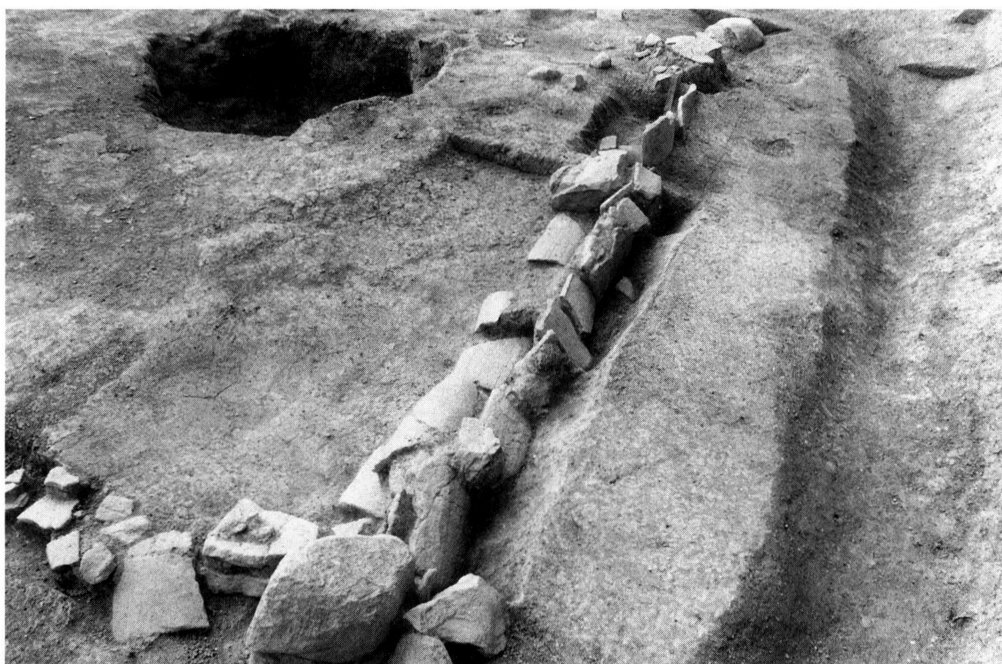


1. 基壇掘り上がり（北東から）



2. 基壇掘り上がり（西から）





1. 基壇瓦列（東から）



2. 基壇瓦列（真上から）



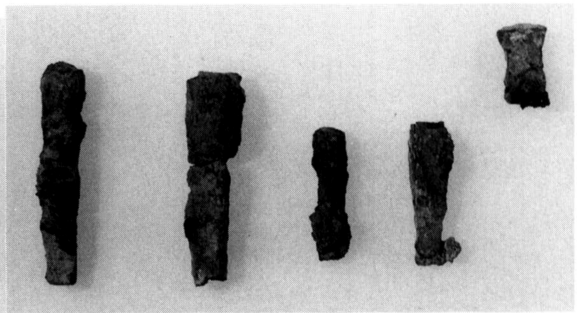
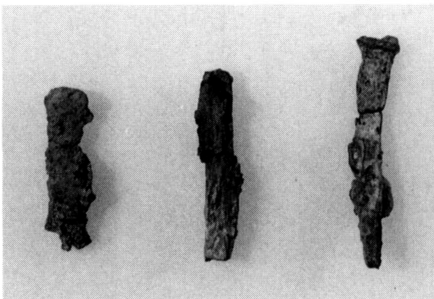
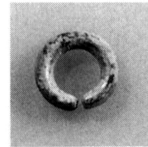
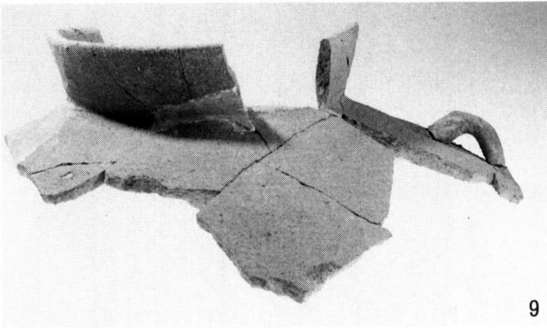
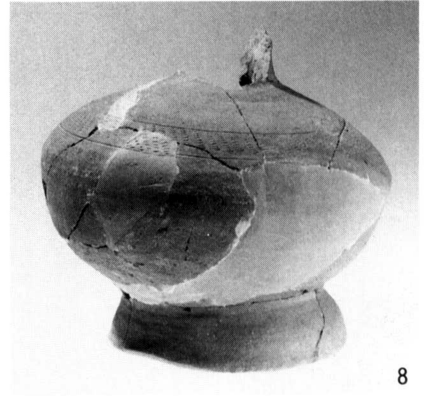
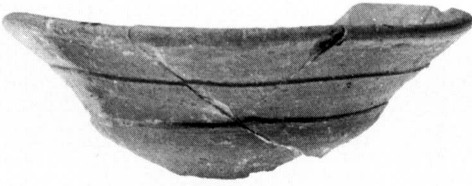
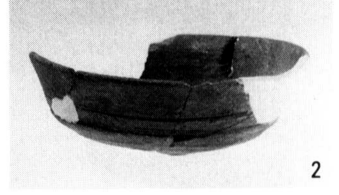
1. 石室内遺物出土状況



2. 周溝内遺物出土状況

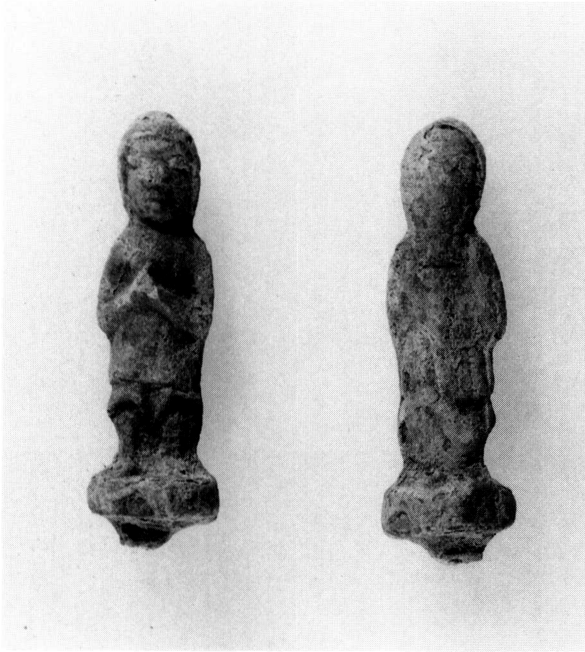


3. 基壇排水溝遺物出土状況

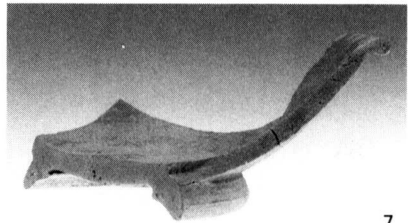


出土遺物 1

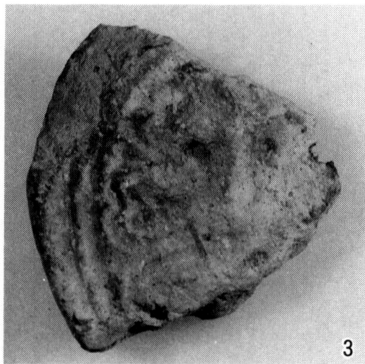
第41図版



8



7



3



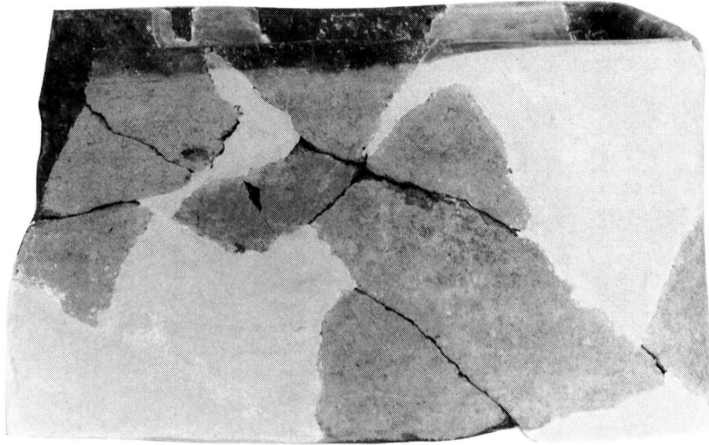
2



1

出土遺物 2

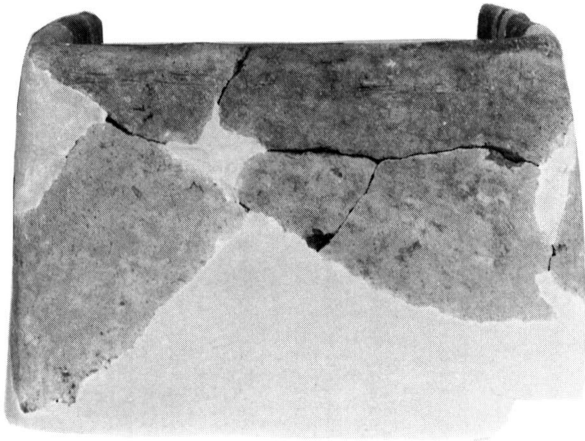




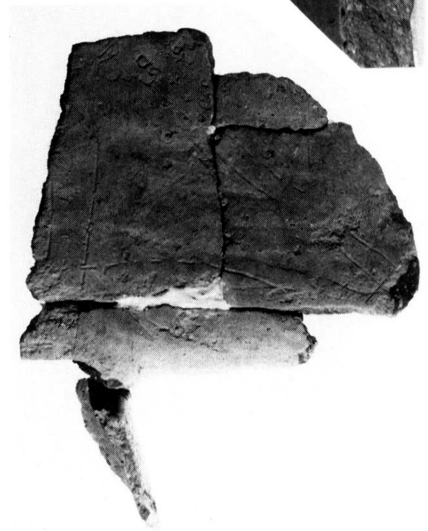
身側面



断面



身小口



身小口と脚

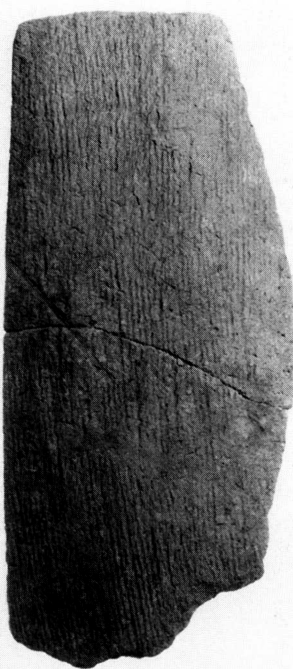


脚

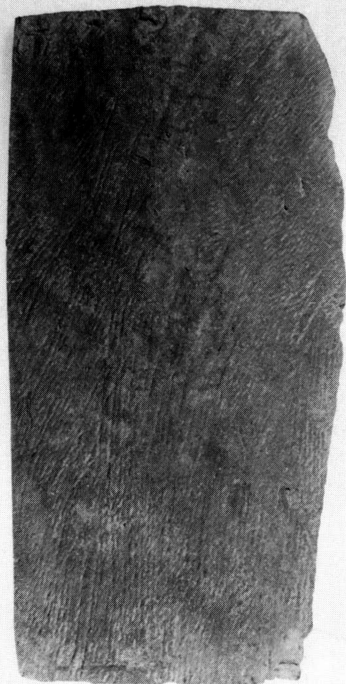


蓋

出土遺物 3



5



7

出土遺物 4

## 総社市埋蔵文化財調査年報 5

1995年 8 月 31 日 印刷

1995年 8 月 31 日 発行

編集発行 総社市教育委員会  
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社  
総社市総社一丁目10番24号

